東方――亀兎忍――

緑野ボタン４号

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
東方――亀兎忍――

【Ｎコード】
Ｎ５８７８Ｚ

【作者名】
緑野ボタン４号

【あらすじ】
メスの亀に転生しました。太古の幻想郷世界からスタートです。
（タグ補足：タートルズの設定をちょっと使っていますが、原作キャラとかは出ません。ガールズラブの描写はギャグの範囲です）

1話「死後の世界」

人は死ぬと、どうなるのか。
肉体の話ではなく、精神はその後、どうなるのか。
有史以前から存在する疑問だろう。
現代日本に生を受け、冠婚葬祭のときくらいにしか信心を発揮しないなんちゃって仏教を崇拝する俺は、死後の世界なんてものに明確なビジョンなど持ち合わせていなかった。
しかし、実際に死んでみるとそうは言っていられない。
俺は交通事故に遭った。乗っていた通学バスが交差点で対向車の大型トラックとぶつかった。何が原因だったのか、今となっては確かめようがないが、起こったものをとやかく言っても仕方がない。俺が生きていれば文句の一つも言っただろう。だが、あいにく俺は死んだ。
事故の直後、大きな衝撃で体が吹き飛び、壁に叩きつけられ、それからの記憶があいまいだ。人間、不思議なものでぶっちぎりの恐怖体験に遭遇すると、妙に達観してしまうものなのか。そのときの俺は自分が死ぬことに根拠のない確信を持ち、その考えを冷静に受け止めていた。
そして、現在に至る。

「ぴー、ぴー！」

俺は気がつくと、真っ暗な場所にいた。えらく狭っ苦しい場所だ。その窮屈さに耐えられず、必死に暴れていると、自分を取り囲んでいた壁が壊れた。
外から入ってくる光がまぶしい。目がよくみえない。まぶたが溶接されてしまったかのようにぴったりと閉じて開かない。体の様子

も何か変だ。まともに立つことができず、腹ばいになって前に進むことしかできない。とにかく、まずはここがどこなのか確かめなければならない。

「ぴー！」

幸い、耳はよく聞こえたが、ぴーぴー泣く声しか聞こえない。動物の鳴き声のような気がする。そのとき、盛大な地鳴りが起きた。何事かと驚いたが、そのおかげで目を開けることができた。光の痛さに耐えながら、ようやく周囲を確認する。

そこには、山があった。巨大な岩山だ。それだけならまだよかった。なんと、その山、動くのだ。さっきから響く地鳴りの音、それはこの山の足音だった。

これは何の冗談なのか。振り返ると、俺の後ろにはでっかい卵らしき物が何個もかたまっておいてあった。ほとんどの卵が割れて、中から人と同じサイズはあろうかという子ガメがわさわさ孵化している。そう、亀だ。あの甲羅を持った爬虫類のアレ。

さっきからぴーぴー鳴いている声はこいつらのものだった。それにしても馬鹿でかい。なんの怪獣映画だ。いや、でかいのはそれだけじゃない。俺の周囲に生えている植物。木だと思っていたらどうも違う。これは草だ。バナナの木は本当は草だと聞いたことがあるが、そういう種類ではない。どうみてもそこらへんの道に生えていそうな雑草が、何メートルもの高さまで育っている。あそこに見えるのはタンポポだろうか。黄色い花は小さい物でも座布団くらいのサイズである。

ここまでくればさすがに気づく。これは周囲の物が巨大化したのではない。俺が小さくなったのだ。信じられないがそう考えるより他にない。どうみてもこれは映画のセットとか、そういう次元に収まるものではなかった。

そして、なぜ小さくなったのかと言うと、それについてもだいた

いの推測はついている。いや、気づかないようにしていたと言うべきか。端的に言うと、俺は亀になっていた。子ガメである。俺の周りでぴーぴー鳴いている奴らと同類である。

「ぴいいいいいっ！？」

とりあえず叫んでみたが、当然人語は話せそうにない。

落ちついて考えてみよう。これは、仏教で言うところの輪廻転生というものではなかろうか。魂は死後の世界で新たな生を受け、命は巡る。俺はあの事故で死に、そして次の生を受けてカメになった。しかし、自分で考えたものの、何とも信じがたい説である。

しかも、俺は前世の記憶をもったまま転生したことになる。これはどういう仏の思し召しか。ヒトに転生できたならいざ知らず、よもやカメとは。カメに人間の心など不要ではないか。

そんなことを考えていると、地鳴りが止んだ。岩山と思っていた存在が動きを止めたのだ。そいつはカメだった。とんでもなくでかい。俺の体が小さいため、大きく見えると言うこともあるが、隣に生えている草の大きさから目算しても普通のカメの域を超えている。ゾウガメとかそういうレベルじゃない。軽自動車くらいの大きさはある。

そんな存在が現れたなら、普通の人間なら恐怖する。俺もその例にもれなかった。カメの本能がそうさせるのか、俺は自分の甲羅の中に引っ込んだ。そんなことをしたところでどうにかなるとは思えないが、関係なかった。とにかく怖い。

しばらくそうしていると、落ちついてきた。俺が何かされる気配はない。恐る恐る顔を外に出す。

巨大ガメが俺をガン見していた。

慌てて甲羅に引っ籠る。

『でーてーこーいー』

「ぴっ！？」

今、声が聞こえた。間延びして聞き取りにくい声だったが、確かに意味をもった言葉だ。それも、頭の中に直接響いてくるような、不思議な声だった。これは、巨大ガメの言葉だろうか。とすると、カメ語？　そんなものが動物の世界にあったとは。

『なーんーでーかーくーれーるー？　おーかーあーさーんーだーよー？』

どうやら、この巨大ガメ、俺の母親のようだ。

1話「死後の世界」（後書き）

ウワアアア！

まだ前の作品を完結させてないのに新作を投稿してしまったあああ！

……まあ、誰も見てないだろうけどね……（泣

2話「あっという間に時は過ぎ」

それから俺のカメとして生活が始まった。

はっきり言って、過酷だった。自然界は厳しい。生まれたての赤ちゃんなど、他の動物にとってかっこうの獲物である。常に捕食の危険にさらされているのだ。子ガメたちは、親ガメの足の下にずっと隠れていなければならない。

幸いにもうちのビッグマザーは、この付近の生態系の中でも上位にいるらしく、天敵と呼べる生き物はいないようだった。名前があるようで、迂木というそうだ。母ちゃんが腰を据えている内は安全である。その甲羅の下に潜んでいれば敵に襲われる心配はない。

しかし、ずっとその場にとどまっていることはできない。エサを確保する必要がある。カメの生態について詳しくはないが、爬虫類だから授乳はしないのだろうな。どうやら、俺たちは雑食のようだ。大人になると草を食べて生きていけるようだが、子どものうちは肉しか食べられないらしい。迂木は子ガメたちのために狩りをする。

意外なことに動きの遅い迂木にも狩りはできた。しかし、その方法が常軌を逸している。あるとき、水場に集まっていた野ウサギ目がけて口から光弾を発射したのだ。まさに怪獣である。なんでも、妖力という不思議エナジーを使っているらしい。うちの母親は妖怪だった。前からおかしいと思っていたが、どうもこの世界は俺が昔いた世界とは違うのかもしれない。

ただ、相手も俊敏な野生動物である。そういった狩りはほとんど失敗に終わった。とにかく、迂木は動きが緩慢なのだ。それに、光弾は発射されれば一直線にターゲットに向かって飛んでいくが、禍々しい妖気の気配があふれ出すので、危険を感じ取った動物たちはたちどころに逃げてしまう。

なので、俺たちが動物の肉を食う機会と言えば、運よく漁られて

いない死体を見つけたときくらいのものだ。いつもは虫を捕まえて食べる。地面に埋まっているイモムシなどを食べることが多い。迂木が妖気をこめて足をふみならすと、びっくりして地表に出てくるのだ。アリの巣なんかも狙い目である。

ただ、こうして今では死体だの虫だのと平然と語れるが、最初はやはり相当の抵抗があった。現代日本で暮らしていた俺にとって、そんなゲテモノを食べるなんて無理だと思った。しかし、食わなければ飢えて死ぬ。まともにエサが取れない時期だってあるのだ。いつも十分にすべての子ガメにエサが行きわたるわけではない。子ガメたちもそれがわかっているから、他の奴らを押しのけてでもエサを独占しようとする。遠慮していたのは最初だけだった。バーゲンに群がる主婦がごとく、俺はエサをむさぼった。

俺はエサを独占するようなことはなく、収穫が少ないときは最低限自分に必要な分だけを食べたが、他のカメはそうではない。弱い子ガメは衰弱し、力尽きていった。それに、移動中はどうしても他の動物に狙われる危険が高い。迂木は必死に俺たちを守ってくれるのだが、いかんせん動きがトロすぎる。さっと飛び出してきた狐に咥えられていった子ガメが何匹もいた。一瞬の隙をついて空から飛びかかってきた猛禽類に連れ去られた子ガメも何匹もいた。

『くーそー！　まーてー！』

迂木は子ガメたちに愛情を注ぎ、死んでしまったり食べられたりしたときは怒り、悲しんでくれる。が、それはごく短い間だけだ。

『まー、いーやー』

思うに、迂木はアホなのだ。一応、人間に近い感情らしきものはあるが、基本的に動物の本能に忠実に生きている。俺たちの種は多産型である。子を多く残して、次世代に命をつなぐ。子が多く死に、

わずかな生き残りしか大人になれないことは始めからわかっているのだ。迂木は例外的に長生きだったので妖怪化したようだが、もともとそう強い種というわけではないようだ。俺も長生きできれば妖怪化するのだろうか。いや、こうやって人間の記憶をもっている時点ですでに妖怪のような気もするが。

ところで、俺は雌ガメとして生まれてしまったようだ。ただ、雄とか雌とか以前にカメだしな。確率二分の一の結果だ。いまさらどうしようもないことである。

迂木は二百年くらい生きているらしい。たまに俺らと同種のカメと会うのだが、どのカメよりも巨大だ。長く生きれば生きるほど、体内の妖力が成長して強い妖怪になれるという。他の雌カメは、一度の子育てで最後まで育て上げることができる子の数はだいたい１匹か、２匹といったところである。迂木はさすが妖怪、優秀であり、今のところ俺を含めて７匹の子ガメが残っている。

『かーしーこーいーのー』

迂木は俺のことを『かしこいの』と呼ぶ。まだ、名前をつけられてはいない。他の子ガメたちも『ちっこいの』とか『すべすべの』としか呼ばれない。

この迂木の言葉は“念話”という妖術らしい。テレパシーみたいなものだ。実際にしゃべっているわけではない。どういうわけか、俺は念話が使える。普通は妖怪化するくらい長生きしないと使えないそうだ。しかし、たまに生まれつき知能が高い突然変異のような固体がいるらしく、それかもしれないと言われた。迂木とは辛うじてコミュニケーションがとれるが、兄弟子ガメはまったく反応してくれない。

そうそう、能力と言えば、どうも俺には特別な能力があるようなのだ。それは『程度の能力』と呼ばれている。これは、妖怪であるとかそういうことは関係なしに、先天的にもつ裏ワザ的なチカラだ

という。実は迂木も『身を守る程度の能力』というものを持っている。そのおかげで長生きできたそうだ。

『程度の能力』を持つ者は、自ずとその効果と使い方を知る。俺の持つ能力は『注目を集める程度の能力』である。まじで使えない。以前俺が生きていた世界でなら使い道があったかもしれないが、今の俺はただのカメ。いたずらに注意を惹くようなことをすれば肉食動物の餌食になってしまう。

そんな殺伐とした野生ライフを送っていた俺は、ある日、ついに迂木から名前をもらった。

『かーしーこーいーのー。おーまーえーのーなーはー……』

葉裏。葉っぱの裏と書いてヨウリと読む。俺の甲羅の色が濃い緑色だったのでそう名付けられた。日の光を浴びる明るい表側の色ではなく、暗くどんよりとした深い緑だったので葉裏である。

他の子ガメたちも立派な名前をもらった。意味を理解できていないようだが。カメ社会に名前なんて不要である。迂木は妖怪として知能を持っていたために、自分の子ガメたちに名前を与えるということをしてみたようだ。俺以外の兄弟たちはなんのことかわかっていない様子である。

迂木はアホなりに一生懸命名前を考えてくれたようなので、俺もこの名前を大切にしたいと思う。

『じゃー、きょーかーらー、ひーとーりーだーちーしーてーねー』

え、なんですと？

3話「沢の巨木」

俺の体長は１５センチくらいになっただろうか。ミドリガメくらいの大きさである。どうやら、カメ社会ではこのサイズになると独り立ちする決まりらしい。

マイビッグマザーからの突然の宣告に、茫然とする俺。兄弟たちは歩み去っていく迂木をぴーぴー鳴きながら追いかけた。向こうもカメだがこちらもカメ。両者ともに足が遅いが、圧倒的な歩幅の違いで迂木は森の奥へと消えていった。

それからの俺たちは死に物狂いだった。日々、外敵から襲われる恐怖におびえて暮らした。カメ並みの脳みそしかもたない兄弟たちがうらやましい。俺は下手に人間の感性を持つせいか、毎日がハッピーバースデイ気分だよ。

のろまなカメが群れていたのでは敵の目につきすぎてしまう。俺たちは散り散りに別れた。それが、俺たち兄弟の別れだった。その後どうなったのかはわからない。

俺は森の中を少しずつ移動していった。いつもハラヘリ状態だった。改めてマイビッグマザーの偉大さがわかる。この体では虫一匹捕まえることも困難だ。草をたべたべ飢えをしのいだ。

そして、ある日転機は訪れた。

鷹に強襲されたのだ。見つかったと思ったときにはもう遅い。俺は慌てて甲羅に引っ込む。鷹は俺を捕まえると空高く飛び上がった。

（まずい！　死ぬうっ！）

俺の自慢は甲羅のかたさだ。クチバシで突かれたくらいじゃ壊れない。しかし、鷹もそれをわかっている。迂木に教えてもらったことがある。上空から捕えたカメをわざと落っことし、地面に叩きつ

けて甲羅を粉砕するのだと。そんなことされたら死んじゃうってば。
絶体絶命のピンチ。容赦なく鷹は爪を放した。重力の赴くまま自由落下の恐怖を堪能する俺。これまでの人生、いやカメ生が走馬灯のように脳裏をよぎった。俺はまた死ぬのか。願わくは天寿をまっとうしたかった。
俺が次の転生先はどうか人間でありますようにと祈っていると、甲羅に走る衝撃。だが、それはかたい岩場の感触ではなかった。ごぽごぽと体が沈んでいく。水だ。俺を捕まえた鷹はドジっ娘属性でも有していたのか、うっかり俺を水場に落としてしまったようである。

（ふう……なんとか助かった）

それにしてもここの水はきれいだな。森の奥深く、河川の上流域にまで来てしまったようだ。澄み切った美しい沢の中心に、天を突くような巨木が一本、立っていた。
この木はただの木ではないと、直感が告げていた。大きな力を感じる。しかし、それと同時に弱っていることがわかる。木は枯れかけていたのだ。病気だろうか。これほどの大きな木となると、何千年という樹齢があるかもしれない。

『だれ……か……たすけ……』

そのとき、念話が聞こえたような気がした。いや、間違いなく聞こえた。その声はなんと目の前の巨木から聞こえてくる。この木が助けを求めているのだろうか。もしかすると、この木は妖怪なのか。長生きすると妖怪になるのなら、植物にだって当てはまらないとは言えないだろう。

（どうしたんだー！）

俺は念話で話しかけてみたが、答えがない。こちらに気づいていないようだ。俺が小さすぎて感じ取れないのかもしれない。そうだ。こんなときこそ俺の能力『注目を集める程度の能力』を発揮すべきときだ。

俺は能力を使いながら再度呼びかけてみた。

『あな、たは……？』

今度はこちらに気づいたようである。

『ちいさきものよ……わたしは、やまいにおかされた……もうじき、しぬでしょう』

この妖怪は迂木よりも頭がよさそうである。俺の予想通り、病気のようだ。枯れている部分は幹の深くまで浸食しており、もう助かる見込みはないとのこと。

『しかし、いちまんねんをいきつづけた、そのあかしをのこしたい……わたしの、ちから、を、あな、た、に……』

そう言うと、木は生気を失った。なんとなくだが、わかる。この木は死んだのだ。依然としてその姿は壮観なものだが、すでに亡骸となった。そして、遥か高みにある枝から一つの実が落ちてきた。ちょうど俺の前で止まるようにしてころころと転がってくる。

その実は琥珀色に光っていた。文字通り、輝いているのだ。圧倒的な妖力を感じる。極限まで練り上げられた妖力の渦がクルミほどの大きさの実の中に閉じ込められている。これは、この木の力のすべてが詰まった物だ。一万年分の成長した妖力が余すところなく凝縮されている。

え、これって、ものすげー、タナボタじゃね？

（木さん、ありがとう！　キミの死は無駄にはしない！　パクッ……うめえええええ！）

というわけで、おいしくいただいた。前世も含めて、今まで食べてきた物すべてを超えるほどのおいしさだった。あっという間に果汁の一滴も残さずに完食した。

その直後だ。俺の体の中にとんでもない量の妖力がみなぎってきた。この力さえあれば、もう何も怖くない。捕食者の存在に怯える必要もなくなる。これで俺も妖怪に……あれ？　なんだか、体の調子がおかしい。手足が動かない。どうなってるんだ。

『あは、あはははは、あはははははっ！　ばかね、わたしのちからが、ただでてにはいるとおもったの？　もう、あのからだは、つかえなくなってしまった。こんどは、あなたをなえどこにして、せいちょうするわ』

（ナニィィィ！？）

ですよね。そんなうまい話、あるわけないか。

どうやら、病気で死にそうになった巨木さんは、自分の体を捨てて新しい種を俺の体に仕込んだらしい。莫大な妖力の影響によって、種は俺の体の中で急成長を始める。

（いたい、いたい、いたいィィィ！）

体中に激痛が走る。俺の腹の中で異物が大きくなっていく。根が内臓に食い込み、四肢の末端まで浸食される。普通ならとっくに死んでいるだろう。だが、俺は死ぬことも許されず、終わらない激痛

に苦しみ続ける。俺の体内に張り巡らされた根っこは完全に根付き、俺は全身を支配されてしまった。

それが終わると、次は“芽吹き”が始まる。腹の種が膨れ上がる。やばい。今度こそ死ぬ。ミシミシと音を立てて俺の自慢の甲羅が悲鳴をあげる。

（いぎやああ、ああ、あがあああっ！）

『あはは、あはははっ！　わたしのえいようになってね』

ついに俺の甲羅は砕けた。内側から押し上げてきた種の芽が、俺の背中から飛び出す。逆に腹側からは根っこが飛び出し、地面の奥深くへと伸びていく。そして、俺の意識は静かに暗転していった。

4話「目覚め」

『タスケテ！　タスケテ！』

だれかの声がする。この声はどこかで聞いたことがある。
さて、俺はだれだったっけ。そうそう、葉裏だ。
俺が見た最後の記憶。できれば思い出したくないほどグロテスクな死に様だった。ということは、俺はまた転生したのだろうか。そういえば、この声は何だ？　脳内に響いてくる。

『タスケテ！』

（だれだよ、あんた。俺は眠いんだ）

ここは暗い。体も動かない。意識だけが鮮明だ。そして、俺の体の中に熱い何かが流れ込んでくる。そこで気がついた。熱い。体が焼けるように熱い。

（あちっ、あちちち！　なんだ、なにが起こってるんだ？）

俺の目が覚めたのも、この熱さのせいだ。血管に溶けた鉄を流し込まれているような感覚である。もうこんな拷問はたくさんだ。確かに俺は前世で徳を積むようなことはしなかったが、こんなひどい目に遭わされるような業も積んだ覚えはない。

『ニンゲンガクル！　コロサレル！』

この声、どこかで聞いたことがあると思ったら、俺に寄生しやが

った巨木妖怪じゃないか。俺はまだ生きているのか？
俺は自分の意識を集中させる。ここは、俺の体だ。体中に木の根が張り巡らされている。なんだか、成長しているような気がするな。俺は寄生されながらも生きていた。いや、巨木に生かされていたのか？
俺の背中からは幹が生えている。意識は俺の体を離れて、そこをずっと上に登っていくことができた。今の俺はヤドリギと一心同体になっているのだろう。現在のヤドリギは、俺が最初に見たときの姿よりもずっと立派に育っていた。あれからどのくらいの年月が経ったんだ？

「ようやくたどり着いた。これが噂に名高いあの『見られずの霊樹・六島苞』か……」

「ああ、周辺の森に張ってあった結界は厄介だったが、なんとかなってよかったぜ。見ろよ、この大きさ、超一級品だ。こいつは金になるぜ」

ふと、幹の下あたりに意識をやると、人間がいた。久しぶりに会ってみたはいいが、なんか悪人臭がするな。素直に喜べない。どうやら、この木を切り倒すつまりらしい。なるほど、それで巨木妖怪の奴は慌てているのか。
六島苞なんてかっこいい名前で呼ばれているようだけど。結界とか張って人間対策はしていたようだが、破られたみたいだ。ざまあ、と言ってやろう。さっさと切り倒されるがいい。
それで、六島苞の奴はさっきから何をしているんだ？

『コノカラダハ、モウダメダヨ！　タネヲノコサナイト！』

この体はもうダメだ。種を残さないと……って、こいつもしかし

て!?

俺は自分の体に意識をもどした。案の定だ。こいつは、自分の持つすべての妖力を俺の体に集めている。あのときと一緒だ。樹木という体を捨て、すべてを果実に結集させて逃げようとしているのだ。体が熱かったのは、妖力を流し込まれていたせいか。

（おい、こら！　人の体に何してんだ!?　俺は芋じゃねえぞ！）

『ジャマシナイデ！　“ミ”ハ、デキタ。アトハ、“タネ”ヲイレルダケ……』

実はできた、後は種を入れるだけ、ってどういうことだ?

そのとき、幹の上部に俺の意識が違和感を感じ取った。今度は何だ。意識を向けると、そこにコブのような物ができていた。それが、だんだんと根元に向かって降りてくる。

よく調べてみると、それはなんと六島苞の命の結晶だった。そうか、これが種なんだ。実は果肉と種でできている。果肉には妖力がこめられており、種には六島苞自信の魂が宿っている。果肉の妖力を養分にして六島苞は成長するのだ。実を食べる者は、言うなれば土壌。そこに果肉の養分を振りまき、最上の苗床を作り出す。

前の六島苞と比べて、今は格段に妖力が上がっているのがわかる。そのあまりにも膨大な妖力は、枝に実らせることができないほど強大なため、地下に存在する俺の体を苗代わりにして妖力を蓄えていたらしい。あくどい。

つまり、種である“コブ”が俺の体に到達してしまえば、“実”が完成することになる。それだけはやめさせなければならない。つーか、やめろ!

（とまれー!）

『ワッセ！　ワッセ！』

だが、俺は無力だった。俺と六島苞とでは、生命としての格が違うようである。俺の意識と違って、六島苞の意識は“コブ”という形で実体化している。現に幹の中を移動しているコブを、実体のない意識の集まりでしかない俺が止めることはできない。俺自身の体もいまや六島苞の根っこに絡みとられて支配されてしまっている。抵抗はできない。

残す可能性として、実体のある連中に止めてもらうしか他に道はない。つまり、人間たちに木を切り倒してもらうのだ。種は幹の中をゆっくりと下降している。根にたどりつく前に切り離してしまえば俺の勝ちだ。

『人間たちよ！　俺の声を聞けい！』

「な、なんだこの声は！？」

俺は念話が通じないか試してみた。うまくいったようだ。人間たちは動揺している。

『俺の結界を破ったことは褒めてやろう。だが！　お前たちの思い通りにはならんぞ！』

「もしかして、六島苞がしゃべってるのか？」

「これは妖怪が使う念話という術だ。なるほど、こいつにも自我というものがあるようだ」

よし、次は俺の能力を使って、注目を集める。俺と六島苞は一心同体。つまりは、俺の能力の適用範囲に六島苞もいることになる。

俺は六島苞の魂が宿る結晶に“注目を集めた”。

「ん？　なあ、何か感じないか？」

「お前もか？　そうだな、存在感、とでも言えばいいのか……あのあたりに強い気配を感じる」

「おお！　オレもそう思ってたんだ！」

「私は霊感があまり強くないのだが、それでも感じ取れるほどの大きな存在だ。幹の中に何かいるのか？　ん？　しかも、幹の中をゆっくりと……下に向かって移動していないか！？」

ここまでくれば、後は俺の演技次第だ。頼むから、早く伐採してくれよ！

『な、何を言っているのだ！　下等な人間風情が！　俺は何も隠してなどいないぞ！』

「なんだ、こいつ動揺し始めたな。ははーん、そうか、わかったぞ」

「なにがわかったんだ？」

「これだけの存在感、おそらくこれは妖怪の“心臓”だ」

「なんだそれは？」

「妖怪の核、魂みたいなものだ。こいつ、心臓をとられまいと地下に隠そうとしているのさ」

「なんだと!?　じゃあ、さっさと切っちまわねえとな!」

その調子だ!　やれ、ひとおもいにやってくれ!

たが、問題は時間だな。ゆっくりではあると言っても、確実にコブは降りてきている。早く切らないと手遅れになってしまう。

そこで、人間たちはチェンソーを取り出した。ブオブオとエンジンをふかせる。よっしゃ!　文明の利器最高!　これならいける!

『まて!　まってくれ!　頼むからそれだけは……!』

「こっちにも都合があるんでな。悪いが、それはできねえ相談だ!」

ブイイイイギュアアアッ!

とうとう幹に刃が入った。その振動は、俺にも痛みとなって伝わってくる。まだ、俺と六島苞はつながったままなのだ。痛みも共有している。しかし、ここで弱音を吐くことはできない。これも荒療治だ。我慢我慢!

『ヤメテ!　キラナイデ!　イタイ!　タスケテ!』

……ちょっと、可哀そうな気もするけど、お前も俺にとんでもないことしてくれたからなあ。自業自得だ。

チェンソーはさして抵抗もなく、ずぶずぶと幹に食い込んでいく。自分の体の一部を切り離される感覚はぞっとしない。目の前で腕をぶつ切りにされているようなものだ。痛みに気絶しそうになる。耐えろ、俺……!

そして、メキメキというきしむ音がしたかと思うと、どずううん

と木が倒れる音が響いた。俺は自分の体の中に六島苞の存在を感じない。

（勝った……！）

俺は勝利の味を噛みしめた。

5話「妖怪化」

「うわ、なんか幹から出てきたぞ。つかまえろ！」

「これが六島苞の心臓か。研究所に高く売れるぞ！」

地上では、人間たちの喜ぶ声が聞こえる。俺もおめでとうと一声かけてやりたいが、体がまだ動かないのでじっとしておこう。しかし、ほどなくして辺りが騒がしくなってきた。

「なんだ、どうした！？」

「妖怪だ！　森の妖怪たちが出てきやがった！」

「ちっ！　妖怪封じのシールドがもたなかったようだな」

「どうする、まだ六島苞の木材を切り出してないぜ！？」

「……諦めよう。今の装備じゃ、やりあうのはきつい」

「ちくしょう、せっかくここまで来たってのに！」

「いや、収穫ならあったさ。六島苞の心臓を手に入れた。これだけでも目ん玉が飛び出るくらいの金になるぜ！」

人間たちは逃げるように帰って行った。六島苞は研究所というところに売られるらしい。元気でな。

その後、何かの気配がぞろぞろと俺の上に集まってくるのを感じ

た。妖力を感じる。ということは、こいつらが人間がさっき言っていた妖怪か。こんなに大勢の妖怪と接するのは初めてのことだ。今までに会った妖怪は、迂木と六島苞だけだからな。

「六島苞様が切られてしまったぞ！」

「なんということだ……これでは、森を守る結界がなくなってしまう」

「おのれ、人間どもめ！」

あれ？　もしかして、六島苞って結構慕われてたのかな。こんなに多くの妖怪に悔やんでもらえるなんて。そういえば、結界を張ってたのは六島苞だったな。ということは、間接的にこの森の妖怪たちを守っていたということになるのだろうか。

あと、この妖怪たち普通に人語が話せるんだな。妖怪ってみんな念話で話すのかと思ってた。

「……いや、待て！　何か地中にいるぞ！」

「本当だ！　とてつもない妖力を感じる。これは六島苞の妖力だ！」

あれあれ？　まずいぞ、俺のことがばれてる。

言われて気づいたが、俺の体にはとんでもない量の妖力がため込まれていた。六島苞の芋にされていたせいだ。俺の体に六島苞の全妖力が結集されていることになる。

「切り株の下から感じる。六島苞様！　そこにおられるのですか！？」

どうしよう。返事したほうがいいのかな。それはそれでややこしくなりそうだし。

「六島苞様が我々に何か残してくださったのかもしれん。掘り起こしてみよう！」

うわあ、結局面倒なことになりそうだな、おい。

＊　＊　＊

それから大勢の妖怪たちが集まって、切り株を引っこ抜く作業が始まった。俺の体は相変わらず動かない。念話を使えば土の中からでも呼びかけることができるのだが、何と声をかければいいのかわからず、困り果てていた。そもそも六島苞とこの妖怪たちの関係ってどんなものだったんだ。

掘り起こし作業は難航したようだ。そりゃこれだけデカイ木である。切り株もでかい。根も広大にひろがっている。昼も夜も休みなく、妖怪たちは働いた。

三日目にして切り株の周りの土を取り除いていく作業がようやく終了し、それから引っ張り上げるため、奮闘しているらしい。話を聞いていると、てこ原理で持ち上げてロープで引きずりだす算段のようである。

「オーエス！　オーエス！」

まるで祭りのような熱気で作業は続けられた。そして、５日目。ついにお披露目である。

「これが六島苞様の根っこか……」

「でっけえ岩がからまってやがる。だからあんなに重かったのか」

「まて、この岩から妖力を感じるぞ」

岩？　今の俺は岩に見えているのだろうか。

それより、問題なのはこれからどうするかということだ。依然として体はがっちりと何かに拘束されるように固まっていて、ピクリとも動かせない。さすがに俺も焦ってきた。このままずっと固まったままとか、ないよね。まさか、六島苞の呪いとか？

妖怪たちには、俺の姿はでかい岩に見えるらしい。絡みつく木の根を取り払い、水で洗ってきれいにしてくれたようだ。あざっす。

「さて、取り出してみたはいいものの、これが何なのかさっぱりわからないな」

「翡翠のように綺麗な緑色だな。欲深い人間たちならば、途方もない価値で扱うだろう。もしかして中に何か入ってるんじゃないか？」

「……壊してみるか？」

「バカな！　六島苞様のバチがあたったらどうする！？」

「もう根っこも掘り出しちまったんだし、今さらじゃねえか」

『いやまてまて！』

「「「！！！」」」

しまった！　妖怪たちが物騒なことを言いだすから、つい念話で話しかけてしまった。

「これは念話……！　ということは、六島苞様なのですか！？」

『あー、なんだそのー……俺は六島苞だっ！』

しまった！　勢いに任せてつい口から出まかせを言っちゃった。

「おお！　六島苞様は生きておられたのですね！？」

『い、いや、俺はまあ、六島苞であって六島苞ではないというか』

「どういうことでしょうか？」

くそう、ここまできたら出まかせで全部押し切るしかない！

『六島苞と呼ばれた物は、俺の表層にすぎん。俺は強すぎる力を自ら封じ込めるために、あえてあのような姿をとっていたのだよ！人間たちが表層部分を刈り取ったため、封印が解けてしまったようだな』

「なんと！　そうでありましたか！　さすがは六島苞様です！」

半分以上嘘だが、いいや。どうせ、ばれやしないさ。

だが、いつまでも六島苞様と呼ばれ続けるのはさすがに嫌だな。

『その六島苞という名だが……それはあくまで俺の表層につけられた名前だ。俺の名前は葉裏という』

「そうでございましたか。失礼いたしました、葉裏様」

『うむ。それで、俺は長らく眠りについていたので、最近の事情について疎い。というか、ぶっちゃけあんたら、だれですか？』

「ええ！？　我々のことを覚えてないのですか？」

『お前たちと接していたのは、表層だからな。俺自身は眠っていたのだ。まず、俺がどれだけの時間眠りについていたのか知りたいな』

「さようですか。しかし、そう言われましても、六島苞……葉裏様は我々のような有象無象の妖怪とは一線を画する存在であります。どれだけの悠久の時を生きてこられたか、我々には想像だにできません。少なくとも数千年はくだらないのではないでしょうか」

どうも、かなりの時間、俺は冬虫夏草状態だったようだ。

でも、確か前に六島苞に会ったときは、一万年生きたって言ってたな。少なくとも、それだけ分の妖力が俺の中にあるということになる。

『で、人間がいるようだな。奴らとはどういう関係なのだ？』

「はい！　人間は我々妖怪の宿敵です！　傲慢なる人間は我々のすみかを脅かし、無秩序に森を切り開き、河を汚します！　駆逐すべき存在です！　あろうことか、葉裏様に手をかけようとするとは、何と不届きな……」

『俺が結界を張っていたはずだろ？　それはどうなった？』

「葉裏様の結界は永らくこの森を守護してくださいました。人間どもも、手出しができないほどの強力なものです。我々は油断していました。人間はカガクという恐ろしい術を使います。おそらく、葉裏様の結界は人間のカガクの力によって破られたのではないかと思われます」

妖怪の妖術と人間の科学が対峙する世界なのか。六島苞ってめちゃ強い妖怪なんだろ？　その力を無効化するとか、人間側強すぎじゃね？

『結界を破られた原因はわかったのか？』

「はい。この森の結界は葉裏様の“小株”によって形成されています。一か所だけ、小株が枯らされていました。何かの薬を使って小株を攻撃したでしょう。人間の薬は植物に多大なる被害を与えます。普段は小株を見張る妖怪がいるのですが、警備の隙を突かれました。面目次第もありません」

なるほど、六島苞の小株で結界は作られていたのか。なら、あの人間たちは草枯らしでもまいたのだろう。植物系妖怪の弱点を突いたわけだ。

『六島苞……俺の表層は強かっただろ？　人間たちに対して結界以外の対抗策はなかったのか？』

「ええ、六島苞様は確かに強大な力をお持ちでしたが、それは守りの力でした。この森は人間の都に最も近い妖怪の拠点です。人間の都から発せられる“カガクブッシツ”によって、通常なら枯れ果ててしまうはずの森を、六島苞様が結界の力で浄化されていたのです。我々がここに住めるのも六島苞様の結界のおかげでした」

六島苞の妖術は戦闘向きではなかったようだ。拠点を作るのには優れているが、一度内部に侵入されると手出しができなかったのだろう。

なんかやばい気がしてきた。六島苞、性格は悪いけど、妖怪の社会に貢献してたんだな。どうしよう、あっさり死んじゃったよ。

「そういうわけでして、今、この森には結界がない状態なのです。お目覚めのところ、申し訳ありませんが、なにとぞ新しい結界を葉裏様に作っていただきたいのですが」

『え？　あー、結界？　ハハッ！　結界ね、結界！　……ちょっと、無理かなー、なんつて』

「え……」

妖怪たちの顔は見えないのだが、辺りがざわざわと騒がしくなる。それもそうだ。いきなり自分たちの住む森が安全ではなくなると言われたのだから、動揺しないわけがない。

「な、なぜなのです！？　警備を怠った我々への罰でしょうか！？」

『いや、そうじゃない。あの結界を張っていたのは確かに俺の表層だが、その表層である六島苞が死んだのは事実だ。今の俺には結界を張る術が使えない』

これは正直に話すしかない。使えないものは使えないのだ。嘘をついてもすぐにわかる。妖怪たちは絶望したかのような悲鳴を上げ始めた。ど、どうしよう……

「で、では、この森はもうおしまい、なのでしょうか……？」

『……』

「このまま人間に追い立てられるがまま、ここを立ち去るしかないとおっしゃるのですか！？」

『……』

「葉裏様！　我々はこれからどうすればいいのですか！」

『……』

「ああ、六島苞様が生きていらっしゃったのなら、こんな思いはしなくてもすんだのに！」

『……』

「もしかして、葉裏様は六島苞様と同一の存在ではないのではないですか？」

『な、なにをコンキョにソンナことという！』

「そうだ、六島苞様と葉裏様が同じ存在だというのなら、どうして同じ結界の術が使えないんだ！　おかしいじゃないか！」

『だから、それは俺の表層がだな……』

「表層、表層ってオラたちには意味がわかんねえよ！　もっとわ

かるように説明してくれ！」

「そうだ！　ちゃんとした説明をしろ！」

「あなたはこの森を守る存在ではなかったのですか！？」

「俺たちはあんたのことをずっと信じてきたのに」

ええい、うるさい。なんだこいつらは。政治家にクレームをつけるプロ市民か。

妖怪たちの訴えはだんだんとただの罵声になっていく。いい加減、俺も頭に血が上ってきた。好き勝手に言いやがって。俺に何の責任がある。俺はただ生きようとしただけだ。だいたい、お前たちが文句を言うべき相手は俺じゃないだろ。お前たちの敵は人間じゃないのか。

『かーーーーーっつ！』

俺は能力を使った。それまで怒鳴り声をあげていた妖怪たちは、ぴたりと声を止めた。一斉に俺に視線が集まる。皆が俺に“注目”した。

『ぴーぴー泣きわめくんじゃねえよ、お前らは生まれたての子ガメか！？　いつまでも六島苞様が守ってくれるからこの森は安心だあ！？　甘ったれるんじゃねえ！　お前らはいつまで六島苞のすねをかじる気だ！？　妖怪なんだろ！　強いんだろ！？　だったら、立ち向かえばいいじゃねえか！　人間どもをブッ潰してやればそれで済む話だろが！』

俺はマイビッグマザーを思い出した。小さな俺たち兄弟を残して

去って行った迂木。俺たちゃ所詮畜生だ。ボンボンおぼっちゃまじゃあるまいし、泣きわめけば誰かが助けてくれるなんて考えること自体が間違ってる。

「で、でも、俺たちだけじゃ人間には勝てない……この森に妖怪が住めるのは、結界があったからで……」

『六島苞は俺だって言っただろ。あいつの力は、今、俺の中にある。あいつは結界術を使えたが、俺が使える力は違うのさ』

「葉裏様は、どんな力が使えるのですか!?　もしや、かつての六島苞様を上回るほどの力が……」

『さあな。使ったことないからわからん』

「「「ズコー！」」」

なんだお前ら、ノリノリじゃん。

『だが、俺が強力なチカラを持っていることは確かだ。だったら、対抗策はいくらでも立つ。そうだろ』

妖怪たちは静かに俺の話に耳を傾けていた。俺の説得は無駄ではなかったようだ。徐々に気力を取り戻していく様子がわかる。

『人間なんてとるに足りねえ！　俺ら妖怪の底力を見せつけてやるんだよ！　わかったか、野郎ども！』

「「「ウオー！！」」」

こうして、俺はこの森をまとめる妖怪の親玉になった。
って、なんでだよ！？

6話「人化」

ちょっと熱くなりすぎたと思ったら、いつの間にか俺は妖怪のリーダーになっていた。

もともとそんな気はこれっぽっちもなかったのだが、乗りかかった船に乗らされてしまった感が否めない。まあ、六島苞に対する罪悪感も少しはあったのかもしれない。この力はもともとあいつの力だ。あいつはこの力をこの森を守るために使っていた。それはもちろん打算があったとは思うが。力は持つだけで責任を生む。俺にはこの森の妖怪たちをあおった責任もあるのだ。その言質くらいきっちり自分で面倒みたいと思うのだ。

はっきり言って、六島苞の力を奪ったことを後悔なんてしていない。奪われた方が悪いのだ。もともと自分の力ではないからと言って遠慮する気もない。これは紛れもなく、今の俺の力に他ならないのだから。そして、六島苞の背負ってきた物を俺が引き受けなければならない義務感なんてものは微塵も感じていない。

正直な話、これはただの傲慢なのかもしれない。俺がちっぽけなカメだったころ、生きることに必死でそれ以外のことなんて考えている余裕はなかった。しかし、今はこうして何の因果か有り余るほどの力を手に入れた。その余裕があるから、なんとなく、妖怪のリーダーという重役を引き受けてしまったのだろうか。

まあ、そんな俺の気持ちの話はさておいて、妖怪の森は人間との決戦に向けた準備に入っていた。元人間として、妖怪と殺し合うことにためらいはあるのかというと……ない。不思議なものだ。人を殺すことに嫌悪を感じない。善良な人間を進んで殺したいとは思わないが、その程度の感情だ。妖怪にとって、人殺しは種族的な禁忌ではない。むしろ、人間は科学が発達する以前まで妖怪の食糧にされていた。俺はやはり、身も心も妖怪になってしまったということ

だろうか。
結界がなくなって森はじわじわと化学物質による汚染を受け始めている。早急に都を襲う作戦を立てなければならない。
だが、その前に……

（いつになったら、俺は動けるようになるんだ？）

俺が親玉に就任してから三日、いまだに体を動かすことができない状況が続いている。妖怪たちには、封印が解けたばかりで慣れていないだけだと言い訳してきたが、さすがにそれも限界だろう。
この三日、俺は自分自身の体を徹底的に調べていた。そして、わかったことがいくつかある。
まず、俺が動けない理由。それはそう苦労せずに判明した。原因は甲羅の重さだ。なぜか、俺の甲羅がめちゃっくちゃ巨大化している。全長１０メートルくらいである。そのせいで重すぎて動けないのだ。
さらに、甲羅の大きさは巨大化したのに、肝心の俺の体そのものは大きくなっていないのである。いや、正確には大きくなっていないわけではない。１５センチのミドリガメだったころと比べれば格段に成長している。１メートルちょっとくらいにはなっているような気がする。しかし、それでも甲羅の大きさと比較すれば極小と言わざるを得ない。したがって手足が外に出せない。体がすっぽり甲羅の中に埋もれてしまっている状態なのだ。
なぜ、こんな体になってしまったのか。その原因も自分なりに仮説は立った。
マイビッグマザーは妖怪だった。二百年生き続けて妖怪になった。もし、俺の妖力成長率が迂木と同程度だとすれば、俺は確実に二百歳を超える年月を生きていると計算できる。それほどまでに俺の妖力は成長していた。迂木の体の大きさは軽自動車くらいあったが、俺の体はせいぜい１メートル。確かに体長で言えば迂木の方が大き

かったが、内包する妖力の量では俺がまさる。かつての記憶と照らし合わせて見ても、明らかに俺の妖力の方が大きい。

それは、六島苞の妖力を取り込んだのだから当然だと言われそうだが、少し待ってくれ。さっきの話は六島苞の妖力を抜きにした話である。つまり、俺自身が一つの個体として長い年月を生きたために得ることができた妖力についてのことだ。

では、六島苞の妖力はどこにいったのかというと、それが問題である。なんと、すべて俺の甲羅にため込まれていた。すなわち、俺の肉体は俺自身が得た妖力で成長したが、俺の甲羅は六島苞の妖力を詰め込まれた結果、ぱんぱんに膨れ上がってしまった、というわけである。そのため、肉体と甲羅との間の成長に不均等が生じたのだ。

この不均等を解決するため方法は一つしか思い浮かばない。甲羅の妖力を俺の肉体に移し替えるのだ。そうすることで甲羅は縮小し、ちょうどいいサイズにもどる。

六島苞の妖力を自分の体に取り込むことについては問題なかった。長い間くっついていたせいか、取り込んでも違和感はない。しかし、大変だったのはその量である。とにかく、甲羅の中の妖力が多い。どれだけ肉体に移し替えても小さくならない。いくら拒絶反応が出ないからと言っても、常時輸血状態ではさすがに気持ち悪くなってくる。しかも、このエネルギーは熱力学の法則に忠実なようで、エネルギーが高い方から低い方へと移動しやすい性質があった。そのため、気を抜くとドンドコもっさり妖力を甲羅から肉体へ送りつけられてしまう。妖力の移動は細心の注意を払って少しずつ行わなければならなかった。

「なんだか、葉裏様の体が小さくなっていないか？」

「え？　た、確かに心なしか縮んだ気がする……葉裏様、いかがなさいましたか！？」

『だ、大丈夫だ、気にするな……ゲフッ！』

その後も順調に移し替えは進んだ。確実に甲羅の大きさは小さくなっている。だが、なぜか俺の肉体の方はどれだけ妖力を吸っても肥大化しなかった。妖力の多さが体長と比例しているわけではないのか。

どんどん小さくなる俺を見て、妖怪たちが心配している。とりあえず、動きやすいように姿を最適化していると言っておいた。

そして七日目。俺はついに日の光を拝むことになる。

「う、ううう……」

「葉裏様！」

妖力の摂りすぎで頭がくらくらする。俺の周りには妖怪たちが集まっているようだ。

「なんとか、外に出られたみたいだな……あれ？　俺、人語を話せるぞ？」

カメだったときは当然、人の言葉など話せなかったが、妖怪化した影響だろうか、ちゃんと言葉を発音できる。まあ、喋れて困ることはない。

「どうだ、これが今まで封印されていた俺の真の姿だ！」

今の俺は、きっとマイビッグマザーのように美しいカメにバージョンアップしているはずだ。妖怪たちもあまりの神々しさに絶句して……

「「「……」」」

絶句している。なんだ？　思っていた反応と違う。俺の姿はどうなっているんだ？

少しずつ光に慣れてきた目で、自分の姿を確認する。甲羅は暗緑色で宝石のように輝き、手足は真っ白くすべすべでぷにぷにした肌である。

「えっ！？　ちょっと待て！」

俺は二足歩行で駆け出し、近くの水辺へと向かう。そして、水面に映る自分をその目で見た。

少女だ。美少女がいる。甲羅と同じ深い緑色の髪に瞳で、整った顔立ち。肌は陶器のように白くなめらか。そして、何より目立つのは甲羅だ。体がすっぽり甲羅の中に収まっており、それぞれの穴から頭と手足が出ている状態、つまり、ガメラの着ぐるみでも着ているかのような格好なのだ。

「なんじゃこりゃあああああ！？」

俺の精神はかつてない大ダメージを受けてしまった。

7話「戦いどころじゃない」

整理しよう。

聞くところによると、長い年月を生き、妖力が高まった妖怪は元の姿とは異なる形へと体を変化させることが多いらしい。これは自分の種族の普遍的な形状という範囲に固定されていた肉体と、妖力によって強靭になった精神の間で乖離が生じ、その違いを中和するために起こる現象のようだ。人型に体が変化する者は割と多い。だから、俺の体が人間っぽくなったことはそう珍しいことではない。

どうして、美少女に変化したのか気になったが、そういえば俺は雌ガメだったし、さらに言えば、実は前世でも子どもの頃はこんな容姿をしていた。小さいころはよく女と間違われたものだ。もうとてつもなく昔の記憶なので、すっかり忘れていた。

そこまではいい。納得できる。問題は、俺が完全に人化しなかったということだ。甲羅が残っている。非常に間抜け。

「だあああ！　ちくしょおおお！」

「葉裏様、落ちついてください！」

想像してほしい。幼い少女がカメの甲羅をすっぽり着用している姿を。かっこ悪すぎる。すごくかっこ悪い！　俺はどうしても我慢ならなかった。どうして、１００％人間か、１００％カメの体にしなかったのだ。なぜ混ぜたし。そんなハイブリッドは要らない。そういえば、前世の世界のアメコミに、忍者で亀のミュータントが登場する作品があった。あれの中途半端なコスプレ状態である。

さらに、この甲羅、クソ重いのである。ものすっごい肩が凝る。俺がプレスをきめると、地面が陥没する。軽く歩くだけでズシンズ

シンと音がする。少女姿の俺がトコトコ歩くその擬音がズシンズシンだぞ。能力なんて使わなくても視線を一人占めだ。そんな物を背負って肩が凝るくらいくらいですむのだから、俺も強くはなっているのだろう。しかし、それとこれとは話が別。俺はこの甲羅をなんとかできないか必死に模索した。

だが、うまくいかなかった。甲羅は背中側と腹側の二つのパーツがあり、どうにか分離できないか試してみたが、だめだ。この甲羅も体の一部である。引っぺがすことはできそうにない。甲羅の妖力をもっと吸い取って小さくできないか試してみたが、一向に変化がない。それに俺の現時点での肉体の容量では、これ以上妖力の移し替えはできそうになかった。妖力の飽和状態で吐きそうになる。それ已然の問題として、甲羅が小さくなったところで取り外すことができなければ意味がない。まったくの無駄骨だった。

しかし、俺は諦めていない。何が何でもこの甲羅をはずしてみせる。それから、俺は人間との戦いなどそっちのけで、甲羅との戦いを繰り広げることになる。

検証その1：高所からの落下

「いくぜっ！　おらあああああ！」

俺は高い崖の上から躊躇することなく飛び降りる。一瞬の浮遊感。そして、急速落下。地面に激突する前に、手足と頭を甲羅の中に引っ込める。ちなみに、どういうわけか甲羅の中は質量保存の法則を無視するかのような無限スペースになっている。どう考えても人体では構造上不可能な動きでにゅるんと甲羅の中にもぐりこむことができた。手に物を持ったままでも中に入れる。しかも、その物を甲羅の中に入れっぱなししておくことができるのだ。まるで、四次元ポケット。便利である。

そして、崖から飛び降り甲羅の中に避難した俺は、見事崖下に着

地する。すさまじい地響きがおき、隕石でも落下したかのようなクレーターができる。だが、甲羅は無傷。

検証その２：崖上から岩を落とす。

「こいやっ！　おらあああああ！」

今度は妖怪たちに協力してもらい、崖の上から巨大な岩を転がして落としてもらった。その崖の下に俺がいるという寸法さ。

岩は俺の甲羅に直撃した。殻の中に引っ込んでいた俺には、岩が落ちる音は聞こえたが、直撃を受けたというのに何の衝撃も感じない。むしろ、生き埋めになったことの方がこまったが、その岩は片手で持ち上げることができたので、無事脱出できた。甲羅に比べれば断然軽い。

検証その３：火あぶり

「やけやっ！　おらあああああ！」

妖怪の中には、妖術によって火を起こせる奴が何匹かいた。そいつらにありったけの炎を出してもらい、甲羅を焼く。これがほんとの甲羅干しだ。

甲羅の中にいる俺はまったく熱さを感じなかった。１０分くらいこんがり焼かれたが、やはり無傷。先に妖怪たちの妖力の方が尽きた。俺の背中のマイホームは、安心の耐火設計のようである。

他にも様々な苦行を自らに科したが、甲羅の防御力はそのことごとくに耐えきった。六島苞の妖力が詰め込まれた結果、妖力が結晶化して金属をも超える硬度になってしまったみたいだ。美しい緑色の光沢は色褪せることがない。

ところで、妖怪たちは俺のマゾ苦行を見て、なぜか士気があがっ

ている。検証によって様々な攻撃をことごとく跳ね返した行為は、俺の力を見せつけるパフォーマンスになったようである。事実、防御面に関しては今のところ不安はない。攻撃面でも以前に増してかなり強化されている。少女の見た目からは想像もつかないほどの怪力を発揮できる。この森には俺より強い妖怪はいないようだった。

尊敬のまなざしで見られるのは面映ゆいところだが、なんにせよ士気が高まったのはいいことである。甲羅については、現状では手出しできそうにない。そろそろ、人間たちとの戦いに備えて本腰を入れていくか。だが、俺は絶対に諦めない。いつか、この甲羅を脱ぎ捨ててやる！

8話「妖怪四天王」

人化してから、俺は衣服を着ていない。はだかんぼうである。甲羅のせいで着物を着ることができないのだ。まあ、妖怪なんて大半が素っ裸の連中であり、別におかしくはない。甲羅のせいで露出している部分は頭部と四肢だけだし。だが、立ち上がると常にガニ股猫背の姿勢を強要されるのはいただけない。まるで四股を踏む相撲取りのごとしである。すべて甲羅のせいだ。忌々しい奴め。二足歩行は早く移動できて便利だが、甲羅の重さが尋常でないので長時間立ちっぱなしでいるのはきつい。なので、いつもは寝っ転がっている。

そのうち、寝たまま移動する手段はないものかと考えつき、手足をひっこめた状態で転がりながら走る“甲羅ローリング走法”を編み出した。坂の上から転がると、障害物をなぎ倒しながら進むことができ、爽快である。攻防一体のなかなか使える技だ。

それはさておき、人間との戦について。とりあえず、情報を集めることが先決だ。人間の都がどのような防備を持っているのか知らないと仕掛けることもできない。鳥型の妖怪を編成し、偵察部隊を作ってみた。彼らが集めた情報によると、都は“シールド”と呼ばれるもので守られているらしい。これは結界のようなあやかしの技ではなく、科学的に作られたエネルギーフィールドであるようだ。科学と妖術の相性は悪い。物理法則によって徹底的に理論武装された科学技術は、妖術のようななんだかわからない曖昧な力を強く拒絶する。妖術でこのシールドを破壊することは難しいという結論に至った。

シールドを破るためには、物理的な方法で攻撃するしかない。幸いにも、シールドは対妖術に重点を置かれた設計になっているのか、強い衝撃に対してはそこまでの耐久力を持たない。なぜ、シールド

の性質がわかるのかというと、以前、森に入ってきた人間が個人用の簡易シールド形成装置を装備していたことがあったらしく、そのときの経験から推測できたという。力押しに弱いようだ。

人間側は妖術さえ無効化できれば、妖怪など恐るるに足りないと思っているようだ。まあ、その考え方はもっともである。妖術を封じられれば、あと俺たちに残された手段といえば怪力くらいのものしかない。例外的に、『程度の力』に関しては、シールドの防御効果も薄いという。だが、能力持ちは数が少ない。俺も含めてこの森に、５匹くらいしかいなかった。それに、必ずしも戦闘に役立つ力ばかりではない。俺みたいにな。

となると、後は兵の数を集めて正面突破するくらいしか方法はないわけだ。人間側もその手は十分に予想できるので、対策もされているに違いない。詰んでないか、これ？

「うぬー、だめだ。うまくいかない」

今、俺は人間に対抗するための兵器が作れないかと模索している。といっても、この森にある資源と言えば木材しかない。さすがに鉱脈が都合よくこの地にあるということもなかったし、砂鉄があるとしてもそこから精製するなんてやり方も俺は知らない。木でなんとかするしかない。

とりあえず、俺は投石機が作れないか試案してみた。だが、俺は投石機の詳しい構造なんて知らない。なんとなく形は思い浮かぶが、それを現物にすることは話が別だ。まずは小さな模型を作っているところだ。それが完成したら、本格的な製作に取り掛かるつもりである。

しかし、うまくいかない。どうやって作ればいいんだ？

「葉裏様、何を作っているのですか？」

「ん？　これは投石機といってな。大きな岩を遠くに飛ばすための道具だ。これをたくさん作れば、遠くからシールドを破壊することができるかもしれないだろ？」

「ほう、そのような道具があるとは知りませんでした」

「いや、俺も詳しく知らないから、今試案中なんだ。というか、煮詰まっている。手を貸してくれ」

そう言ってみたが、妖怪は難しそうな顔をするばかりだ。

「葉裏様、まことに言いにくいのでありますが、その投石機というものは人間の作る道具ではありませんか？」

「確かに、そうだな。それがどうした？」

「“道具を作る力”は人間の領分でございます。我々妖怪には、複雑な人間の道具を作ることはできません」

人間と同程度の思考力を持っていれば道具の作成くらいわけないと思っていたが、どうも違うらしい。妖怪は種族的にモノを作るという行為が苦手なのだそうだ。実におかしな感覚だが、言われてみれば確かにと思う節がある。かれこれ数日は投石機の製作に頭を悩ませていたが、一向に良い案が浮かばないのだ。これは妖怪の性分なのか、それとも俺の頭がアホなのか。

妖怪は便利な道具を手に入れようと思ったら、人間から奪うことでしか得られない。中には鍛冶が行える妖怪などもいるそうだが、それでも都のような科学技術には到底及ばない文明レベルの品である。この妖怪の不器用さが、人間にすみかを追われる敗因になったのだろう。

これでは、仮に投石機の設計図が完成したとしても、妖怪たちを動員して量産させることなんて到底できそうにない。投石機は諦めるしかないか。

「それだと、本当に正面突破しか他に方法がなくなったな。援軍の要請はどうなった？」

この森にいる妖怪の数はせいぜい１５００匹程度である。それに対して、人間の都にはその規模から見ても１万人くらいはいると思われる。圧倒的に数が足りない。妖怪一匹の強さは容易に人間一人を上回るが、それにしたって少なすぎる。それに、人間には高度な文明によって生み出された兵器がある。武装した兵士なら、十分に妖怪とも渡り合える。そこで、援軍の要請は急務だった。

求めた先は、妖怪四天王と呼ばれる連中である。なんか、逆に弱そうに聞こえるがそんなことはないらしい。六島苞もその一匹だったとか。後の三匹も強豪揃いのようで、この森のようにそれぞれが拠点を構え、多くの妖怪を従えているそうだ。今回の戦いに協力してくれるかどうか、打診してみた。

「はい、それが……色よい返事をいただけたのは、東の猪々獄様のみでございました」

「まあ、そんなもんか」

妖怪だから人間との一大決戦をやると言えば、血の気の多い連中が集まるかと思ったのだが、現実は厳しい。一匹集まっただけでもよかったと言える。はたして、猪々獄とやらがどれほどの軍勢をひきつれて来てくれるのか、期待してまつしかないだろう。

9話「気になるアイツはイカしたブタ面」

さて、それからしばらくした後、援軍がこの森に到着した。
その様子は圧巻だった。なんとその数、５０００匹である。百鬼夜行どころの騒ぎではない。地を埋め尽くさんばかりの妖怪たちがこの森へとやってきたのだ。正直、ここまで数をそろえてくれるとは思っていなかった。嬉しい誤算である。
遥か東の地から旅をしてきた彼らを、森で受け入れ、休ませた。妖怪の森はかつないほどのにぎわいを見せている。これだけの数が集まったということは、おそらく人間に知られているだろう。５００もの妖怪の行軍を隠すことなんてできない。軍を動かす以上、しかたのないことだ。六島苞が死んだことは人間側も知っているはずなので、拠点を失う危険を感じた妖怪たちが決起することは、向こうも予測していた可能性だろう。人間側も、妖怪たちが弔い合戦に来ると踏んで、戦いに備えていると考えていた方がよさそうだ。
俺は森の深部、六島苞の切り株が残る沢にいた。協力者である東の妖怪四天王、猪々獄に挨拶をするためだ。これだけの妖怪を引き連れて来てくれた彼には、感謝しなければならない。到着からほどなくして、猪々獄は現れた。名前からなんとなく予想がついていたが、ブタの妖怪である。

「よく来てくれた、猪々獄よ。俺はこの森をまとめる妖怪、葉裏だ。このたびの戦いに手を貸してくれることを深く感謝する」

「……お前は誰だブヒ？　この森の長は北の妖怪四天王、六島苞ではなかったのかブヒ？」

猪々獄の見た目は、猪八戒のような感じと言えばわかるだろうか。

人間とブタを掛け合わせたような容姿をしている。背中には5本の大槍を担いでいた。腹周りはだぶついているが、腕の筋肉はモリモリだ。しかも、その体格はかなりのもので、背は5メートル以上ありそうである。見かけ倒しではなく、妖力もすごい。さすがは四天王を名乗るだけのことはあり、六島苞とタメを張るくらいの実力があると一目でわかる。妖力の多さで言えば、俺の方が勝っているようだが、戦闘力で言えばどちらが上かわからない。

でも、語尾にブヒをつけるのはやめてほしい。

「六島苞は俺の異称だ。これからは葉裏と呼んでくれ」

「ふん、クソでかい木の妖怪だと聞いていたが、実際会ってみれば、なんともまあちびっこい亀妖怪だブヒ。こりゃあ、人間にやられるわけだ！　ブヒヒヒヒヒ！」

猪々獄の挑発とも取れる軽口に、援軍の妖怪たちが合わせて笑いだす。それを見たこの森の妖怪たちは、自分たちの親玉を馬鹿にされ、怒り心頭といった表情になっている。ここで喧嘩させれば士気にも影響がでる。俺は怒り出す妖怪をなだめた。

「まあ、そう言うな。これからともに人間と戦おうと言うのだ。仲良くやっていこうじゃないか」

「人間をぶっ殺すことに関しちゃ、異論はねえブヒ。そのために俺様のかわいい手下どもをあつめてやったんだからな。だが、戦の前にはっきりさせておきたいことがあるブヒ。それは、俺様とお前、どちらが大将にふさわしいか、ということだ」

なるほど、それはもっともだ。トップが二人いたのでは、指揮系統が混乱する。混合軍を形成する以上、どちらの長の命令が優先さ

れるか決めておかないといけない。
猪々獄は、背中から槍を一本抜きとり、ぶんぶんと振り回してその槍先を俺に向けた。

「俺様と勝負しろブヒ！　勝った方がこの軍の指揮をとる。どうだ？」

俺としては、指揮権を猪々獄に譲ってやってもいいと思っているが、この戦闘狂にそんな話は通じないだろう。それにここであっさり負けを認めると、それはそれでこの森にもともといた妖怪たちの士気が下がりそうだしな。

「いいだろう。受けて立つ！」

「ブッヒッヒ！　そうこなくっちゃなあ。おら、お前は武器を構えなくていいのか？」

武器ねえ。正直、この森で調達できる武器なんて石器の斧くらいしかない。こん棒は俺の筋力をフルパワーで使って振ると一瞬で壊れてしまう。石器はそれよりも若干マシといった程度なので、使えるものがない。素手で殴った方がまだいい。

「俺の武器はこの体一つさ！」

「上等だブヒ！　俺様は東の妖怪四天王、猪々獄！　いざ、尋常に勝負っ！」

名乗りを終えた猪々獄は剛速の槍を突きだしてきた。はやい！
俺は反応できずにモロに突きを食らってしまった。俺の腹の甲羅装甲がその攻撃を防ぐが、突きの威力はすさまじく、体が後方に吹き

飛ばされる。

「ぐっうう！　なんて衝撃だ……！」

槍を食らった腹のあたりがジンジンと痛む。初めて肉体にダメージを通された。相変わらず甲羅に傷はついていないが、衝撃が内部まで届いている。このブタ、やりおる。

「……驚いたブヒ。まさか俺様の槍を無傷で防ぐとは！　それに、その体の重さ、はんぱねえブヒ。俺様の手の方が痺れちまったブヒ。妖怪四天王の名は伊達じゃねえってことか。ブッヒヒヒヒヒ！　こいつは面白くなってきたブヒ！」

今度は俺の方から仕掛ける。さっきは猪々獄の突きに対応できなかったが、それは俺の経験不足が原因であって、やろうと思えば素早く動ける。俺は猪々獄の懐に踏み込み、拳を放つ。

「くらえ！」

「はあ！　なんだその攻撃は！　遅すぎるブヒ！」

「なに！？」

脂肪でたぷたぷの巨体のくせに、こいつは俺の拳を難なくかわした。確実に俺より速く動ける。それを認めなければならない。拳を突きだした俺の体勢は隙だらけだ。そこに鋭い槍が連続して襲いかかってくる。

「ちいいいいっ！」

俺は甲羅ガードで猛攻を耐える。ぐおう！　モーレツゥ！
甲羅で防いでも自転車とぶつかったくらいの衝撃は通る。地味に痛い。
パンチが届かないとなれば、他の手で攻めなくては。俺は妖力弾を放った。迂木が使っていた技と同じものだ。妖力をたんまりもっている今の俺なら何発でも打ち出すことができる。妖力弾は確かに速い。しかし、威力が弱かった。猪々獄に当たっても全然ダメージを与えた様子はない。相手も高い妖力を持っているので、当たる直前に相殺されているのだろう。それにほとんど避けられている。

「ふぬっ！　その甲羅は厄介だブヒ。ならば！　甲羅以外の場所を狙うブヒ！」

今度は甲羅から露出している手足を狙ってきた。ま、当然だよな。こちらもその手は読んでいた。右腕目がけて突きだされた槍。俺は右腕を甲羅に収納する。

「な、なんだブヒ!?」

「はっはっは！　そう簡単にやられるか！」

猪々獄は予想外の動きをされたことに驚いている。そこにわずかな隙ができた。今だ！
俺は甲羅の中に入れていた木の実を取り出す。これは、散歩中に見つけた物だ。蜜柑のような見た目をしているので、食べられるのかと思って少しかじってみたところ、壮絶な辛さに悶えることになった。これは何かの武器に使えるかもしれないと思って甲羅の中に大量に入れておいたのだ。
それを空中に放り、妖力弾で打ち抜いて炸裂させた。

「なんだこれは、うわあああ！　目がしみるううう！」

果汁が周囲に飛び散り、猪々獄の目に入った。俺は頭を甲羅に引っ込めて回避した。よし、この隙に攻撃だ。

頭を収納しているので前が見えないが、前方に感じる猪々獄の妖力はわかるので位置は特定できる。そこ目がけて渾身の蹴りを入れる。

「ぐふうっ！」

やわらかい肉を蹴る感触がした。頭を出すと、腹を押さえてよろめく猪々獄がいた。追撃しようとすると、さっと後ろに飛び退ってかわされる。そう何度も奇襲は通用しないか。

「はあはあ！　やってくれたな、子亀妖怪！　もう容赦はせんブヒ！」

今の一撃は効果があったようだが、猪々獄を倒すには至らなかった。タフな奴だ。目潰しのせいで涙目になって見えない視界もすぐに回復するだろう。

「当たり前だ！　最初から容赦なんかすんじゃねえ！　全力で来い！」

これは長期戦になりそうだな。

10話「バトルの末に」

それから戦いは三日続いた。まじで。

猪々獄は執拗に俺の露出部を狙ってくるので、俺は甲羅に完全避難し、甲羅ローリング走法で戦った。手足を引っ込めているので、殴る蹴るの暴行ができない。転がって体当たりしても避けられるのが目に見えているので、ちまちまと妖力弾を撃って攻撃した。たまに激辛蜜柑攻撃を織り交ぜたりしたのだが、二度も通用する相手ではなかった。

その攻防が三日も続いたのである。観戦していた妖怪たちは、最初の一日は固唾をのんで見守っていたが、今ではこの泥仕合の有様に呆れて退屈しているようだ。

戦いは俺が守りで猪々獄が攻めという形で延々と続いた。それにしても、猪々獄のやつ、なんて諦めが悪いんだ。疲労困憊でふうふう息をつきながらも、まったく手を休めることがない。5本あった槍もすでに4本が苛烈な攻撃の負荷に耐えきれず折れている。俺は甲羅に閉じこもって妖力弾を撃ち続ければいいだけなので、楽なものだ。この際なので、甲羅ローリング走法を練習してみた。今では自由自在にブイブイいわせることができる。さすがに猪々獄の動きはそれより速いので、攻撃は当てられてしまうのだが、うまい衝撃の受け流し方がわかってきたので、今では食らってもそんなに痛くない。

「なあ、猪々獄。もうそろそろ俺の勝ちってことでいいじゃないか？」

「いいや！　はあ、ふう、まだだブヒ！　まだ終わらんブヒ！　ふひー！」

「だったらお前の勝ちってことで、もういいからさ」

「黙れブヒ！　俺様は負けないブヒ！　今に見ていろ！　こんな甲羅、粉々に砕いてやるブヒー！」

パキン！

そのとき、何かが割れる音がした。最後の一本の槍も折れてしまったのか。

いや、違う。

「ちょ、ちょっと待ってくれ、猪々獄！」

俺は甲羅ローリング走法で距離を取り、頭と手足を外に出した。猪々獄の方を見れば、その手に持つ槍はまだ折れていない。では、さっきの音は何だったのか、恐る恐る甲羅を確認する。

猪々獄の攻撃に耐え続けた甲羅は、以前と変わらぬ傷一つない美しさで光っている。だが、背中側と腹側の二つのパーツのつなぎ目に違和感があった。そこに手を当て、思いっきり引っ張る。

パカァ！

「……開いた……」

まるでドアでも開くようにすんなりと動いた。どさりと甲羅が俺の背中から滑り落ちる。俺は自分の体に目をやる。男だったころいた相棒はなくなっており、胸はほんのりとふくらんでいる。いや、そんなことより俺はその少女のおなかを見ることができたことに歓喜した。それはつまり、俺の苦しみからの解放を意味する。

「とれたーーーーーー！」

天に向かって手を広げながら嬉しさのあまり絶叫した。全裸で。これで、もうかっこ悪くない。普通の人間と同じ姿だ。普通って、すばらしい！

「ぶ、ブヒヒヒヒ！　とうとう俺様の攻撃がお前の自慢の甲羅を砕いたようだな！　もうお前を守る盾はないぞ！　くらえええ！」

俺が幸せをかみしめていると、猪々獄が槍を突きだしてきた。なんて無粋な奴だ。しかし、今の俺は確かに防御力が落ちている。あんなぶっとい槍を食らったら、さすがにただではすまないだろう。

猪々獄が放つ渾身の一撃。俺はなんとかそれをかわそうと横に飛ぶ。

「……！　な、なんだ！？」

ぎりぎりで槍をかわし、牽制の拳を繰りだそうと思っていた。だが、自分の思惑とはまったく異なる事態が起きていた。回避のために行った横っ跳びによって、十メートルほど移動していたのだ。

（体が軽い……！）

どういうわけか、体が羽のように軽い。そうか、甲羅を脱ぎ捨てたからだ。甲羅分のウエイトがなくなった今、俺は以前以上のスピードで動くことができる！

俺と猪々獄のスピードは互角になった。しかも、相手は疲労している。勝機が見えた。妖力弾で猪々獄を足止めし、その隙に素早く後ろへ回り込む。

「これで終わりだ！」

「ぐぼう！　へばぶっ！　ぐあああああ！」

俺のラッシュが猪々獄をとらえた。そして、長きにわたる戦いにようやく決着がついたのであった。

＊　＊　＊

こうして、妖怪軍の最高指揮官は俺に決まった。猪々獄は副指揮官である。いかに妖怪四天王の一匹といえども、三日の死闘の疲労は色濃く、戦いの後はダウンして動けなくなっていた。

それから、甲羅について調べてみた。冷静になって考えると、もしかしてブッ壊れてしまったのではないかと不安になったが、そんなことはなかった。なぜか俺の体と分離しても妖力を失わずにいる。背中側と腹側のパーツが、二つにカパッと開く仕組みは便利なもので、これにより、甲羅は着脱可能になったのだ。甲羅の中を覗き込んで見たが、光を当てても真っ暗で何も見えない。手を入れると、ずぶずぶとどこまでも沈んでいく。中に何か入っていたので取り出してみると、激辛蜜柑だった。腐っていた。そっと中にもどした。どうなってるんだ、この甲羅。

俺は甲羅を抱えて沢の水の中に入った。やっぱり甲羅がないと動きやすい。肩も凝らない。実に気分爽快である。体を洗っていると、改めて女になったのだなあと実感した。だが、特に感慨はない。周りには妖怪たちがわんさかいるのだが、その中で全裸で水浴びしても、羞恥心など起こらなかった。姿形は人間に似ているが、今の俺は似て非なる者なのだ。前世の頃の俺の感覚と、今の俺の感覚ではかなり違いが出ているのかもしれない。自分では、はっきりとわからないのだが。

全裸森ガールとなった俺が、仁王立ちで体を乾かしていると、猪

々獄がやってきた。

「おう、体はもう大丈夫なのか？」

「ブヒヒヒ！　俺様はそんなにやわじゃねえブヒ。それにしても、まさかその甲羅が脱げるとは思わなかったブヒ。俺様の負けだな。お前、強えじゃないか。見なおしたブヒ」

猪々獄にさっきまでのトゲはない。自分が認めた相手には心を開くタイプなのだろう。戦いを乗り越えて友情が深まるというやつか。

「いや、違うな。惚れなおした、言った方がいいかもしれんブヒ」

「は？」

「俺の女になれブヒ。俺の子どもを孕めブヒ」

美少女とブタの化け物のカップリングって、それなんてエロゲ。ドン引きだよ。もちろん、丁重にお断りした。拳を鳴らしながら、丁重に、な。

11話「人妖大戦」

いよいよ、人間たちとの決戦の日が来た。俺たちは妖怪の大軍を率いて都を目指す。
俺と猪々獄はその先頭に立っていた。俺も妖怪だ。後ろでふんぞり返っている気はない。

「葉裏」

「なんだ？」

「この戦いが終わったら俺様と結婚してくれブヒ」

「嫌だ。あと、そのセリフは死亡フラグっぽいぞ」

猪々獄は、あれからずっと俺に求婚してくる。うざい。

「それより、昨日話した作戦はうまくいきそうか？」

「ああ、あれか！　まったく、葉裏は面白いことを考えるブヒ！」

妖怪軍の作戦は突撃の一択である。それ以外にやりようがない。
シールドは３６０度死角なく都を覆い尽くしている。戦力を分散させてシールドの突破に手間取るより、一か所穴を開けてそこからなだれ込む方がいいだろうと、先日会議で決めた。人間側は１万の数がいるが、そのすべてが兵士というわけではないはずだ。妖怪側は６５００。ぎりぎりなんとかなるのではないかという目算だ。
ところで、俺は昨日、猪々獄の能力について話を聞いた。猪々獄

は『槍を遠くまで投げる程度の能力』を持っているという。その能力を聞いて、少し思いついた作戦があった。名付けて『槍と一緒にかっとびましょう作戦』。猪々獄の大槍に妖怪をくくりつけ、投げてもらう。すると、あっという間に都のシールドを突破して中に侵入できるのではないかという作戦だ。妖怪ミサイルである。

結論からして、それは難しいと言われた。投げた槍はすさまじいスピードで飛ぶので、並みの妖怪では耐えられず、目的地に到着と同時にはじけとび、死んでしまうらしい。しかし、例外的に並みの妖怪にとどまらない防御力をもったタフガールがいる。俺だ。俺ならおそらく着地の衝撃にも耐えられるし、孤立しても自分の力でなんとかやっていけるだろう。そのため、俺の背中にはいつでも投げてもらえるように、すでに槍がくくりつけられている。

森から出て、都を前にする平野で俺たちは一時停止した。都の方から何かが近づいて来る。こちらに向けて無機質な声で何か言っている。

『警告します。妖怪たちは直ちに引き返しなさい。これ以上、都市に接近した場合、武力を行使して対処します』

いくつもの銀色の塊がこちらに向かって走ってくる。とうとう、向こうからも兵が放たれた。躊躇してなどいられない。俺は声を張り上げた。

「全員、突撃いいいい！！！」

オタケビをあげて妖怪たちが走りだす。銀色の物体はロボットだった。ロボット兵だ。人間たちはこんな物を作り出していたのか。

俺は焦った。確かにこんなＳＦチックな科学技術を持っている奴らだ。ロボット兵くらいいてもおかしくはなかった。だが、もはや引き返すことなどできない。戦いは始まった。

ロボット兵は近づいてきた妖怪たちに向けて銃を撃つ。妖怪はひるまなかった。ちょっとやそっと腕とか足とかもげても平気な連中である。鉛玉を数発ブチ込まれたくらいじゃ死なない。俺と猪々獄は猛然とロボット兵の只中へと飛び込んでいった。

そこでわかったが、このロボット兵は銃を撃つしか能がない。接近戦に入れば木偶の坊も同然だった。

「ブッヒヒヒヒ！　まったく手ごたえのない奴らだブヒ！」

俺が妖力弾を乱射し、猪々獄が槍を一振りするだけでゴミのようにロボット兵は壊されていく。これなら他の妖怪に任せても大丈夫だな。

「猪々獄！　あの作戦、いくぜ！」

「そうか、ここは俺様たちに任せるブヒ！」

猪々獄が俺の背中の槍をつかむ。『槍と一緒にかっとびましょう作戦』のお披露目だ。

「うぐおおおお!?　お、おもいいい！！」

「しっかりしろ、猪々獄！　それでも妖怪四天王か！」

「ふぬぐぐぐうっ！」

なんとか俺を担ぎあげた猪々獄は、ゆっくりと助走を始める。ずしんずしんと地面にくっきり足跡をつけながら、スピードをあげていく。前に立ちふさがるロボット兵は猪々獄の突進を止めるすべなどなかった。

「それじゃあ、俺は一足先に行ってくるぜ」

「いっくぞおおおおっ！　はあああああっ！　ふんぐっ！」

槍が猪々獄の手を離れた。その瞬間、周囲の光景が急速に後ろに飛び去っていく。これは風速で皮膚がはがれそうだ。俺はたまらず甲羅に隠れた。

甲羅の中にはゴオオオという風の音しかしなくなる。そして、何かにブチあったような衝突音。これがシールドだろうか。音はすぐに止んだ。おそらく、シールドを突破したのだ。槍のスピードはさっきより落ちた気がしたが、それでもまだ速い。そして、さっきのシールドにぶつかったときとは比較にならないほどの音が甲羅の中に響き渡った。耳が痛い。

これは無事に着地できたということか。俺は外に顔をだそうとした。だが、目の前にある壁が邪魔して頭が出せない。どうやら、頭から地面に激突してめり込んでしまったようである。しかも、俺がめり込んだ先は何だか金属質な構造物のようで、がっちりと穴に甲羅がはまり込み、抜け出すことができない。ど、どうすれば。

「なんだこれは！　どこから入ってきた！？」

やべ、見つかった。

「妖怪の仕業でしょうか。まさか、シールドを突破して攻撃を与えてくるとは」

「ロケットの打ち上げは間もなく行われる。万が一に備えて警備を強化しろ」

「はっ！」

俺の姿は謎の物体として捉えられたらしく、特に警戒もなく、人間たちは立ち去っていた。攻撃に使用された武器としか思われなかったようだ。まあ、まさかこんな壁にめり込んだ意味不明の物体を妖怪とは思わないか。

それにしても、ロケットってなんだ？　人間たちは何をしようとしているのだ？

『全妖怪どもに告げる』

そのとき、大きな声が響き渡った。さっきのロボットのような無機質な声ではなく、肉声を拡声器で大きくしたような響きである。

『我ら人間は、穢れきった地上を捨て、新天地に人間の文明を築く。これより、我らは月の世界へと旅立つ』

穢れきった地上？　月の世界？　何のことだ。

『さらばだ！　低俗なる妖怪どもよ！』

そして、大地が揺れた。轟音とともに振動は大きく膨れ上がっていく。

『さらば、地球よ！　いざ行かん、月の世界へ！』

まさか、いや、そんな馬鹿な。人間は宇宙へ向かおうとしているのか！？

12話「宇宙に行ったカメ」

超展開すぎる。なんで宇宙。人間がそんな暴挙に出ることなど、予想できるはずがない。最初から宇宙に逃げることを計画していたのか。だから、あんな足止めにしかならないようなロボット兵しか前線に出さなかったのだ。結局、戦にすらならないまま妖怪と人間の戦争は終わった。

そして、俺は今、宇宙にいる。地球は本当に青かった。もはや茫然とするしかない。

あの大地震はロケットの発射音だった。思いのほか甲羅がめり込んでしまった俺は、死に物狂いで脱出を試みた。だが、時すでに遅し。なんとか抜けだしたときはすでに、地上は遥か眼下に小さく遠ざかっていた。俺が槍に乗って突き刺さった場所は、都市を丸ごと一つ運び出す超巨大ロケットの一部だったのだ。

今、自分がロケットのどの部分にいるのか見当がつかないが、外装の狭い隙間にもぐりこんで振り落とされないように必死に耐えている。大気はほとんどなくなっており、息苦しくてしかたがない。このまま宇宙空間に出たら窒息する。内部に行けば空気があるのだろうが、入口がどこかわからない。普通に入口から入っても、壊して中に入っても、人間に見つかることは必至である。さすがにこの逃げ場のない状況で人間に捕まったら俺でもおしまいだ。

ロケットの飛行速度はとんでもない。考える間もなく宇宙空間に出てしまった。息ができない。苦しい。もうそろそろ死ぬんじゃないかという苦しさが1分続き、5分続き、10分続き……

（あれ？　意外と長くもってるな）

息苦しさはあれど、いつまで経っても死ぬ気配がない。まあ、俺

は妖怪なので生物の範疇を超えているのかもしれない。現に３０分くらい経過したあたりから、呼吸の必要性を感じなくなった。妖怪は息をしなくても死なないらしい。

さて、俺はこれからどうすればいいのだろう。ここでロケットをつかむ手を放せばスペースデブリの仲間入りだ。いや、地球の重力にひっぱられて落下するだろう。摩擦で燃え尽きて死ぬ。甲羅の中に入っていれば持ちこたえるかもしれないが、試す勇気はない。

したがって、人間と一緒に月まで同行するしかない。というか、月なんて不毛の土地だろう。どうやって開拓する気だ。正気とは思えない。ここの人類はかなりＳＦ色が強めだから、オーバーテクノロジーでなんとかするのかもしれないが、わざわざ地球を捨ててまで月に行くことになんの意味がある。確か、穢れがどうとか言っていたが、意味がわからない。俺たち妖怪からしてみれば、汚染物質を垂れ流す人間の方がよっぽど穢れの元凶じみている。

ロケットは地球の衛星軌道に乗ると、そこでいったんエンジンを停止させた。確か、この軌道上を動く運動を利用して燃料の節約をするんだっけ。すると、またもやロケットが大きく振動を始める。今度は何をする気だ。

しばらくしてわかったが、ロケットの三分の一ほどの部分が本体から切り離されていた。この切り離された部分に俺も乗っている。二つに分かれたロケットはどんどん離れていく。燃料をパージしたにしては規模が大きすぎる。もしかして、向こうの三分の二残った方を宇宙ステーションにして、こっちの小さい方を先に月に送るということか。

そして、俺がへばりついたロケットは月に到着した。小さい方とは言っても、その大きさは考えるのも馬鹿らしくなるほどだ。月に着くと、ロケットから無人探査ロボットが出てきた。俺はロボットに見つからないようにロケットから離れる。

（さて、いよいよ月に来てしまったな）

ため息を吐こうとしたが、うまくいかない。そういえば、空気がなかった。これでは言葉を話すこともできないな。話す相手がいないので困らないか。

人間の精神なら、たった一人仲間もなく身一つで月に放りだされれば、動揺なんてものじゃすまないだろう。しかし、妖怪の俺はなんだか気楽なものだった。社会という群れの中でしか生きていけない人間との種族的な違いというものだろうか。

とりあえず、俺も月を歩いて調べることにした。月面歩行は楽しい。悪いが人類より先に月の地面に足跡をつけさせてもらう。強く踏み込んでジャンプすると5メートルくらい浮き上がる。ふんよふんよして歩きづらいことこの上ないが。甲羅を脱ぐともっと高く飛べる。甲羅自体もかなり軽くなっていた。それでも手を放すとボトンと落ちるが。

人間だったら宇宙服着てないとここは歩けないよな。紫外線、直に浴びちゃってるけど、妖怪だから大丈夫だよね。甲羅も脱いで脇に抱えているので、全裸状態である。昔、宇宙は空気がないから内圧と外圧の差で体が爆発するって聞いたことがあるけど、あれは嘘らしい。

昔の人の伝承と言えば、月のウサギを思い出した。夜空に輝く月の模様は餅をつくウサギに見えるとか。地球には妖怪がいたんだし、月にウサギがいるなんてファンタジーがあってもいい気がする。よし、月のウサギを探してみよう。

『そこにいるのはだれです！？』

だが、探すまでもなく、俺は月のウサギ第一号に遭遇してしまったようだ。

13話「うれしくないウサ耳」

目の前に現れたそいつは、人間の男に近い形をしていた。最初は人間に見つかったのか慌てたが、どうやら人間ではないらしい。妖力を感じた。こいつは妖怪だ。

顔立ちもなんだかヨーロッパの人っぽい彫りの深い感じだ。アングロサクソン系というのか。都にいた人間たちは純日本風の顔立ちだったから新鮮だ。金髪碧眼のイケメンである。ただ、残念なことに頭頂部にウサギの耳らしきものがくっついていた。バニーガールの耳を想像していただきたい。あれがもっとリアルになったみたいなの。ピクピク動いてるし、偽物ではなさそうである。

月のウサギがイケメンウサ耳男とは、非常にがっかりだ。腐女子なら喜ぶのだろうか。

『あなたは何者です！　その、どうして裸なのですか！？』

そういえば、この月ウサギは服を着ていた。妖怪の森にいた連中はあんまり人型の者がいなかったし、居ても人外っぽいのばっかりだったので、服を着るという慣習がなかった。せいぜい、腰布としてぼろきれを巻く程度である。俺は甲羅を脱ぐと完全な人型の妖怪だが、常にフルヌード生活を送っていた。月ウサギは、なんというか中世ヨーロッパの兵士のような格好である。こいつらには服を着る文化があるのだろう。

確かに見た目年頃の少女がすっぽんぽんなのは、健常な感覚からすれば色々とまずいな。だが、顔を赤らめて視線をそらすイケメン月ウサギの様子がなんかむかついた。警戒は解かないが、直視はできず、頬を赤く染めながら初心な少年の甘酸っぱい思春期模様を体現したかのようなその表情。そんなサービスはいらねえんだよ。

『悪い悪い、服着るから』

俺は服、というか甲羅を着る。ナチュラルに念話で会話したが、空気がないのだからそれも当然か。念話は音を媒体にせず、相手の頭の中に直接言葉の概念を伝えることができる妖術なので、月ウサギ語がわからない俺でも意思疎通ができる。

『変わった服装ですね。それに、どうしてあなたには耳がないのですか？』

『俺はウサギの妖怪じゃないからな。もとから耳はない』

『？？　何を言っているのかわかりません。あなたの言葉の概念が理解できません』

『あー、俺は月の妖怪じゃないんだ。信じられないかもしれないが、俺は地球から来た』

そう言って、俺は空に見える地球を指差す。だが、月ウサギは苦笑いをするばかりだ。

『からかっているのですか？　アースからここへやってきたなんて、おとぎ話ではあるまいし』

やはり、簡単には信じてくれないようだ。俺はどう説明しようかと頭を悩ませる。

『それよりも、ここに居ては危険ですよ。昨日、この付近でデスフロッグとの戦闘が行われました。もしかすると、狩り残しがいる

かもしれません』

『ですふろっぐ？　なんだそれ？』

『はあ……デスフロッグを知らないなんて、どこの箱入りお嬢様ですか？　とにかく、ここは危険なので、村に避難して……』

そのとき、俺はわずかな殺気を感じ取った。妖怪の殺気は、妖力が微量にこめられるのでわかりやすい。どこから来ているのかと耳を澄ます。

『どうしました？』

『静かに！　近くに何かいるぞ！』

月ウサギの方は気づいていないようだ。俺が警戒の声をかけた瞬間、それは現れた。なんと、地面を突き破って。

『な、なに！？　下から！？』

何か巨大な影が地中から飛び出してきた。まったく、気づかなかった。そうか、音で接近を探ろうとしていたが、そんなことをしても無駄だ。ここには音がない。

出てきたのは、でっかいガマガエルの妖怪だった。緑と紫が混じったマーブル模様の体皮、ぶつぶつと飛び出たイボとギョロ目、人間なんて一口で平らげてしまいそうな大きな口、間違いなく妖怪である。

『ガマアアアッ！』

『デスフロッグ……！　ここは僕が注意を引きつけます。その隙にあなたは逃げてください！』

イケメン無理すんな。妖力から見て、実力はあちらの方が上手だ。ただ、月ウサギは両刃の西洋剣を装備していた。見たところ立派な剣である。武器があればなんとか対抗できるかもしれない。しかし、それでもこちらに分が悪い闘いになるだろう。

妖怪ガマガエルはデスフロッグという名前らしい。気持ち悪い動きでぴょんぴょん飛びながらこちらに向かってくる。無音なのがシュールだ。

『来い、デスフロッグ！　僕が相手だ！　はあああっ！』

月ウサギが剣を構えて踏み出す。その動きは予想外に速かった。一足で敵の側面に移動し、その太い足を切りつける。球状に丸まった血がぽこぽこと飛び散った。

『ガッ、ガマアアアッ!?』

意外に強いな。動きのキレが違う。苦戦するかと思われた闘いは終始、月ウサギの優勢が続いていた。ただ、見た目通りデスフロッグは体力があるようだ。月ウサギの攻撃は、致命的なダメージを与えるに至らない。

『どうして逃げないのですか!?　早く逃げて！』

はっ、俺は他人ごとのようにその場に突っ立ったまんまだった。俺も加勢した方がいいよな。せっかく出会った月ウサギに死なれては困る。色々聞きたいことがあるのだ。

『ガマッ！』

そこで、やられっぱなしだったデスフロッグに動きがあった。体表から得体のしれない気味の悪い色をした粘液を分泌し始めたのだ。見るからに毒ですと主張している色あいだ。これには月ウサギも手が出せないのか、後ろに下がって距離を取る。

しかし、デスフロッグはその隙を見逃さなかった。大きな口をかぱりと開くと、そこから勢いよく長い舌が飛び出す。カメレオンのように伸びた舌は月ウサギの足にからみついた。

『しまった！』

『ガマアッ！』

月ウサギがデスフロッグの口の中に引きずり込まれようとしている。これはまずいな。俺はすぐさま伸びきった舌に向けて妖力弾を撃ち出した。

『ガフアッ！？』

獲物を仕留めた気になっていたデスフロッグは、思わぬ攻撃を受けて動揺した。焦りで月ウサギをつかんでいた舌を放してしまう。月ウサギはその一瞬で逃げ出すことができたようだ。

しかし、デスフロッグは次に俺を標的に選んだらしい。こちらにビシビシ殺気を放ってくる。口をかぱりと開いた。これはカメレオン攻撃がくるな。俺は横に飛んでかわそうとした。

『あ、あれ？　体がうまく動かせない』

しかし、ここが月だということをすっかり失念していた。体が軽

すぎて地面を蹴っても浮遊感が邪魔して思うように移動できない。さっきの月ウサギの戦闘を見ていたせいで感覚がおかしくなっていた。どうして月ウサギはあんなにシャープな動きができたんだ？

『やばっ！？』

『ガマアアアッ！』

避けられなかった。舌が俺の胴体に巻きつく。そのまま踏ん張ることもできず、デスフロッグの口へと運びこまれる。

『やめろ！』

月ウサギが叫ぶが、デスフロッグが言うことを聞くはずもない。俺はとっさに甲羅の中にもぐりこむ。まあ、これで食われてもなんとかなるだろ。

ごっくんされた俺はデスフロッグの胃に収まった。それじゃあ、カエル爆竹花火ごっこを始めるとしよう。

『妖力弾、回転掃射！』

俺はデスフロッグの胃の中で甲羅ローリング走法を行う。ついでに妖力弾のおまけつきだ。内側からの攻撃には、さすがに耐えられまい。

『グエエエエエッ！』

おなかがパーン！

断末魔の悲鳴とともにデスフロッグは破裂したのであった。

１４話「夢のウサ耳ランド（棒読み）」

『うわ、べっとべとだなこれ』

俺はデスフロッグの胃袋から生還を果たすことができた。ぐちょぐちょの粘液と飛び散った臓物で甲羅が汚れてしまったが。

『……』

さて、俺がふと視線をやると、月ウサギが剣を振りかぶった体勢のまま固まっていた。信じられない物でも見たかのような表情だ。

『おーい、大丈夫かー？』

『はっ！？　それはこちらのセリフです！　あなたは無事なのですか！？』

『見ての通りだ』

デスフロッグの妖力は俺の足元にも及ばない。妖怪の森にいた仲間たちを基準すれば、下の上くらいの強さだ。せいぜい毒が気持ち悪いところくらいしか厄介な点はなかった。

そんな俺の様子を見て、月ウサギは呆れている。

『本当にあなたが何者なのか気になります』

『俺の名前は葉裏だ。さっきも言ったが地球の妖怪だ』

『ヨウリさん、ですか。僕はロバートと言います。あなたには聞きたいことがたくさんあるのですが……とりあえず、移動しましょう。ついて来てください。村に案内します』

村があるらしい。妖怪の村、というのはなんかひっかかる言い方だ。村とは人間が作るものである。妖怪は群れをつくることはあるが、その住処はせいぜい“巣”といったところだ。まあ、今のところ友好的に受け入れてくれているようなので、おとなしくついて行くことにしよう。

＊　＊　＊

月ウサギの村は地下にあった。月のクレーターの中心にカモフラージュした巣穴の入り口がある。その中に入って行くと、そこには別世界が広がっていた。

地下の空間はかなりの広さがある。光源は火ではなく、青白く光る石だった。驚いたことに植物が生えている。水もないのにどうやって生きているのかと思ったが、どうやらこの植物、ただの草ではない。妖力を感じた。これも妖怪の一種なのか。もう何でもありだな。

村には結構な数の月ウサギの姿があった。大人も子どもも男も女も、みんな頭にウサ耳が生えている。これは妖怪っていうか宇宙人って言った方がしっくりくるな。地球の妖怪と違って、実に人間らしい暮らしをしているのがわかる。ここに生息している植物も、月ウサギたちが管理して育てているのだろう。

村に入ってきた俺を、月ウサギたちは興味深そうに見つめてくる。不思議と警戒はしていない。もっと排他的な雰囲気があると思ったのだが、よそ者である俺のことを拒絶する様子はない。それよりも、好奇心の方がまさっているといった感じだろか。

ロバートは話しかけてくる月ウサギたちをやんわりとあしらいつ

つ、穴の奥へと進んでいく。奥にはいくつもの横穴があった。その中の一つに入る。

『ロバートです。巡回からもどりました』

『入れ』

横穴のさらに奥に進むと、先がすだれのようなもので仕切ってある。ドアの代わりみたいなもんだろう。ロバートに続いて俺も奥へと進む。そこには、数人の月ウサギがいた。年配の男ばっかりである。無論、こいつらにもウサ耳がある。誰得。

『どうした、何か異常があったのか？　……その者は誰だ？』

ウサ耳おっちゃんの一人がさっそく俺の方を見て疑問をぶつけてきた。さて、どうやって話をつけようか。

『彼女はヨウリ。巡回中に出会いました。その直後、デスフロッグの襲撃を受けたのですが、彼女の協力でデスフロッグを倒すことができました』

『なんと。そうであったか。ロバート一人の力では、デスフロッグを倒すことはできなかっただろう。礼を言う』

『いや、まあ、どういたしまして』

『して、そなたはどこの村の者だ？　この村を訪ねてここまで来たのか？』

『……ちょっと、信じられないかもしれないが、俺の話を聞いて

くれ』

それから、俺はここに来た経緯を話した。俺は地球にいたこと。そこで人間と戦ったこと。人間は月へ向かうため、ロケットに乗って宇宙へ出たこと。そして、俺はそのロケットにしがみついて不本意ながらここへ来てしまったこと。

すべてを話し終えた俺に、月ウサギたちが向けた目は怪訝なものだった。

『にわかには信じられん話だ。我々にとってアースは死後の魂が向かう天上の地。仮にそなたがアースからやって来たとなれば、そなたは天上に住まう存在ということになる』

『地球はそんなたいしたところじゃねえよ。まあ、こことはだいぶ違うが、俺はあんたらと同じ妖怪だ』

『わからぬ。ヨウカイとはなんだ？　そなたは玉兎なのか、それとも我らとは異なる存在だと言うのか』

月ウサギの正式名称は『玉兎』というらしい。しかし、なんで妖怪という概念が伝わらないんだ？　俺もこいつらも肉体に妖力が宿っている。だったら、同じ妖怪なんじゃないのか。

『妖怪ってのは、俺たちみたいな奴らのことを指す総称だ。お前たちは玉兎って言うんだろ？　それも妖怪の一種ってわけ。あと、デスフロッグとか言う奴もな』

『……我らとデスフロッグをいっしょくたにされるとは。なんともおかしな物の考え方をする。やはり、我らには理解できん』

なんか話がかみ合わないな。なんで、こんな簡単なことが伝わらない。

いや、そういえば、『妖怪』って言葉はなぜあるんだ。それって、『人間』と対になる意味があるから成立しているんじゃないか。対立する存在があって、それぞれにそれを表す名前がつけられただけにすぎない。人間がいなければ、そもそも妖怪なんて言葉は生まれなかったはずだ。

『えっと、ここには玉兎とデスフロッグと、それから他にどんな奴らがいるんだ？　人間はいるのか？』

『この地には、我々玉兎とその宿敵デスフッログしかいない。ニンゲンという者も聞いたことがない』

なるほど、月には妖怪ウサギと妖怪カエルしかいないのか。人間が生活できる環境じゃないからな。だったら、玉兎たちが自分を妖怪と定義しない理由にも納得がいく。しかし、二種類の妖怪しかいないなんて、地球と比べるとなんとも多様性がない場所だな。

『すまないが、そなたの話を信じることができん。アースからこの地へ渡る船を作るなど、それこそ神のなせる業だ。そなたは自分がアースから来た存在だと言うが、耳を失った玉兎にしか見えない』

『ウサ耳なんて最初から生えてねーって』

俺は根気強く説明を続けたが、やっぱり信じてもらえなかった。別に俺は自分がどんな存在と認識されようとかまわないし、玉兎の世界観にけちをつける気もないのだが、一つ気にかかることがあるのだ。それは、人間についてのことである。

人間は貪欲に環境を食いつぶして成長していく種族である。前世

に俺がいた世界では、侵略する側とされる側、その争いの結果が悲惨なものに終わることは歴史が証明している。人間が月の先住民に敬意を払って接するというのは考えにくいと思ってしまうのが正直な感想だ。同じ妖怪として、玉兎が人間にやられるのを黙止するのは気が引ける。

けど、信じてもらえないのならしかたがない。一応、警告はしたのだ。後は玉兎たちの判断にゆだねよう。

15話「服を着よう」

必死に地球のことについて喋りまくったせいだろうか、俺はおっちゃんウサギどもから憐みのこもった視線を集めていた。人を頭のかわいそうな子ども扱いしやがって。しかも、身寄りのない孤児と思われ、この村で面倒を見てもらうことになった。

お世話になるのは、ロバートのウサギさん一家である。最初はさすがに厚かましいと思ったので断ったのだが、ロバートはぜひ家に来てほしいと言ってきた。まあ、力には自信があるので、俺にもやれる仕事はあるだろうし、一方的に養われるつもりはない。手伝えることは手伝おう。たくさんある横穴の一つ一つが各家庭の住まいになっているようで、さっそくお家にお邪魔した。ロバートの家は、父と姉との三人暮らしである。母親は随分前にデスフロッグに食われたらしい。なむ。

『姉さん、ただいま』

『おかえりなさい、ロバート。あら？　そっちの女の子はだれ？』

家で迎えてくれたのは、ロバートの姉のモニカという玉兎だった。ようやくまともなウサ耳女子に会えた。目の保養とは、まさにこのことだろう。

『この子はヨウリ。わけあって、今日からうちで預かることになったんだ』

『ええ！？　ほんとに！？』

『どうも、ヨウリです。地球の妖怪です』

モニカはやっていた家事を放りだしてこちらに走って来た。なんだか目をキラキラさせてぷるぷる震えている。そして、何を思ったのか俺にいきなり抱きついてきた。

『か、かわいい～！』

すりすりと頬ずりしてくる。初対面の相手にこの過激なスキンシップ、気持ち悪い奴だ。まあ、美少女なので許す。モニカの胸がぷよぷよ自己主張しているので、とりあえず揉む。

『おっぱいでかいな、モニカ』

『かわいい～！』

『ね、姉さん……』

快く迎え入れてくれたようで何よりだ。互いの自己紹介を終えた後も、モニカは俺に抱きついて放れない。暑苦しい。俺は強引にモニカを引き剥がす。

『やんっ！　もう少しだけハグを～！』

『やかましい。離れろ』

『ちぇー。ところでヨウリちゃんのその格好……かわいいんだけど、少し変じゃない？』

それについては同意せざるを得ない。この甲羅スタイルは紛れも

なく変だ。だが、そう正面切って直球の言葉をぶつけられると、反論できなくてイラッとくる。むかついたので、甲羅を脱ぎ捨ててすっぽんぽんになってやった。ロバートが慌てて後ろを向く。

『こら！　ヨウリちゃん、年頃の女の子が簡単に肌をさらしちゃいけません！　待ってて、服を持ってくるから』

モニカは服を用意してくれた。植物の繊維で編まれたワンピースだ。そういえば、まともな服を着るのはこれが初めてである。ワンピースはごわごわしていて着心地はあまりよくない。しかし、妖怪が服を作るというのは、なかなかに斬新である。妖怪はおしなべて物作りが下手な奴らばかりだと思っていたが、そうでもないらしい。

『私のお下がりだけど、大きさもちょうどいいみたいね。取っておいてよかったわ』

『スカートよりズボンの方がいいんだけど』

これだと股部分の布が邪魔で甲羅を装着できない。ズボンなら邪魔にならないのだが。

『そう？　でも、お父さんやロバートのズボンはサイズが合わないだろうし……後で私が作ってあげるわ』

『よろしく。あ、動きやすいように短パンにしといて』

我ながら思うが図々しい。

モニカたちと話していると、家にだれかが入って来た。渋い、いぶし銀のおじさまウサギだった。なんかバーボン、って感じの。ロバートとモニカの父親のようだ。名前はジョージ。俺がこの一家に

世話になるということをロバートが話したが、少しも動じた様子はなかった。二言三言、言葉を交わしただけで後は何も言わない。別に嫌われているようではないので、単に寡黙な性格なのだろう。

こうして、俺は月のウサギこと玉兎のとある一家に同居させてもらうことになったのであった。

＊　＊　＊

それから数日が経ち、俺も玉兎たちの村に慣れてきた。玉兎は人間っぽい暮らしをしているが、やはり妖怪に近い種族である。食事は日に一回、地下の畑で取れた穀物からできるモチのような物を食べる。俺も御馳走になったが、結構うまかった。妖力が豊富に含まれており、これ一個で腹がふくれる。

妖怪に必要なエネルギーは妖力である。妖力は自然界に満ちており、黙っていても体に取り込むことができる。だが、それだけでは足りない。もっと効率よく大量の力を手に入れる必要がある。そのため、妖怪にも“飢餓感”が存在する。空腹が過ぎれば存在が消滅してしまう。

一番手っ取り早い方法は、力ある他者を捕食することだ。新鮮な生命ならなおよい。俺はそれしか妖力を得る方法を知らなかったのだが、森の妖怪たちは別の方法で飢えをしのいでいる者もいた。捕食ができない弱い妖怪は、人間をおどかしてそこに生まれた恐怖の感情を食う。妖力は闇の力である。恐れや怒り、憎しみといった負の感情が生まれると、そこに集まりやすい性質があるのだ。ただ、この方法で集められる妖力は少ない。

そうそう、ところで俺は物を食べなくても死なない体になっていた。六島苞と融合していた影響か、俺は光合成で妖力を生産できるのである。日向ぼっこで甲羅干しすると、お腹が膨れる。俺の甲羅は光妖力合成機能を持っていた。植物の妖怪の特徴なのか、捕食をしなくても生きていける。

玉兎たちは、道具作りが得意な妖怪だった。植物の繊維やデスフロッグの皮を用いて衣服や防具を作り、驚くべきことに熱を使わずに金属を加工する妖術を持っていた。どうやって作るのか気になったが、工房には入れてもらえなかったので、方法はわからなかった。ジョージはこの村一番の武具職人らしく、『金属を加工する程度の能力』を持っているので材料さえあれば、どんな剣でも作り出せるという。

『父さんは一流の剣職人だし、剣術の達人でもあるんだ。僕の目標だよ』

『ふーん』

俺とロバートは巣穴の外、月面に来ていた。穴倉の中にずっと引きこもっているとなんだか元気がなくなる。ひなたぼっこは気持ちがいい。六島苞に寄生されていた時代の名残かもしれない。光合成で元気ハツラツ。

俺は村の自警団に臨時入団している。最初は玉兎の大人たちに見た目でみくびられていたが、妖力弾をぶっ放して見せると態度が変わった。と言っても、デスフロッグの襲撃は最近あったばかりなので、今はそこまで忙しい時期ではないようだ。半年に一回くらいのペースで襲撃があるらしい。一応、周辺のパトロールの任務を与えられたので、ロバートと一緒に村近辺を歩いて回っている。

『そうだ、ヨウリ。よかったら、僕と手合わせしてくれないかな？』

ロバートは強くなりたいという向上心が人一倍あるようだ。暇を見つけては剣の練習をしているところを見かける。まあ、暇なので少し付き合ってやるか。

16話「寡黙なる職人ダンディズム」

試合の勝負はあっけなくついた。俺の負けだ。俺はロバートへ向けて妖力弾を発射したが、それをことごとくかわされ、接近されてしまった。首に剣を突きつけられ、ジ・エンド。まあ、甲羅に引きこもれば俺の勝ちだっただろうが、そんな大人げないことはしない。

『なあ、前から気になってたんだが、なんでお前らはそんなに速く動けるんだ？』

ずっと疑問だった。宇宙空間で身動きすることは、水の中を泳ぐに等しいわずらわしさがある。俺は甲羅を脱いでウエイトダウンしてもロバートのスピードに追い付けなかった。重力が少ないと浮力がつく。すると、踏み込み際に地面から離れる時間が長くなる。宙に浮いている間、自分の体を制動することができない。速く動こうとして強く踏み込むと、そのまま進行方向に吹っ飛んでしまうのだ。かと言って弱い踏み込みでは、コントロールはできても緩慢な動きしかすることができない。

その点、ロバートは違った。まるで、地上を動いているかのようなスムーズな動きで月面を駆ける。いや、それ以上だ。浮力すら利用して空中を泳ぐように移動することができる。

『これは玉兎に伝わる体術だよ。『兎跳』、『兎狩』、『白兎』という三つの技を使いこなす術さ。ヨウリは『白兎』の技に関しては、すばらしい才能を持っているけど、それ以外があんまり得意じゃないみたいだね』

『そんな技を使った覚えはないけど。もしかして、妖力弾のこと

か？』

玉兎は妖力弾のことを『白兎』と呼ぶようだ。玉兎の戦士の中でも、俺ほどの弾幕を張れる奴はいない。言っちゃ悪いが、持っている妖力量の桁が違うからな。

『『白兎』は三技の中でも最も使うことが難しい技とされているんだ。強い“フォース”を持つ者しか使うことのできないからね。僕は才能がないからまだ使えないんだ』

あと、玉兎は妖力のことをフォースと呼んでいるようだ。スターウォ○ズか。

『僕が速く動ける理由は『兎跳』を使っているからだよ。これは足の裏にフォースで足場を作って、それを蹴ることによって自在に動けるようになる移動術だ』

『妖力の足場？　そんなん不可能だろ』

どれだけ緻密なコントロールが必要になるか、想像もつかない。下手をすれば妖力弾で自分を撃ち抜くことになる。

『僕も修行を始めたころはできっこないと思ったけど、なんとか形だけは使えるようになったよ。まあ、全然未熟だけどね……』

ロバートは自虐的なため息をつく。くそ、そんな技があるなら俺も使えるようになりたい。

『もう一つ、『兎狩』って言ってたけど、どんな技なんだ？』

『『兎狩』は攻撃の技だよ。拳にフォースを集中させて、攻撃が当たる瞬間に爆発させ、その勢いを乗せるようにして直接相手にフォースを叩きこむ技さ。うまくいけば、相手の肉体の奥深くにダメージを貫通させることができる。達人になると、剣に『兎狩』の効果を付与させ、強力な斬撃を常に放つことができるんだ。僕はまだ練習中だけど……』

ロバートはため息をついて顔を手で覆う。なんか、こいつの顔を見てるとますます自分も玉兎三技を使いたくなってきた。

『ちっ、このまま負けっぱなしなのは癪にさわるからな。俺にもその体術を教えてくれ』

『え？　あ、うん。僕でよかったら教えてあげるけど……』

なんで、そこで顔を赤くするんだよ。

＊　＊　＊

それから数日、俺はロバートから玉兎三技の手ほどきを受けた。『白兎』に関しては教えてもらう必要がないので、専ら『兎跳』と『兎狩』についてである。全然、できない。まだまだ練習がいるようだ。

今は家族だんらんの時間、食事タイムである。ロバート一家と俺は同じ食卓を囲んで、一日一個のウサギモチをはむはむ食べる。

『ヨウリちゃん、前に言ってたズボンが完成したの。さっそく着てみて！』

モニカお手製の短パンを貰った。俺の今の服装は、ごわごわした

ベストに、ごわごわした短パン、そして蔓で編まれたサンダルだ。見た目はともかく、動きやすくてよい。モニカには感謝した。お礼に抱きつかせろとせがまれたので、おとなしく抱かれておいた。

『……』

相変わらず、一家の大黒柱であるジョージは寡黙だ。俺はまだ二、三回くらいしか話をしたことがない。コミュ力乙。

ん？　なんだか、ジョージが俺の甲羅をじっと見ている。今は服を着替えたところだったので、脱ぎっぱなしにして床に転がしていた。

『このアーマーは』

おお、ジョージの声を久しぶりに聞いたな。俺の甲羅に興味があるようだ。

『見たことのない素材でできている。さわってもいいか？』

『いいよ』

ジョージは甲羅を丁寧に観察し始めた。膝の上において、くるくる回しながら色々な方向から見ている。

『っ！　重いな』

気合いを入れて持ち上げると自分の目の高さに合わせて観察する。地上だと並みの妖怪では持ち上げられなかった甲羅だが、月の重力なら玉兎でも抱えられるようだ。だが、それでもきついのか、すぐに地面に下ろして息をついている。

『このアーマーはだれが作った物なんだ？』

『あー……さあな。拾い物だからな』

本当のことを言っても信じてもらえなさそうなので、適当にごまかす。ジョージはそれっきり口を閉ざしたが、視線はチラチラと甲羅の方ばかり見ている。わかりやすい。

『俺の甲羅がそんなに気になるか？』

『……職業柄、つい、な。こんな金属は初めて見る』

ジョージは武具職人だった。『金属を加工する程度の能力』という力があれば、まさに天職だろう。自分の知らない素材に興味をもつことはわからないでもない。

あれ、そういえば、さっきジョージはなんて言った？「こんな金属は初めて見る」って言わなかったか？

『それは、金属なのか？』

『ああ、俺が能力を使えば、金属とそうでない物を見分けることもできる。これは、色々と混ざっているが、金属の性質も持っている』

いつの間に俺の甲羅は金属化したんだ。確かにピカピカ光沢が輝いてるけどさ。だが、そこで俺は重大な事実に気がついた。

『と、いうことは、もしかしてこの甲羅を加工することができる？』

ジョージの能力があれば、この甲羅の形を変えられる。つまり、このかっこ悪いフォルムをどうにかすることができる！　俺はかっこよくなれる！

『……やってみないと、わからないが』

『本当ですか！？　お願いします！　この通り！』

俺は恥も外聞もなく土下座した。この甲羅がかっこよくなるのなら、どんなことだってする。悪魔に魂を売ってもいい。俺の態度が急変としたのを見て、この場にいた玉兎ファミリーは唖然としていた。

『しかし、このアーマーの形は確かに無骨だが、防具としての機能性は悪くない。改善する点などない気がするが』

『かっこよくしてください！　とにかく、かっこよく！』

ジョージは俺の要望に驚いているようだ。しかし、すぐに相好を崩し、ニヒルな笑顔を浮かべた。

『わかった。やってみよう』

『ありがとうございます！』

ジョージさん、まじダンディー。惚れたぜ。

17話「戦いの狼煙」

それから俺は毎日、ジョージの工房へ足を運んだ。毎日二回も行った。衝動を抑えきれず、三回行った日もあった。俺の甲羅の加工はとても難しいようだ。ジョージはまるで生き物と接しているようだと言った。

『このアーマーは生きている。そして、これは自身の形が変わることを望んでいるように思う。もし、このアーマーが俺の能力を拒絶していたなら、加工は不可能だった』

俺と甲羅は離れていても心は一つ。頑張って素敵なメタモルフォーゼをとげてくれ。ジョージは職人の遊び心というやつか、製作途中の甲羅を見せてくれなかった。完成したら見せるという。ジョージの野郎、俺の心をもてあそびやがって。だが、その焦らし、嫌いではない。

『そうだ、アーマーの中を点検していたら、こんな物が出てきたのだが』

しなびた激辛蜜柑だった。捨てておいてくれと頼んでおいた。

『ほら！　また集中が途切れてるよ！　もっと体内のフォースを感じて！』

そして、俺は日中のほとんどの時間を玉兎三技の鍛錬にあてていた。講師はロバートである。ロバートは、俺がジョージの工房のことを気にしているそぶりをみせると、なぜかすぐ怒る。口うるさい

ガキだ、まったく。

『全然、フォースの循環ができてないよ。それじゃ、いつまで経っても技は使えないよ』

玉兎はどうしてあんなに少ない妖力で三技という強力な術が使えるのか、不思議だった。その答えは妖力の運用のしかたにあるらしい。玉兎は少ない妖力を体の中で循環させることができる。その回転を徐々に速くしていくことで、体内にエンジンを作り出すのだ。そして、その回転力を極限まで高めたところで体外にバーストすることによって、爆発的なエネルギーを得ることができる。

理屈はわかった。だが、実践はできない。俺にとって、妖力とは体の中に沈澱して静かにたゆたうモノでしかない。妖力弾はそこからすくった水を投げつけるような感覚で行う。妖力を回転させることはなんとかできるようになったが、ただくるくる回るだけだ。濁った汚い水槽の中の水をかき回すかの如くである。そこに爆発的なエネルギーが生まれる余地などない。むしろ、体の中を駆けまわる妖力の渦の影響で気分が悪くなるだけだった。

『おえっ！』

『ちょ、ヨウリ、大丈夫!?』

早くも諦めかけている俺。妖力の循環とか、もしかして玉兎の固有技能なんじゃないか？　できる気がしない。

『今日はこのくらいにしておこうか』

ロバートが俺の背中を撫でながら、帰宅を提案した。疲れた。今日は帰って寝よう。明日から頑張ろう、うん。

『おおーい！　たすけてくれーっ！』

そのとき、どこからか助けを求める声が聞こえた。助けを求める声って、なんだかトラウマなんだよな。見れば、クレーターの丘の向こうから、一匹の玉兎がこちらに走ってきていた。

『なにがあったんだろう』

必死の形相で走って来た男は、衣服はボロボロで体も傷だらけだった。俺とロバートは警戒を強める。

『た、たすけてくれ！　俺たちの村が、村がああ！』

『落ちついてください。どうしたんですか？』

『俺は隣村のセルニエスから来た……はあはあ！　セルニエスがデスフロッグに襲われた！』

『この時期に立て続けに襲撃が起こるなんて。それで、被害状況は？』

『全滅だ！　村が全部、デスフロッグにのまれちまった！』

『なんですって……！？　そんな馬鹿な！？』

これまでの平穏な日常は音を立てて崩れ去った。事態は急激に転換していく。

＊　＊　＊

隣村から来たという玉兎の話によれば、現れたデスフロッグの数は１００匹以上にのぼるという。この数は異常だった。これまでの半年に一回の襲撃では、多くても２０匹程度しか現れていない。１００匹もの大群で押し寄せた前例などなかった。

村の長老たちは集まって会議を行っている。隣村が制圧されてしまった。もはやデスフロッグたちがこの村へやってくることは時間の問題である。玉兎の戦士たちは戦いの準備を始めた。ロバートとジョージは戦士として戦うようだ。

『ヨウリはモニカと安全な場所にいて。デスフロッグは僕たちが食い止めるから』

『いやいや、それには及ばないさ』

『ヨウリ？』

俺も一角の妖怪。外で戦があっているというのに、穴倉の中でぬくぬくと守られている気はない。

『だめだ！　本当に危険なんだよ！？』

『お前は俺の強さを知ってるだろ？　俺はデスフロッグなんぞに負けはしない』

『で、でも……！　父さんからも何か言ってよ！』

ジョージは無言だ。じっと目を閉じている。寝てるのかと思ったら、おもむろに動きだした。家の奥から何かを持ってくる。その緑色の輝きを見て、俺の胸が高鳴る。

『あずかっていた物を返そう』

それは、俺の甲羅だった。いびつな流線形の形は整えられ、ハニカム型六角形の直角的でメカメカしいデザインに。なんとなく原形は残っているが、甲羅はその姿を一新させていた。

『こ、これは……』

俺は高鳴る鼓動を押さえて、甲羅を装着する。従来の甲羅は体を中心に腹側と背中側の甲羅が巻きつくような構造になっていた。それが、重心をほとんど背中側に移し、タンクを背負っているような感覚に変わっている。腹側の側面部分は俺のボディラインに沿うようにすっきりと細くなり脚を出す二つの穴も距離が調節され、ガニ股になることもなくなった。そして、一番変わった点は腹側パーツの構造だ。なんと背中側のパーツのスペースにスライドして収納できるようになっているのだ。装着するときはパーツを引き出し、さらにそこから観音開きのように蓋が開き、その間に体を収めるようにして着る。これはもはや甲羅ではない。ジョージの言うとおり、“鎧（アーマー）”だった。

『す、すげえ……』

『いい物を見せてもらった。感謝している。気に入ってもらえたか？』

『すげえええ！！　うおおおおお！！』

『よ、ヨウリ！？　なんで泣いてるの！？　落ちついて！』

俺はうれし泣きした。まさかここまでの作品を仕上げてくれるとは。感無量だった。確かにまだなんか変ではある。しかし、それでもこれは進化といっていい進歩だ。あのダサい甲羅がギリギリかっこいいと言えるまでの変化をとげた。これは奇跡だ。

『おおおお！　これなら負ける気がしねえ！　デスフロッグなんて１００匹まとめてボコボコにしてやんよ！』

俺のリミットは最高潮に達していた。

18話「と、思ったけどダメでした」

『ヨウリ、村の外から来たお前を、この村の戦いに巻き込んでしまったことは申し訳ないと思っている』

『気にすんな。一食一飯の恩義ってやつだ』

ジョージはいつにもまして辛気臭そうな顔をしている。

『これは餞別だ』

渡された物は短剣だった。ナイフと言うには少し刃渡りが長く、剣と言うには短い。鞘から抜くと、刀身は漆黒色に鈍く光っていた。

『地下深くで採れたルナタイトを使った。手入れをせずとも、錆びず、刃こぼれはしない』

剣なんて使ったことがないが、もらえるものはありがたくもらっておこう。俺は腰のベルトに短剣の鞘を通してさげる。

『あー！　父さんずるい！　ぼ、僕もあとで何か贈るからね！』

『まあ、ロバートったらヤキモチ焼いちゃって』

ロバートとモニカが何か言っている。なにかにつけて、ロバートは父親に対抗意識を燃やしているな。めんどくさい奴だ。

『長老からの通達だ！　村の者は全員、穴の外に集まれ！』

遠くでだれかが叫んでいた。集会でもやるのだろうか。俺たちも他の玉兎のたちの流れに乗って、穴の外へと出てきた。そして、全員が集まったことを確認すると、年老いた玉兎が前に出て演説を始めた。

『皆の者、知っての通り、この村に我らが宿敵デスフロッグの群れが来襲しようとしている。これはこの村創始以来の未曾有の危機。そこで長老衆は決断をした。デスフロッグを罠にかける』

話を聞いていた玉兎たちは騒ぎ始める。デスフロッグの群れを押しとどめるような罠をいかにして仕掛けるのか。

『デスフロッグが村を襲わんとしたそのとき、『兎爆石』を起動させるのじゃ』

ざわめきは急速に大きくなっていった。絶望するかのような悲鳴を上げ始める者まで出始める。

『ロバート、『兎爆石』ってなんだ?』

『村の長老が代々封印している石だよ。そこには膨大なフォースが蓄えられており、封印を解いたが最後、地を覆すような爆発を起こすとか』

『それって、村がふっとばね?』

村を犠牲にする覚悟があるということか。石は村の地下深くに固定されており、持ち出すことはできない。敵が村に殺到したそのときを狙って、村ごと爆破し、一網打尽にするという計画のようだ。

デスフロッグは地下に潜って移動する。地下の住民をすべて避難させ、からっぽになった村にデスフロッグを誘導できればかなり有利に戦いを進められる。

しかし、当然反対する者が大勢いた。自分たちが住んでいた村がなくなってしまうのだ。それに、封印を解くためには長老が『兎爆石』の傍にいないといけないという。つまり、長老の命を犠牲にする作戦なのだ。

『静まれ、皆の者。１００体ものデスフロッグの群れに、我らが抗う手段はもうこれしか残っておらん。おそらく、この罠が成功したとしても、すべてのデスフロッグを殺すことはできない。生き残った奴らは地上に這い出し、我らに牙をむくだろう。戦士たちは戦いに備えよ。必ず、勝つのだ！』

俺が全力を出せば、デスフロッグを１００匹倒すことができるだろうか。それは可能だろう。しかし、地下から襲い来る敵から村を守りとおせるかと言えば、それはできそうにない。俺は地下の敵の相手ができるスキルなんて持っていないのだ。戦士たちを全員守りきることもできないだろう。俺がここで出しゃばったところで、長老を説得なんてできない。あれは覚悟を決めた顔だった。彼らにとって、デスフロッグとはそれだけの存在なのだ。

俺が妖怪だからだろうか、それとも玉兎ではないからだろうか。薄情だと思わなくもないが、声高に自分の主張を垂れ流す気もない。長老の決断は、最善手だ。

『やれやれ』

俺は肩をすくめた。

＊　＊　＊

地下の穴倉から最低限必要な物資を外に運び出す。クレーター丘の上に長老を除く玉兎の全員が避難し終わった。いつデスフロッグが来てもおかしくない状況だ。悠長に穴の中で構えていることはできない。

『大変なことになっちゃったね』

『まーな』

ロバートは無理に明るい雰囲気を保とうとしているように見えた。いつものうざったさがない。

『はいこれ、ヨウリにあげる』

ロバートは何か差し出してきた。さっきの約束を律儀に守ったのか、プレゼントのようである。それは帽子だった。ベレー帽に似ている。漫画家がかぶっているというより、軍人の物っぽい。

『なんだこれ？』

『それは戦いで耳を失くした戦士のための帽子なんだ。デスフロッグの毒にやられて切り落とさないといけなくなった戦士はたくさんいる。そんな戦士は最前線で戦った勇気をたたえられて、この帽子を贈られるんだ』

『そんな名誉ある帽子、恐れ多くてかぶれねえよ』

俺に似合いそうにないしな。でも、ロバートは俺にウサ耳がないことを気にかけて、この帽子をくれたのだろうか。変な気、遣いや

がって。

『ま、気が向いたらそのうちかぶる』

『そう』

ロバートは苦笑していた。俺は甲羅の中に帽子をしまう。せっかくの贈り物だ。大事にしないとな。

＊　＊　＊

その日の夜、大きな地震が起こった。奴らが来たかと立ち上がったとき、さっき起こった地震がちっぽけに思えるほどの揺れが大地に広がった。そして、玉兎の巣穴があった場所に天を突くような白い炎が立ち上った。

19話「黒幕」

暗い空を染め上げる炎、それは妖力で形作られた幻だ。だが、その威力は本物である。『兎爆石』が起動したのだ。それはすなわち、デスフロッグの襲撃を意味する。

丘の上で、出撃の時を待つ玉兎の戦士たち。静まり返った戦場に、デスフロッグが現れた。ぼこぼこと土が盛り上がり、醜悪なカエルが姿を見せる。

『今だ！　かかれーっ！』

突撃の合図とともに、戦士たちが駆け出した。俺も一緒に走りだすが、戦士たちの速いこと速いこと。ほとんどの戦士が『兎跳』を使っているのだ。俺はかなり出遅れてしまった。

『ガ、ガマアア……！』

地上に現れたデスフロッグは手負いだった。表皮が焼けただれ、苦しそうにうめいている。自慢の毒をまき散らす余裕さえないようだ。自爆作戦は成功していた。犠牲は無駄ではなかったのだ。

これは俺が手を出すまでもないんじゃないか。戦士たちは獅子奮迅のはたらきで次々に敵を屠っていく。と、そこで俺のすぐ横の土が盛り上がりを見せた。

『おっと』

顔を出す前に妖力弾を連射する。しばらく苦しそうにうごめいていたが、すぐにおとなしくなった。悪いね、同じ妖怪として多少は

心が痛むけど、妖怪の世界って強者が勝者だから。
敵はいないかと周囲を見渡すと、ロバートとジョージの姿が見えた。二人とも近くで戦っている。その傍へと向かった。

『ヨウリ！？　問題はない！？』

『ないよー』

ロバートの実力でも、さすがに瀕死のデスフロッグには引けを取らなかった。的確に急所を狙って仕留めていく。

『……ふんっ！』

その横で、ジョージは無言で剣を振るっていた。剣先がかするようにデスフロッグの鼻先に当たる。はずしたのかと思いきや、ぱっくりとデスフロッグの頭が真ん中から二等分されていた。何をしたんだ？

『あれが達人の『兎狩』だよ。父さんは剣の扱いも一流だからね』

あれはやばいな。まるで不可視の刃だ。甲羅でなら防げるが、生身の部分に当たったら俺でも無事で済みそうにない。玉兎と俺との妖力は雲泥の差だっていうのに、ここまでの脅威になるとは。玉兎三技パネエ。

『なんだよ、玉兎も十分強いじゃん。デスフロッグとか余裕じゃね？』

『そうでもないよ。デスフロッグの毒は強力だからね、僕らは近接戦闘を主体としているから毒に侵される危険が常に伴う。それに

奴らは地下を移動するから村を狙われないように色々考えないといけないし』

デスフロッグの毒は俺にとってさほど怖くない。これは妖力に起因する毒性である。デスフロッグよりも圧倒的に保有妖力が高い俺なら、体内で簡単に中和できる。だが、玉兎はそうはいかないのだろう。ちょっと触るだけでも呪いのように体を蝕んでいく。なるほど、確かに厄介だ。

『でも、今回の戦いは楽勝なんじゃないか？　もう地面から出てくる数も相当減ったみたいだし』

敵の勢いはもうほとんどなかった。妖力探知で地下を探ってみても、動きのある気配は……あれ？　なんだ、この馬鹿でかい妖力反応は？

そして、もこもこと盛り上がる地面。今までの規模とは比較にならない土が舞い上がり、紫色の巨大な物体が踊りだす。なんとそれはカエルの手だった。ということは、つまり……

『ジーザス』

戦士たちが後ろに下がる。飛び出したのは超ド級のデスフロッグだった。こんな話は聞いてませんが。

『な、なんでクイーンデスフロッグがここにいるんだ！？』

ロバートの反応を見る限り、こいつはクイーン。つまり、デスフロッグの親玉ということか。まさかこんな隠し玉を持ってくるとは。体は傷だらけだが、どうにもピンピンしていらっしゃる。

クイーンデスフロッグはガパリと口を開いた。その家一軒は丸ご

と飲み込めそうな口からピンクのぶにぶにした何かが飛び出す。それが逃げ遅れた戦士たちに襲いかかった。ぺろんっとアイスクリームでも舐めるかのように地面を一舐め。それで付近の地表は一掃されていた。粘液にからめとられた戦士たちは声を上げる間もなく女王カエルの口に消えた。おいおい。

『そんじゃ、俺は行ってくるぜ』

『あ、ヨウリ、待って！』

俺は妖力弾をぶっ放しながら女王カエルに突っ込んでいく。それに気づいた女王カエルがこちらに向けて口を開いた。敵は不用心にも自分の体内に“毒”を取り込むつもりらしい。

『さて、このスペシャルポイズンに、お前は耐えられるかな？』

俺は甲羅に引きこもった。頭と手足を引っ込めて、腹側パーツを収納すれば、綺麗な六角柱のかたちに変形する。いいねえ、イカしてるぜ！　その直後、俺は女王カエルの口の中へと導かれる。そして、食道を通って、胃に押し込まれた。

『さあ、ショータイムだ！』

俺は弾幕を盛大にばらまいた。

＊　＊　＊

クイーンデスフロッグはしぶとかった。１０分くらいは俺の内部からの攻撃に耐えたのではなかろうか。ぴょんぴょん飛び回って大変だったらしい。途中俺を吐きだそうと努力していたが、俺はしぶ

と奴の胃袋に居座り、胃粘膜をズタズタにしてやった。
ひっくり返ってぴくぴくしているカエルの口から帰還するとロバートが泣き顔で迎えてくれた。俺が食われて死んだと思ったらしい。ジョージは無言だったが、呆れ顔をしていた。
改めて、獲物を見る。その全長は５０メートルはあるだろうか。お尻から巨大な卵がにゅるにゅる出てて、ドン引きした。あの寒天ゼリーみたいなやつね。これがデスフロッグの卵かと思うと鳥肌が立つ。そして、俺は今、女王カエルの仰向けになった白い腹の上を歩いていた。

『なんかおかしいと思ったんだよね』

その腹に突きささる鉄の塊を引っ張りだす。それは、特大の大砲の弾だった。こんな兵器を玉兎が使用したとは考えにくい。ということは、あと残された可能性は一つしかない。

『人間の仕業だ』

20話「重なる不運」

『クイーンデスフロッグを倒したぞー！』

『もう怯えながら暮らす必要はない！』

玉兎たちは女王カエルを倒したことで、浮かれ気分になっていた。何人かの戦士たちは女王カエルにやられてしまったが、むしろ、全滅せずにたった数名の犠牲だけでこの局面を乗り切ったことになる。俺は敵の親玉を倒した英雄に祭り上げられる始末だ。こいつらは能天気でいいよな、まったく。

『どうしたの、ヨウリ。そんな難しい顔して。みんな、あんなに喜んでるのに』

『ロバート、クイーンデスフロッグは今まで姿を現したことはなかったんだよな？』

『そうだよ。クイーンがすべてのデスフロッグの母なんだ。奴らの巣穴の最奥にいて、外に出てくることはない。デスフロッグたちが守っている。だからこそ、こうして倒せたことが奇跡なんだ』

『じゃあ、そんな大事な女王様がどうして無防備にのこのこ出てきたか、気にならないか？』

『まあ、それは気になるけど……何か巣穴から出なくちゃならない事情があったんじゃない？』

『それだ。つまり、女王カエルは何らかの危機的状況に陥って、危険を冒してでも巣穴の外に出ないといけない事情があった。そして、俺はその事情について、予想がついている』

『え!?　どういうこと?』

『犯人は人間だ』

『ニンゲン?　って、確か、前にヨウリが言ってたアースの種族だよね。うーん、信じられないけどなあ』

ロバートはいかにも眉唾といった表情をする。自分の目で見た物でなければ納得できないのだろう。俺がこいつらの立場なら、それもうなずける。いきなり、天国からやってきた使者が敵の親玉を攻撃しました、と言われても、ハァ?としか答えようがない。

『……だが、ヨウリの意見は無視できるものじゃない』

『父さん?』

そこにジョージがやってきた。手にはクイーンデスフロッグの腹に埋まっていた砲弾の一つを持っている。『金属を加工する程度の能力』を持つジョージに見せれば、これがどういう物か理解してくれるのではないかと思って渡しておいたのだ。

『この金属の塊は、玉兎ではとうてい持ちえない技術で作られている。複雑すぎて俺にも再現できそうにない。ましてや他の村の仲間がこれを作ったとは考えにくい』

『父さんはニンゲンって奴らがいるって、信じてるの?』

『楽観視はできないだろう。それに、ヨウリはこんな嘘はつかない』

『ぼ、僕だってヨウリのことは信じてるさ！　なるほど、ニンゲンね……』

今はこの程度の理解でもしかたないか。俺たちはいつか人間と遭遇するときがくるだろう。そのとき、どういう行動を取るべきか、あらかじめ計画しておく必要があるな。

『ヨウリちゃーーーん！』

『ぶぼっ！』

『お姉ちゃん心配したんだからね～！』

モニカが胸で俺を窒息させにかかってきた。まあ、ここ宇宙空間だけど。真剣に考えようとするとこれだからな。変な気負いがないことは、いいことなのかもしれないが。

＊　＊　＊

村を失くした俺たちは、集まって移動を始めた。元の巣穴は木端微塵に吹き飛び、デスフロッグの死体からあふれる毒で使い物にならない。他の村に移住するしか生き延びる手はない。これだけの数の玉兎を、一つの村に全員が収まるキャパシティはないはずだ。だが、それでも行くしかない。

しかし、玉兎たちに暗い感情は少なかった。クイーンデスフロッグを倒したという事実はそれだけ彼らの希望になっているのだ。俺

たちの一団はくぼんだ灰色の地面が連なる月面をひたすら歩いて進んだ。

そして、デスフロッグの襲撃から五日が経ったその日暮れ、俺たちは目的地へと到着した。

『な、なんだあれは……！』

玉兎たちは一様に目前の光景に見入っている。そこには銀色の塔が経っていた。サーチライトが辺りを照らし、異様な雰囲気に包まれている。その塔が経っている場所は、俺たちが目指してきた玉兎の村の真上だった。

こんなことができる連中なんて人間だけだ。その要塞のようなもののものしい警戒の様子から見ても、とても友好的に話ができるようには思えない。おそらく、地下の玉兎たちの村はすでに制圧されていると考えた方がいい。これはやばいことになってきた。

『とにかく行ってみよう！』

待て待て。なんでお前らはそんなに考えなしに首をつっこもうとするんだ。自分たち以外の文明との接触がなかった影響だろうか。こいつらの警戒心は薄すぎる。俺が制止する間もなく、玉兎たちは銀の塔に向かって駆け出していく。

『やめろ！　とまれ！』

見つかるのは思いのほか早かった。結構な距離はとっていたと思ったのだが、サーチライトがこちらに集まってくる。玉兎たちはその光を見て何を勘違いしたのかはしゃぎだす有様だ。

そして、塔から何かがやってきた。それは装甲車だった。どう考えても手加減なしだ。攻撃は唐突なものだった。塔から光の線のよ

うな物が放たれる。ライトかと思いきや、それに当たった玉兎は肉を焼かれて苦しんだ。ビーム兵器だ。その光の線は容赦なく雨のように浴びせられる。相手が仕掛けてきたことを知ったときにはもう遅い。何人もの玉兎たちがやられていた。

『ちっ！　えげつねえことしやがる！』

遠距離からの一斉放射にこちらはなすすべがない。いかに俊足で走る玉兎の戦士たちといえども、光り速さで襲い来るビームの槍には敵わなかった。俺は甲羅にもぐってガードし、近くにいたロバート一家の盾になった。俺の甲羅は三人も隠れられるほど大きくない、というか一人でもいっぱいいっぱいだが、穴を掘ってなんとかした。

これは早急に撤退するしかない。とにかくビームから狙われない位置まで離れないと全滅してしまう。

しかし、玉兎たちは未知の驚異的な攻撃を前に恐慌状態に陥っていた。

『……仲間を助けに行く』

この一方的な銃撃戦に、無謀にもジョージは身を投じようとしていた。ロバートとモニカが必死で止める。

『今、外に出たらハチの巣だぜ？』

『そうだよ、父さん、無茶だ！』

『いくらお父さんでも、あんな攻撃、どうにもできないわ！』

だが、ジョージはそれでも止まらなかった。後のことは任せたと一言だけ残し、別れの言葉もなく俺の甲羅の陰から飛び出していく。

俺はこの場から動けないので、加勢に行くこともできないしなあ。どうすりゃいいんだ、この状況。ビームさえなんとかできればまだ手はあるんだが。

だが、その悩みは意外にもあっけなく解決した。レーザーの猛攻が突然、止んだのだ。

21話「逆襲」

なんで急に攻撃をやめたのか、不審だった。レーザー攻撃は長時間連続しての使用ができないのか。それとも別の理由があるのか。俺は敵の様子を探るため、甲羅から頭を出す。

塔との距離は離れていて、ここからでは何か変化が起こっているのか見ることができない。その代わり、月面を走って来た装甲車には動きがあった。何か、準備をしている。装甲車の屋根に巨大なパラボラアンテナのような物が設置されていた。何をする気だ。まあ、いい。とにかく今のうちに逃げなくては。

『おい、さっさとここから離れ……』

キィィィィン！

その瞬間、脳内に怖気が駆け抜ける。体中の妖力がぐらぐらと熱くなり、暴れ出した。血が沸騰するようだ。全身に激痛が走る。

『あがああっ！』

俺はすぐに甲羅にこもった。だが、謎の攻撃は依然として俺を苦しめ続ける。体の中で、妖力が振動していた。内側から内臓を針で串刺しにされるような痛みで何も考えられなくなる。なにより、肉体よりも精神への被害が甚大だった。妖怪は生物よりも魂に近い存在だ。精神はより密接に肉体に結び付いている。俺の頭の中で俺の妖力が細切れになってめちゃくちゃくちゃに飛び回り、俺の精神を傷つけていた。

ヤバイ。俺は生まれてこの方、感じたこともない最大級の危機に

戦慄した。これは何だ。自分が何をされているのかもわからない。だが、とにかく逃げないと死ぬ。精神がボロボロになる。気を抜くと意識が遠くなる。

「……！！」

俺は気合いで立ち上がった。甲羅から手足だけを出した間抜けな格好だが、そんなことを気にしている場合ではない。攻撃が来ている方向はわかる。あの人間たちが乗っている装甲車からだ。たぶん、さっき見たアンテナを使っているのだ。ということは電波的な何かか。

ロバートとモニカは俺の足元で気絶していた。俺は二人の体をつかむと、全力でその場を離れた。二人を引きずりながら走ったので、地面にこすれたり石にぶつかったりしたかもしれないが、この一刻一秒を争う状況で文句は言わせない。俺だって必死なのだ。

俺はなりふりかまわず、精神攻撃電波が届かなくなるまで走り続けた。

＊　＊　＊

俺は岩場の陰にへたり込む。額には玉の汗をかいていた。壮絶な嘔吐感を抑えきれない。胃には何も入っていなかったが、気持ち悪さは一向に治まらなかった。

これまで、俺は強敵と闘いながらもどこか余裕があった。俺は強者だ。負けない自信がある。確かに俺はなんでもできるスーパーマンではないが、最低限、自分の身を守ることができる。この甲羅さえあれば、どんな攻撃だって防げると思っていた。俺は自分の保身に絶対の自信を持っていたからこそ、他人の戦いに手を貸す余裕があったのだ。

だが、今回はそうじゃなかった。あの精神電波は妖力を狂わせる。

甲羅ではどうにもできなかった。俺の自信は粉々に砕かれたといってもいい。あれは対妖怪戦において恐ろしい威力を持った兵器となる。地球の妖怪は運がよかったのだ。あの兵器があれば、人妖大戦は俺たちの大敗、いや、戦いにすらならなかっただろう。

周囲には、俺たちの他に玉兎はいなかった。確認する暇もなかったが、おそらく全員気絶させられたのだろう。もしかしたら、逃げのびた玉兎がいるかもしれないがそれを確かめる方法もない。モニカとロバートはしばらくして意識を取り戻したが、とても元気に動ける様子ではなかった。錯乱して意味のわからない言葉を口走っている。ようやく落ちついたころにはすっかり深夜になっていた。

『ごめ、ん、ヨウリ、僕……』

『いいから休め。人間の追手がいつ来るかわからない。今は体力の回復に専念しろ』

本当なら早くもっと遠くに逃げたいところだが、二人はまだまともに歩けない。本当にやばくなったら、また引きずってでも連れて行くが。重力があんまりないから楽に運べるし。

さて、困ったことになった。人間は俺たちより強い。ビームはなんとかなるとしても精神電波には太刀打ちできない。あの塔の要塞には精神電波装置がしかけてある。正面から挑むのは無謀だ。俺たちは逃げることしかできないのか。

『ヨウリちゃん、あれ』

『なんだ、どうした?』

『あそこ、に、なにか、いる……』

モニカが丘の上を指差す。まさか、追手がここまで来たのか。俺が目を凝らすと、そこには確かに何かいた。だが、人間ではない。デスフロッグだった。気味の悪いガマガエルたちがこちらに向かってくる。しかも、一匹や二匹ではない。その数はうじゃうじゃいた。

『まったく、こんなときに！』

俺は妖力弾を威嚇射撃する。しかし、デスフロッグは止まらない。すぐさま弾幕を張って近づけさせないようにする。地面も揺れているので、地下からも進んできているのだろう。そちらにも注意を怠らないようにする。

『ん？　なんだ、何か変だ』

だが奴らは、これまで戦ってきたデスフロッグとは違う態度を取った。攻撃した俺に見向きもしないのだ。試しに妖力弾を撃つのをやめてみたが、俺たちのことなど眼中にないと言った様子で横を素通りしていく。他のデスフロッグも全部が一方向に顔を向け、ひたすら前に進んでいくだけである。

『こいつらは何がしたいんだ』

意味がわからず頭が痛くなってきた。だが、そのデスフロッグ達が進んでいる方向に気がつく。そちらは俺たちが今しがた逃げてきた場所だ。つまり、人間たちの要塞がある。もしかして、こいつらは人間を襲おうとしているのか。

無謀な気もするが、やれるのではないかという希望もあった。地下から一斉に攻めればなんとかなるかもしれない。人間が対策を講じている可能性が高いが、何にしてもこれは好機だ。デスフロッグが攻め込む隙に乗じて、要塞の内部に入り込めるのではないだろう

か。仮に精神攻撃電波を食らったとしても、力づくでアンテナを壊せばいいじゃないか。

反撃の糸口が見えてきた。これは逆襲のチャンスだ。

22話「のちの諏訪子である（嘘）」

『なんじゃこりゃ』

俺がロバートとモニカに肩を貸しながら、銀の塔が見える場所まで来た時、そこにはグロテスクな惨状が広がっていた。

地面を埋め尽くすほどのデスフロッグの死体が積み上がり、そこらじゅうに毒の粘膜の池ができている。そして、一番驚いたのは銀の塔に突進するような形で力尽きているクイーンデスフロッグの姿である。そいつは俺が倒したはずの、あの女王カエルだった。なんとあれだけの攻撃を食らいながら生きていたのだ。信じられない生命力である。どてっぱらに穴が開いていたというのに、こんなところまでやってくるとは、いったい何がこいつをそこまでの執念を抱かせたのか。

戦いはすでに終わっていた。人間側もデスフロッグ側もどちらも動かない。まさか、ここまでの軍勢が攻撃してくるとは人間も想定していなかったのだろう。両者ともに全滅していた。玉兎の生き残りはいないかしばらく探し回ったが、見つけ出すことはできなかった。ジョージの姿もない。ロバートとモニカはひどく気を落としていた。俺は二人を肩に担ぐと、できるだけ毒を踏まないようにデスフロッグの死体の上を飛び継ぎながら銀の塔へ近づく。

塔の中も悲惨だった。内部にまでデスフロッグが侵入して、人間ともども死体の山と化していた。分厚い隔壁も突破され、奥深くまで侵入を許している。一応、警戒はしてみたが、本当に生存者は一人もいない。人間は確かに強いが、その強さはひどく偏っている。デスフロッグの死体の数に比べて人間の数は圧倒的に少なかった。せいぜい１００人くらいしか、今のところ見当たらない。たったそれだけの数でデスフロッグの大群と渡り合ったのだから、脅威と言

っていい。だが、無敵ではなかった。
デスフロッグは塔の上階を目指すように折り重なっていた。塔は上に向かって建てられる物なので、上を目指すのは当然のことと言えるが、それだけの理由にしては必死すぎる気がした。まるで産卵のため上流を目指して滝を登る鮭のごとくである。
塔の機能はほぼ停止状態で、セキュリティが作動している様子はない。照明の電気は、壊されていない箇所だけ明かりが灯っていた。だが、どこの電灯も、点滅を繰り返していて目がチカチカする。電気系統がイカれているのだろうか。
最上階近くにやってくると、眼下に屍累々と積み重なるデスフロッグの毒沼が見える。そこには、いつの間にか黒い霧が発生していた。それはデスフロッグ達の怨念が集結してできあがった呪いに近い特性があった。それがこれだけ大量に集まれば、本物の呪いになってもおかしくない。俺ならあの中でも平気だが、玉兎は無事ではすまないだろう。
俺は何か使えそうな武器はないか物色しながら進んだ。さすがは人間様の拠点だけあり、さまざまな兵器らしきものがある。実にSFチックだが、ほとんど俺には使い方がわからないものだらけだった。とりあえず、銃らしき形をした物を中心に漁って、それ以外にも手ごろな物を見つけたら甲羅の中にしまっておいた。
そこで発覚したのだが、俺の甲羅は四次元ポケ〇トのように何でも無限に収納できるというわけではなかった。見た目に反した収納力を持っているが、スペースには限りがなったのだ。新事実である。甲羅の中がいっぱいになって、これ以上詰め込めない状態になった。これでは自分の体も入れることができないので、しかたなく必要なさそうな物を外に出した。腐ってカビが生えた蜜柑とかな。
『これがニンゲンの巣なんだ。すごい……』

『まるで、夢の中いるみたいだわ。このふわふわしたものは何？』

ロバートとモニカも人間の科学技術に心底驚いているようだ。特に、建物内に空気があることに興味を持っていた。塔はいたるところが破損していて、空気漏れは確実なのだが、いかなる技術か、まだ空気のほとんどが逃げずに塔の中に残っている。そういったことに関心を持てる程度に、二人はだいぶ体の調子も良くなって来たようである。塔内に危険はないようなので、個別行動をしてみることになった。

俺が面白そうなメカがないか探していると、ある部屋にデスフロッグが殺到して死んでいた。上階に行けば行くほどデスフロッグの死体の数はだんだん減って行ったのだが、ここだけ以上に密集している。ここに何かあるのか。俺はデスフロッグを押しのけて、その部屋に入った。

『何かの研究室みたいだな。ん？　妖力の気配を感じる』

そこは様々な機材が置かれた部屋だった。白衣を着た人間がデスフロッグに潰されるようにして、何人も床に転がっている。デスフロッグは研究室の奥へと進もうとしていたようだ。そこには、チューブのような水槽に入れられた紫色の丸い玉が浮かんでいる。妖力はこの玉から感じた。取り出して手に取って見る。

『うわ、なんかブニブニして気持ち悪い』

どうやら、ナマモノのようである。生きている……ような、そうではないような、なんとも曖昧な気配。これは卵だ。命よりももっと未分化な、力そのものに近い状態である。俺には劣るが、かなり良質で大量の妖力を内包している。この卵が孵れば、生まれながらにして強い妖力を持つ妖怪となることだろう。

よく見たら、これデスフロッグの卵だな。だが、クイーンデスフロッグを倒したときに見た卵とは明らかに質が違った。あれは黒色だったが、こいつの色は毒々しいバイオレッド。おそらく、これは次代のクイーンとなるデスフロッグの卵ではないだろうか。普通のデスフロッグは緑と紫が混ざった体の色をしていたが、クイーンは紫一色だった。

なるほど、だいたいあらすじが読めてきた。人間たちはデスフロッグのクイーンがいる巣穴を襲い、調査した。月に移住する計画をしているのなら、デスフロッグのような妖怪は危険極まりない。排除しようとしたことは容易に想像がつく。そこで、このクイーンの卵を発見し、回収した。そのことに母親カエルが激怒して、卵を取り返しにここまで来たという結末だ。どこの世界でも母は強い。

結局、欲の皮を突っ張った人間の自業自得という話じゃないか。

『ま、俺の知ったこっちゃないが』

俺は卵をチューブに戻そうとして、思いとどまる。デスフロッグは全滅した。少なくとも、この場所には一匹も残っていない。この卵をここに置いて行ったところで、どうせ人間にまた回収されて、いいように実験の材料とされるに違いない。この塔が陥落した情報は人間側もすぐに知ることになる。いや、もう知っていると考えた方がいい。すぐにここはまた人間に占拠される。俺は機能が停止した要塞に立て篭もって人間と今すぐ徹底抗戦する気はないのだ。むしろ、逃げ場のないこの場所で、包囲されて精神攻撃電波を浴びせられたら目も当てられない。

これが人間の手に渡るのは癪だ。だったら、俺がここで食っちまえばいいじゃね？　さすがに六島苞には断然負けているが、これを食べれば結構な量の妖力が手に入る。強くなることはいいことだ。

『でも、これ、まずそうだな』

だが、それはカエルの卵。色合いから、ジャンボタニシの卵のさらにジャンボ版と言われても信じられる。俺はグルメを気取るつもりはないし、チビガメ時代はたいそうな悪食だったが、最近の主食は植物ばかりだったので、なんか抵抗がある。人型になったせいで、人間に近い感性が強まった気がする。

それに、見るからに毒あるぜ、って色してるしなあ。味見に、一舐めしてみる。

『ぺろっ！　こ、こいつは……ストロベリー味！』

俺は、黙って卵を甲羅の中にしまった。まあ、こいつの処遇についてはあとで考えよう。今は他にやることがたくさんある。断っておくが、これはネコババではなく、保護だよ。

23話「月の少女」

『ヨウリちゃーん！』

モニカが俺を呼んでいる。クイーンの卵を拉致げふんげふん、保護した俺は研究室から出て、モニカの声がする方に向かった。

『どうしたんだ？　そんなに慌てて』

『あの、何か聞こえるの。今まで聞いたことのないような不思議な声が……』

声がする、ということは人間の生き残りがいたのか。これはなかなかに危険な状況である。俺はすぐにモニカに案内を頼んで声らしきものがするという場所へ向かった。

そこは塔の最上階に位置する部屋だ。ロバートが近くに待機していた。剣を抜き、油断なく構えている。

『ヨウリ、あの部屋だよ。何か聞こえる』

ロバートもその声を“おかしな音”と評した。いったい、どんな化け物が待ち構えているのか。妖力探知を仕掛けて見たが、特に反応はない。俺は物影に隠れ、静かに耳を澄ます。

「……た……て、おか……」

『これは』

久しぶりに聞く肉声だ。なるほど、玉兎は念話でしか会話をしないから、この音が何なのかわからなかったのだ。俺はその声がよく聞こえる位置まで慎重に近づいて行く。

「たすけて……わたしを、おいていかないで……」

やれやれ。またＳＯＳを求める声だ。経験上、こういう事態に遭遇すると、ろくなことがない。

俺は危険がないと判断し、警戒を解いた。一応、攻撃されたら応戦できる用意はして部屋のドアをノックする。

「だ、だれ？」

どう返事をしていいかわからないので、何も言わずにドアを開けた。中は、ありていに言って病室だ。ベッドが一つ置かれ、その上に少女が寝ている。長くきれいな黒髪の美しい少女だった。成長すればたいそうな美人になるだろう。だが、今はまだ幼い。それに、一目見て重病患者だとわかった。ベッドの周りには用途のわからない機械の箱がいくつも置かれ、そこから伸びる点滴の線がいくつも少女の体につながっている。

たぶん、襲撃があった間、ずっとこの部屋で恐怖に震えていたのだろう。真っ青な顔色で、クマのぬいぐるみを抱きしめている。突然、部屋に入って来た俺を見て、びくびくと震えて怯えている。よし、ここは一発ギャグでもかまして明るい空気に変えてやろう。

俺は甲羅の中に頭だけ収納した。

「怪奇！　首なし人間！」

「きゃああ……」

少女は布団をかぶって亀のように閉じこもってしまった。和ませるはずが、逆に怖がらせてしまったようである。失敗失敗、てへっ。

『ヨウリ、中はどうなっているんだ？』

そこにロバートとモニカがやってきた。俺が緊張していないので、二人も危険はないと判断したようだ。俺は、人間の子どもがいることを説明した。

どうやら病気のようで、ここに一人で隠れていたことを伝えると、モニカはベッドの方へと歩いて行く。布団の上からでもわかるほど、少女の体は恐怖に震えている。その上から、モニカはやさしく手を置き、ゆっくりと撫でた。最初は縮こまっていた少女だったが、こちらに敵意がないことがわかったのか布団から顔を出す。

『怖かったわね。でも、もう大丈夫よ』

モニカが微笑みかけ、少女の頭を撫でる。ようやく力が抜けたのか、どっと疲れたように少女は相好を崩した。表情もほぐれている。

『姉さん、そいつから離れるんだ』

しかし、もう一人の玉兎は違った。ロバートは剣を抜き、人間の少女にその切っ先を向ける。少女は向けられた殺気に、再び身をこわばらせる。

『やめなさい、ロバート！　怖がっているわ』

『それは人間だよ、姉さん。ヨウリだって言ってたじゃないか、人間は悪い奴らだって。姉さんも知ってるだろ？　父さんたちが誰にやられたのか！』

『この子が悪いわけじゃないわ！　そんなことをしたところで、何の解決にもならない！』

モニカは毅然とした態度でロバートから少女をかばうように抱きしめた。

『ロバート、少し落ちつけ。モニカの言うとおりだ』

『……わかったよ』

戦争する側される側、どっちが悪くてどっちが正しいなんて、さして意味のある問題じゃない。別に俺はこの場でこの少女が殺されたって気にしないが、どう考えても利口な手じゃないことは確かだ。

『まあ、人質にはなるかもしれないからね。……僕は外を見張っているよ』

ロバートは剣を収めて、部屋から出ていった。感情的な年頃ですな。

「うっ、うぐっ……」

静かになった部屋に、嗚咽が響く。少女はモニカの服を握りしめ、その胸の中で泣いている。モニカは少女が泣きやむまで、ずっと抱きしめ続けていた。

＊　＊　＊

「お姉ちゃんたちは、だれなの？」

少女はモニカから離れたが、手は握ったまま、ベッドに寝ている。話しかけられたモニカは困った顔をして俺の方を向いた。

『ねえ、私にはこの子の言葉がわからないのだけど、ヨウリはわかる？』

そういえば、少女は日本語を話している。モニカは念話を使えるので、少女にテレパシーで意思を伝えることができるが、少女の話す言葉は理解できないので、一方通行のコミュニケーションしかとれない。俺が通訳してやろう。

『俺たちのことが知りたいみたいだ。せっかくだから自己紹介しようぜ』

『それはいいわね。でも、その前にヨウリは頭を出しなさい。この子が怖がっているわ』

『失礼』

ウィーン、ガシャン。首あり人間モードへ移行します。

『俺は葉裏だ。そんで、こっちがモニカな』

「葉裏と、モニカ……ねえ、ふたりは妖怪なの？」

『そうだ。妖怪だ』

首が収納されたり、テレパシーが使えるような奴らだ。少女にも俺たちが妖怪であることがわかっているようである。

「わたしは、輝夜っていうの。妖怪を見るのは、はじめてでびっくりしちゃった。葉裏はなんだか変だけど……モニカは頭にウサギさんの耳がついててかわいい」

『妖怪を見るのは初めてかー。あと、モニカのウサ耳がかわいいって言ってるぞ』

『あら、褒めてくれてありがとう』

「お父さまは、妖怪はとても怖いものだって言ってたけど、あれはウソだったのね。モニカはこんなにやさしいもの」

輝夜の表情は笑顔だ。こうして見ると、年相応のあどけない少女である。妖怪に関する知識もない。それに病人だ。どうして、こんな子どもが危険な戦場にいるのか気になった。

「ねえ、外で何があったの？　ものすごい音がして、ががーって建物がゆれたんだよ。お医者さまも、お父さまも、絶対ここから出るなって言ってた。みんなどうしてるの？」

『外で何があったかって？　え、あー、それはなあ』

俺は答えに詰まってモニカに目くばせする。妖怪に襲撃されて人間は全滅しました、なんて正直に言えるわけない。

『大丈夫よ、私たちがいるから、心配いらないわ』

「ほんとに？　輝夜がねむくなるまでずっといてくれる？」

『ああ、お前が寝るまで一緒にいてやるよ』

よかった、と輝夜は安堵する。まさか、この要塞が陥落したとは思っていないのだ。この少女にとって、ここは安全な場所であり、気にするべきは安心して眠りにつけるかということでしかない。だが、もう一つ、輝夜には気がかりなことがあるようだ。

「……さっき、もうひとり妖怪さんがいたよね？」

『ああ、忘れてた。あいつはロバート。モニカの弟だ』

「なんであんなに怒ってたの？　輝夜、なにか悪いことしちゃった？」

『気にすんな。あいつはいつも怒ってるんだよ』

「でも……」

『いいから、もう寝ろよ。また首なしお化けがくるぞ』

「やだ！　輝夜、もっとおはなししたい」

わがままなお嬢様は目がさえてしまったようだ。なんで月まで来て子どものお守なんかしなきゃならんのだと自問していると、突然、部屋の照明が点滅し始めた。やっぱり電気系統が壊れているようだ。

「きゃあっ、な、なに？」

『ほら、お前が寝ないからお化けが来ちまったじゃねえか』

「いないもんっ、お化けなんかいないもん！」

『ヨウリ、怖がらせすぎよ！　まったくもう』

ベッドから体を起こした輝夜をモニカが抱きしめる。そのとき、輝夜の腕につけられていた点滴の管が抜け落ちてしまった。

「あっ、これお医者さまが、はずしちゃだめって言ってたの」

そう言われても点滴のつけ方なんて知らないぞ。だいたい、この医療機材らしきものはちゃんと動いているのか。確認してみると、止まっていた。ディスプレイに「ＥＲＲＯＲ」の文字が表示されたまま、動く様子がない。なんかいっぱいついてるボタンを押してみたが、うんともすんとも言わない。完全に壊れていた。

これって、大丈夫じゃ、ないよな。

『……もうその管、全部はずしちまえよ。邪魔だろ』

「だめだよ。お医者さまがダメって言ってたもん」

『今日くらいいいじゃん。はずさないと、モニカにだっこしてもらえないぞ』

「えっ……そ、そうね。今日は輝夜、ちゃんとお薬も飲んだし、怖いのいっぱいガマンしたし、ちょっとくらいならはずしてもいいかも」

俺とモニカは輝夜の体から点滴の管をはずした。ベッドの上に座ったモニカは、膝の上に輝夜を抱えた。

『もう寝る時間だから、電気、消すぞ』

「うん」

チカチカと点滅する照明の電源を切った。暗くなった部屋は、窓から入る光に淡く照らされた。窓の外には地球があった。青い地球が光っていた。

24話「最後の夢」

輝夜の元気はどんどんなくなっていった。命の灯が燃え尽きようとしているのがわかる。本当は、一目見たときからわかっていた。その脆弱な命は消えかかっている。もともと、助からない命だったのだ。彼女の病は命を食いつぶし、終わりを迎えようとしていた。

「かぐやね、さみしかったんだ、とうさまも、かあさまも、おしごとがいそがしくて、すぐにどこかにいっちゃう」

モニカの腕の中で、輝夜は話しつづけていた。体調が崩れたことに自分でも気づいているだろう。それを悟らせないように話し続ける。バレバレだが。

『さっき友達が来てくれるから寂しくないって、言ってたじゃん』

「そう、えーりんが、きてくれるの。えーりんは、かぐやのいちばんの、ともだち。あたまがすっごく、いいんだよ。けほっ！　けほっ！」

咳きこむ輝夜の背中をモニカがさすった。モニカは笑顔だが、ぎこちない。こっちもバレバレだ。

「でも、えーりんは、かぐやのびょうきをなおす、おくすりをつくるっていって、さいきん、あってくれないの。えーりんは、かぐやのこと、きらいになっちゃたのかな？」

『そんなわけねえだろ。お前はこんなところに来ずに、えーりん

と一緒にいればよかったんだよ』

「そう、かも。かぐや、わがままいって、ここにきたの。ここはとうさまの、しごとばだから、つきにいきたいって、わが、まま、いって、とうさまと、いっしょにいたかったから……」

輝夜の父親も娘の死期が近いことを知り、最後の時間を共にすごそうと思っていたのかもしれない。死ぬ前に月の景色を見せてやりたかったのかもな。

「だから、さみしいのは、いや、なの、いっしょに、いて……」

『安心しろ。お前が眠るまで一緒にいてやるって、約束しただろ』

「そうだ、ね。かぐや、もう、ねむくなって、きちゃった。おやす、み……」

あっけなかった。すうっと輝夜の体から生命の力が抜けていく。モニカは気づいていなかったが、その瞬間、輝夜の体はただのモノになっていた。輝夜はモニカの腕の中で、眠るように息をひきとった。

＊　＊　＊

俺とモニカは、輝夜の体をベッドにもどして部屋の外に出た。泣きじゃくるモニカを慰めるのは大変だ。それにしても、自分の一族を危機に追い込もうとしている種族にこれだけ愛情を注げるモニカは、大物なのか、馬鹿なのか。たぶん両方だ。

モニカの泣き声を聞きつけて飛んできたロバートにも事情を話す。ロバートは微妙な顔をしていた。

『さて、もうここにこれ以上とどまり続けるのは危険だ。すぐにでもここを離れよう』

まだ調べたいことは色々ある。輝夜にも人間に関する情報はあまり聞き出せなかった。特に軍事的な情報についてはもっと集めたいところだが、それよりも今は一刻も早くここを出るべきだ。

窓の外を見ると、朝日が地平線の向こうに昇りかけている。随分と長い時間ここにいたことになる。まったく、やけに感傷的になってしまったものだ。

ふと、外の風景の中に、何かうごめく物がいた。まさか敵が来たのかと注視すると、そこにいたのは玉兎だった。クレーターの丘の向こうから、ひょこひょこと数え切れないほどの玉兎たちがこの塔を目指してやってくる。

『仲間たちだ！　どうしてここに来たんだ？』

『ここはもともと玉兎の村があった場所なんだろ？　仲間を引き連れて取り返しに来た、とか？』

考えてもわからない。とにかく、外に出て聞いてみよう。ああ、もし人間のことを知っているのだとしたら、耳のない俺は人間と疑われるかもしれないな。そうだ、ロバートにもらった帽子をかぶろう。これなら玉兎の戦士に……幼い戦士に見えないこともない。人間は野外で活動するときは宇宙服を着なければならないので、耳が生えているかどうかなんてわからなかったかもしれないが。

『もしかしたら、あのなかに父さんもいるかもしれない！　おーい！』

塔から出た俺たちは毒の霧に注意しながら玉兎たちの方へと走る。しかし、妙な格好をした玉兎たちだ。規格化された軍服のような服装を、全員がしている。ロバートたちがいた村の玉兎はもっと原始的な服装の者ばかりだったが、他の村では技術が進んでいるところもあるのだろうか。

『いや、待て、何かおかしい』

あの玉兎、銃を持っているぞ！

気づいた時には手遅れだった。周囲を銃器を持った玉兎たちに包囲されていた。玉兎に銃を生産できるほどの技術力はないはず。だとすれば、この銃は人間が玉兎たちに与えた物になる。もしや、人間と密約を結び、協力している玉兎たちがいたということか。

だが、あの妖怪嫌いの人間たちがそんなことを考えるだろうか。

『降伏セヨ。抵抗スル場合ハ武力ヲモッテ殲滅スル』

いや、もっとおかしなところがある。この玉兎たち、表情がない。どいつもこいつも能面のように無表情だ。そして、一番おかしな点はウサ耳だった。明らかに作り物じみている。まるで取ってつけたかのような違和感しかない。ぬいぐるみの耳を縫い付けたような印象だ。こいつら、本当に玉兎なのか？

『父さん……父さんがいる！』

『なに！？　どこだ！？』

ロバートが指差した方向に、見えた。その顔は確かにジョージのものだった。だが、ジョージではない。俺の知っているジョージは寡黙でしゃべるのが苦手な奴だが、自分の息子に銃を向けるような

男ではない。その頭には、やはり作り物の耳が生えていた。
こうなったらしかたがない。強行突破だ。俺は妖力弾を放つため、精神を集中させる。
だがそのとき、わずかに俺の頭上から殺気を感じた気がした。頭上って、空だぞ。いや、まさか……！

『ちくしょう、そこまでするか』

俺たちの真上に三機の小型宇宙船が飛んでいた。この位置からじゃ、妖力弾はとどかない。だが、やるしかあるまい。俺は上空に向けて弾を放つべく手を構える。
だが、それをあざ笑うかのように、天から狂気の電波が放たれた。精神攻撃電波。それも、俺が前に食らったものとは比べものにならないほどの強力な電波だった。俺は体を駆け抜ける激痛に逆らうことができず、膝をつく。脳が痛覚という感覚のみによって占領されていく。
倒れ伏す俺たちの周囲には、軍服を来た玉兎たちが平然として立っていた。そいつらは俺たちを拘束する。その記憶を最後に、俺の意識はかすんでいった。

25話「運命の出会い」

ぼんやりと意識が浮上する。ここはどこだ。俺は確か、人間に捕まった。俺は死んだのか。いや、まだ死んではいない。俺は俺自身の命を感じる。ゆっくりと目を開けると、万華鏡のように回る視界が焦点を結び始めた。

「あら、お目覚めのようね、妖怪さん。ああ、月の妖怪は言葉が通じないのだったわね。でも、そんなことは些細な問題だわ。人間に捕まった気分はどうかしら？」

目の前にいるのは、小さな女の子だった。輝夜と同じくらいの歳だろうか。それにしては小賢しい雰囲気がぷんぷんしている。その少女は赤と青の二つの色をした変わった服装だった。

「月の妖怪はウサギとカエルだけだと思っていたけど、あなたみたいな新種もいたのね。解剖して調べるのが楽しみだわ。ギリギリ死なない程度で許してあげるから安心してね」

「うるせえ、全部聞こえてんだよ」

俺の体はかたいベッドに固定されていた。それも当然か。これは手術台だ。甲羅は脱がされ、部屋の隅に置かれている。手足は四方に伸ばされ、頑丈な金具で固定されていた。俺が本気を出せばこれくらい壊せないはずはないんだが、どうにも力が入らない。何をしやがった。

「あら、あなた私たちの言葉がわかるの？　興味深いわね。あと、

あなたの体に特性の痺れ薬を打っておいたから。5時間は効果が続くと思うわ」

「そいつはご丁寧にどーも。だが、そんなこと言われたからって、諦めきれるかよッ！」

俺は力の限り手足を踏ん張った。奥歯がつぶれるくらい食いしばって力を込める。だが、いけるかと思った瞬間、しゃれにならない電流が俺の体を通って行く。

「あびゃびゃびゃびゃあああああ！！」

「あはははは、言い忘れてたけど、無理に動こうとすると枷から高圧電流が流れるようになってるから」

「ごおお……オーマイガッ！」

なんてこったい、万事休す。こいつは俺をどうする気なんだ。実験のモルモット？　冗談じゃない。そんなことをさせるくらいならひと思いに殺された方がましだ。

「ねえ、助けてほしい？」

「ほしいです！　まじで！」

「うふふ、ダメよ」

このクソガキが。手足が自由なら泣いて謝らせるところだ。だが、それよりも俺はこいつの醸し出す空気が気に入らない。ただならない負の感情が見える。とうてい子ども一人が抱えるには重すぎる闇。

「……お前は何者だ？」

「自己紹介が遅れたわね。私は、そう……八意永琳とでも呼んでちょうだい」

「えーりん？」

その名前には聞きおぼえがあった。輝夜が言っていた友達だ。確か、輝夜の一番の友達の名前だったはず。

「お前がえーりんなのか？　ほんとに？」

「そうよ。どうしてそんな反応をするのかしら？」

「はあ、輝夜の友達って聞いてたからどんな人間なのかと思ったら、とんでもねえアバズレ……うぬぐあああ！！」

それ以上言葉は続かなかった。永琳が手元にあったコントローラーのスイッチを入れた。そして、俺は電撃を食らう。俺が暴れなくても、任意に電気で痛めつけることは可能なのか。１０秒くらいは電撃が続いただろうか。体中がガクガク痙攣して歯がカチカチ鳴った。くそが、これじゃこんがりグリルにされちまう。

「なにすんじゃコラア！」

「うるさい、黙れ。下賤な妖怪の分際で、そのきたならしい口で輝夜の名前を呼ばないで」

永琳は今までの張り付けたような笑顔を止めていた。血も凍るよ

うな無表情、だが、その奥には激しい憎悪の炎が燃えている。

「今回の作戦でたくさんの人が亡くなったわ。あなたたちが襲撃したせいでね。その罪は重いわよ」

「勝手に人のせいにすんな。人間がやられたのは、人間の自業自得だ」

「そうね。確かに人間は傲慢だわ。私だってこんな一方的な侵略であなたたちと接することになったことを憂いている。正直言って、上層部のやり方は気にくわないわ。もっと穏便な方法があったでしょう」

永琳は感情のない瞳でゴミでも見るかのように俺を見下している。だったら俺も同じように見返してやるだけだ。互いのボルテージがだんだんと高まっていく。

「でもね、私にも守りたいものがあった。たとえ、あなたたちを滅ぼすことになっても譲れないものが。そのためならどんなことだってやる覚悟があった。その私の至高の目的をあなたたちが奪った」

「輝夜のことか？」

永琳がぎりっと歯をくいしめる。もはや心のうちの憎悪を隠す様子はなかった。永琳が電撃のスイッチを押す。俺は激痛を気合いで押し込めた。こんな奴のために悲鳴をあげて喜ばせてやる気はない。

「そうよ！　あの襲撃がなければ輝夜は生きられた！　全部あなたたちのせいでしょ！？」

「ぐうっ！　輝夜が死んだのは病気のせいだっ！　俺のせいじゃない！」

「違うわ！　あの子の病気を治す薬を私は研究していた！　もう少し時間があれば、あの子を助けられた！　その時間をあなたが奪ったのよ！」

「適当なこと言ってんじゃねえよ！　あの病気はもう治せないほど輝夜の魂に食い込んでいた！　だったら、あと何日あれば薬は完成したんだ！？　何時間！？　何秒！？　言ってみろよ！？　おらあ！」

永琳は答えられない。それが何よりの返答だった。永琳は悔しさにうめき、涙を流していた。結局、間に合わなかったということでしかない。それを永琳自信が納得できないのだ。どれだけ頭が良くても、こいつはまだ子どもだ。自分の感情を制御できずにいる。

「黙りなさい！　そもそもなんであなたは輝夜の名前を知っているのよ？　どうして私の名前を？　輝夜から聞き出したの？　どんな方法で？」

「話をした、だけだっ！」

「……嘘よ。嘘に決まってるわ。輝夜はね、とっても臆病なのよ。人見知りする子なの。あなたみたいな妖怪と普通に話ができるわけないでしょう？　そんな見え透いた嘘をついて私を騙そうとしても無駄なの！　どうせ、身の毛もよだつようなむごたらしい拷問をして無理やりしゃべらせたに違いない！　ただでさえ、弱ってる輝夜に、ひどいことして殺したに決まってるのよ！」

いい加減、俺も頭に来た。こちとらガキの戯言に付き合わされて、無実の罪をでっち上げられ、その上電撃パーティーの真っ最中だぞ。俺は輝夜の最期を見届けてやった。それも俺に出来る限りの最大級の配慮をした上でだ。そのお礼がこの罵倒か？　反吐が出る。

「……知りたいか？　輝夜の最期」

「ッ！！　あああああああっ！」

永琳はコントローラーを床に叩きつける。その衝撃で壊れたのか、電撃は止まった。だが、永琳の憎しみの炎は先ほどに増して熱く燃え上がっている。無表情から怒りをあらわにし、その次は笑顔にもどっていた。怖いくらいの笑顔。

「やれやれ、手加減してくれよ。人間だったらさっきの電撃で３０回は死んでるぞ」

「あはははは！　このくらいでへこたれてちゃダメよ。あなたにはもっと苦しんでもらわないと。輝夜が受けた分の苦痛をあなたにも味わってもらうわ。そうじゃなきゃ、不公平でしょう？」

くそ、今度はどんなびっくりどっきりマシーンが飛び出してくるんだよ。俺はいつまでガキのお遊びに付き合えばいいんだ。

「実はもう、あなたをどう痛めつけるか、その方法は最初から決めてたの。あなたの頭の上にあるソレよ。ああ、首が動かせないから見えないわよね。今、鏡に映してあげるわ」

永琳はそう言って手術台の上の大きな鏡を動かす。俺はそこに移る俺自身の姿を見た。そして、俺の頭の上あたりに置かれた装置の

存在についても。

「な、なんだ？　これはウサ耳か？」

それは、作り物のウサ耳だ。そう、俺が捕えられたとき、俺たちを包囲していた玉兎たちが耳につけていたあれだ。

「これはねえ、『ウサギ型月妖怪用インターフェース』って言うのよ。急ごしらえだからこんなデザインになっちゃったの」

「は？　何の話だよ？」

「あなたも受けたことがあるでしょう、妖怪の妖力を狂わせる電磁波。これはその応用で作ったものよ」

俺が苦しめられたあの電波の正式名称は『妖力過活性化電磁波』というそうだ。妖怪の妖力を特殊な電磁波によって外部から操作できないかという研究のもと作りあげられた。もともとは妖力を不活性化し、妖術を封じるための兵器を作る研究だったが、逆に活性化させることしかできなかった。

だが、その効果は思わぬ結果をもたらす。普通の妖怪ではこの妖力の活性化に順応できず、精神が壊れて発狂するのだ。こうして完成した兵器が『妖力過活性化電磁波』である。そして、人間は月にて玉兎という特殊な妖怪のサンプルを入手した。玉兎は妖力の活性化にある程度順応できるという体質を持っていたのだ。

（なるほど、それが“フォースの循環”か）

それについては心当たりがあった。玉兎三技を使うために必要な妖力の運用法だ。フォースの循環とは、妖力の活性化のことだった

のだ。だから、玉兎は少ない妖力で高い威力の技を使うことができたのである。

「このインターフェースをウサギ妖怪の頭に移植することによって、適度に調節された妖力過活性化電磁波を脳内に発信できる。すると、ウサギ妖怪は常に軽度の“発狂状態”を維持できるようになるの。そうやって精神が程良く摩耗する状態を作り出し、その隙間にこちらが用意したプログラムを書き込むことで、何でも言うことを聞く操り人形となるのよ」

「おいおい、なに平然とトンデモナイ説明してくれちゃってんの!?」

だいたい、それは玉兎だから耐えられるって話だろう。俺の精神が妖力活性化に順応できる保証はない。いや、確実に精神を殺される。あんな痛みに耐えられるはずがない!

「待て! いくらガキだからって、やって良いことと悪いことの区別くらいつくだろ! これはぶっちぎりに悪いことだ!」

「ごめんなさい、私、まだ子どもだからわからないの」

永琳が手元の機械を操作する。すると、ゆっくりとウサ耳が俺の頭に向かって近づいてくる。あれが頭に植え付けられれば、あの地獄の苦しみをこれからずっと味あわされ続けることになる。俺はこれ以上ないくらいに焦った。

「ふざけるな! お前は自分が何をしているのかわかってるのか!? あの電波はマジでやばいんだよ! 今すぐやめろ!」

「うふふ、知ってるわよ。実験に使った妖怪の末路は何度も見てきたから。怖いでしょう？　それにね、このインターフェースは私が特別に調整したのよ。通常の１００倍の強さの電磁波が発生するように、ね」

俺は暴れた。手枷足枷から電流が走るが、そんなことどうでもいい。こいつは俺を殺す気だ。しかも、最も残虐な方法で。

「やめろ、死ぬ！　そんなことされたら死んでしまう！」

「大丈夫、私の計算だと一日くらいは持つはずよ。簡単に調べてみたけど、あなたって結構頑丈みたいだから」

「一日!?　嫌だ！　そんなことするくらいだったら普通に殺せ！　今すぐ殺してくれ！」

「あはは、それじゃあ罰にならないでしょう？　あなたには罪を償ってもらわないと」

ウサ耳が俺の頭に迫る。なんだこのアホみたいな状況。そんなかっこ悪いもの頭にくっつけて俺は死ぬのか。笑えない。

「頼む、なんでもする……謝れって言うんならいくらでも謝る！　お前の言うことを聞く！　お願いだからこれを止めてくれ！」

「……輝夜もあなたにそんなふうに命乞いしたのかしら？　もしあなたが私の立場だったら、そんな願い、聞き入れると思う？」

「俺は輝夜を殺していない！　輝夜の最期を、あいつが安心できるように見守ってやった！　お前は勘違いしているんだ！　俺は何

もしてな、あ……！」

頭頂部にウサ耳がくっついた。その瞬間、脳みその中を何かに蹂躙された。視界が歪む。視覚が変わる。色とりどりの極彩色で展開していく。激痛を通り越した先にあったのは絶望だった。

【ソうだ、云いワスれてＴＡワ。セッカくＵサギサんＲＡＳＩＫＵなったンデスもＮＯ、尻尾もＴＹＡんとツケてアＧＥＮＡＩＴＯ≫

ずぐんとケツに何かが食いつく。その衝撃で俺の目の前は砂嵐になった。もう何も見えない。聞こえない。深く深く、意識が沈む。どこまでも下に落ちていった。

26話「アナザー・サイド・永琳」

輝夜の訃報を知らされた。私は自分の研究室に閉じこもり、ひとりきりで泣いた。

先日完成したばかりの月に作られた第一調査基地。輝夜はそこで働く父親に連れ添われ、地球周回上に位置する宇宙ステーションから月へと向かった。昨日のことだ。本当は、病状が悪化の一途をたどる輝夜をステーションの外に出したくはなかった。新造の基地よりこちらの方が設備もそろっている。輝夜の体のことを何もわかっていない彼女の父親を恨みもした。だが、彼は政府の長官だ。私が意見できる相手ではない。それに、今回の外出は輝夜自身の意思でもあった。

万が一のことを考えなかったわけではない。そのための対策はされていたはずだった。だが、悲劇は起きた。妖怪の群れに基地は襲撃され、全滅した。原因は不明、生存者なし。襲撃時に基地からステーションへの増援要請はあったのだ。だが、軍の上層部は基地の防備を過信していた。ことの重大さに気づいたときには、すでに基地は陥落寸前の状況だった。その惨状にしり込みした上層部はさらに兵の派遣に手間取り、結局、軍が動き出したのは襲撃発生から6時間が経過した後のことだった。

私の権限で知り得た情報はここまでである。上層部は他に後ろめたい事情を何か隠しているはずだ。一般市民には、情報統制によって不幸な事故があったとしか伝えられていない。悔しさで涙が止まらなかった。

私は今まで輝夜を救うために頑張ってきた。彼女だけが、損得なしに私のことを友人として受け入れてくれた唯一の理解者だった。私は自分の異常性を知っている。私の技術者としての才能は異常だった。年齢にそぐわない頭の良さ。それによって得られた物は今の

地位くらいのものだ。失った物は多すぎる。輝夜は掛け値なしの私の親友であり、希望だった。

私は一番大切な友達を失った。研究室にならぶ、薬の資料。すべてを輝夜のためにささげてきた。全部、無駄になった。あれだけ燃え盛っていた、研究に対する情熱がなくなっていく。糸が切れた人形のように、私は無気力だった。

基地から帰還した宇宙船は亡くなった人たちの遺体を回収してきた。聞いた話では、どの遺体も無残なもので原形をとどめているものは、ほとんどないという。私はとても輝夜のところへ行く気にはなれなかった。ぐちゃぐちゃになった彼女の死体を見て、正気を保てる自信がない。

そこで得た情報の中に、戦地で確保したという妖怪がいるというものがあった。基地を襲撃した妖怪はカエル型月妖怪の群れだということは知っていた。兵が基地内と周辺の確認を行った際、それらの妖怪はすべて死滅していたという。しかし、その中でウサギ型月妖怪二匹と新種と思われる月妖怪一匹の生存が確認された。軍は戦闘の状況を聞きだすために、その三匹を捕獲していた。

上層部は私にこの妖怪たちの処理を命じた。新種妖怪の調査とその後の処分を任された。思えば、あのときから私の心はおかしくなっていた。

妖怪とは人間をエサにする獣である。彼らが人間を襲うことは種族的な本能であり、それは種としての正しい反応だ。だから、人間はそれを真っ向から叩きつぶすことに罪悪感などもたなくてよい。だが、私はその単純で淡泊な関係を超えた感情を抱いてしまった。憎しみだ。妖怪が基地を襲い、輝夜を殺した。それは紛れもない事実である。私を無気力から引き揚げた原動力は憎悪という感情だった。

妖怪は別の部門で簡単な検査をされて運びこまれてきた。新種妖怪は危険度最高ランクにあたるレベル５の妖力を保有していた。まずはこの妖怪から尋問することに決める。

「……？」

焦点が定まらない目つきで部屋を見渡す妖怪に声をかける。月妖怪が地上の言語を理解できないことはわかっている。これは話しかけているというよりも、自分を冷静にさせるための無意味な行動だ。なるべく感情を表に出さないように心がけた。

だが、気がついたときには悪魔のような思考を行っている。それでも私は逡巡した。これは私の個人的で身勝手な感情だ。その赴くままに暴走することは間違っている。調整済みの三つのインターフェースを使用するつもりはなかった。この妖怪がある言葉を発するまでは。

「お前がえーりんなのか？　ほんとに？」

本当は違う。私の名前は八意××××という。永琳の名は輝夜がつけてくれたものだ。発音しづらいと文句を言った輝夜が私にくれた名前。私の一番の宝物だ。輝夜がいなくなった今、その想いはいっそう強くなる。だから、この名前を名乗ってしまったのかもしれない。だが、なぜこの妖怪がそんな反応をするのか気になった。そして、その事実は私の心をかき乱す。

「はあ、輝夜の友達って聞いてたからどんな人間なのかと思ったら、とんでもねえアバズレ……うぬぐあああ！！」

妖怪が何を言ったのか、理解できなかった。永琳という名前は私と輝夜の間でしか交わされない言葉だ。それをなんでこの妖怪が知っている。それに輝夜から聞いたと言った。こいつは輝夜と話したのか。そのとき輝夜は生きていた。こいつは輝夜に何をしたんだ。

妖怪は何もしていないと言い張っている。輝夜は病気のせいで死

んだという。信じられない。何もかも嘘としか思えない。仮に本当に病気が原因で死んだとしても、襲撃は輝夜に負担をかけた。襲撃さえなければ輝夜は生きながらえ、輝夜を救うための薬を私が完成させていたのだ。

「適当なこと言ってんじゃねえよ！　あの病気はもう治せないほど輝夜の魂に食い込んでいた！　だったら、あと何日あれば薬は完成したんだ!?　何時間!?　何秒!?　言ってみろよ!?　おらあ！」

言い返せない。悔しい。もう後戻りできないほどに、激情が私を支配していた。インターフェースをこの妖怪に取り付けないと気が済まない。

それまで余裕を残していた妖怪は急に焦り始めた。いいざまだ。輝夜も、こうして苦しめながら殺したに違いない。許せなかった。生まれてこの方、ここまで感情をあらわにしたことはない。私は、やめてくれと泣きながら懇願する妖怪を見捨てる。装置を止めることはなかった。

それからは、いつも通り。実験で精神が壊れた他の妖怪と同じだ。物言わぬ人形になった。しかし、私の心は晴れることがない。

「ははは……」

乾いた笑いがこぼれる。それは自嘲だった。自分の浅はかさに嫌気がさす。それでもとまらない憎しみ。私はどうすればいいのかわからなかった。

インターフェースを取り付けた妖怪は、静かに目を閉じて動かない。今頃、終わることのない悪夢を見ているはずだ。しかし、その体はインターフェースから送られるプログラムによって、こちらの思い通りに動かすことができる。

「あなたが悪いのよ……私だってあの子と最後のお話をしたかったのに……もっと、たくさん一緒にいたかったのに……」

ただの八つ当たりだ。枯れたと思っていた涙がまたあふれ出す。妖怪の少女はほとんど人間と変わらない容姿をしている。深い眠りについたその顔は美しかった。まるで、王子様のキスを待つ眠り姫のように。だが、その双眸は唐突に、ひとりでに開かれた。

「オレハヤッテナイ」

「ひっ……！」

勝手に口を開く妖怪。私は心臓が縮みあがる思いをした。そんなことはありえないのだ。この妖怪の意識は完全に掌握している。だから人形。人形はひとりでにしゃべらない。

「オレハコロシテナイ」

無機質で抑揚のない声。だが、はっきりと喋っている。私は床にぺたんと尻もちをついていた。血の気が引いて行く。気味が悪いなんてものじゃなかった。

「だ、黙りなさい！　話していいと命令はしてないでしょう！？」

「オレノセイニスルナ」

妖怪の体がボコボコと膨れ上がる。それまで可憐な少女の形を持っていたソレは、異形の物体へと変化していた。威圧を実体化させるほどの妖力があふれている。それはまるで樹木のお化けだった。

体のところどころに緑の葉が生えている。
拘束具から発生する電流などものともせず、強引に破壊して脱出された。その物体の膨張はなおも止まらず、あっという間に研究室を覆い尽くすほどの勢いで成長していく。壁には蔦が張り巡らされ、肉なのか植物なのかわからない怖気の走る物質が脈動しながらぶよぶよと膨らんでいく。

『コロシテヤル』

もはや私にどうにかできる状況ではなかった。私に向かって蔦が伸びてくる。足に絡みつこうとするそれを必死で振りほどいて研究室の外に出た。半泣きで扉を閉めて緊急警報のスイッチを押した。すぐさま武装した兵士が駆けつけてくる。
事情を説明して後はここを兵士に任せようとしたが、まだ詳細な状況がわからないので、こころにいろと言う。一般の兵士風情が誰に向かって命令しているのだ。私はこんなところに1秒でもとどまっていたくはなかった。私の慌てぶりを見てただ事ではないと感じたのか、兵士たちも緊張し、余計に私を開放してくれる様子がなくなった。
研究室は危険な実験を行うことも想定されている。もしものときは隔離できるように、その扉は内部と外部の空間を完全に遮断できる構造になっている。扉を閉めた今はさっきまでの悪夢が嘘のように静かだ。とにかく扉を開けなければ中がどうなっているかわからない。兵士たちは意を決して封印を解いた。
その途端、中からあふれ出すナニカ。半固体状のうごめくナニカが我先にと外に出てこようとする。扉を開けた兵士はあっけなく飲み込まれ、音もなく姿を消した。他の兵士は銃弾を撃ち込むが、めり込むだけで効果がない。レーザー兵器で焼き切ってもすぐに再生する。
幸運だったのは、最初に飲み込まれた兵士が生きていたことだろ

う。彼は最期の力を振り絞って扉を再び閉めたのだ。降りてきた扉に引きちぎられ、ナニカはようやく活動を停止した。

私は迷わず制御室へ連絡を入れた。研究室の区画をステーションからパージする。言うまでもなく最終手段だ。一応、その権限は有しているが、お咎めはあるだろう。だが、そんなことを言っている場合ではなかった。なによりも恐怖という感情が先行していた。

そして、その命令は実行された。

＊　＊　＊

私は何をしているのだろうか。

後に残ったのは、心を埋め尽くす空虚だけだ。

取り返しのつかないことをしてしまったと、事が終ってからようやく認識する。私が手を下した哀れな妖怪は、大気圏中で燃え尽きながら地上へ落ちていったことが確認された。

今、私は遺体安置室に来ている。会議を終えた私の足は自然とそこへ向かっていた。

輝夜に会いたかった。あの妖怪が言っていたことを確かめたかったのだ。

「輝夜……」

その体は私の記憶にある輝夜のまま。誰にも蹂躙されたあとなど残っていない。そして、その表情は安らかな笑顔だった。

輝夜が眠るその傍らで、膝をついて泣き崩れた。私は、これまでにない、本当の意味での妖怪に対する罪悪感を抱いていた。

「ごめんなさい……」

27話「ウサギは何を見て跳ねる」

俺は森の中を歩いていた。ドスグロイ森。
たぶん、森。木らしきモノがたくさん生えているからな。それにしても、へたくそな木だ。クレヨンで塗りつぶしたみたいな色をしている。もっと丁寧に色づけしてやれよ。
こんなところにいたら気が滅入る。俺は休むことなくこの森を歩き続けていた。一日も休まない。しかし、ここには太陽の光がとどかないので、いつが昼でいつが夜かわからないのだが。早く出たい。俺はションベンしたいのガマンしてるんだよ。さっさと出してくれないか。

『げろげろげろ』

どこからともなく笑い声が聞こえてくる。いつものことだ。それより、俺の体はどうなっているんだ。テキトーな色付けしやがって。だから、丁寧にやれって言っただろ。見ろ、腕のところの肌色がはみ出してる。ちゃんと線に沿って塗れ。お前は塗り絵も満足にできないのか。

『げろげろげろ』

『うるせえなあ』

この笑い声、上から聞こえてくるんだよな。俺は上空を見上げる。その視界の遥か上まで伸びあがる木の幹。遠近法の原理に従って、天を突くその先端はかすんで点になる。光はとどかない。
見あげていると、何かが落ちてきた。わざわざ俺の真上にだ。俺

はぶつからないように急いで移動する。
それはさっきまで俺がいた地面に叩きつけられた。赤い汁が飛び散る。なんだこれは。

『げおRげろGREO』

それは卵だった。赤い卵。魚卵のやわらかな膜が破れ、中からどろりとヘドロが出てくる。じっと見ていると、大きな目玉が二つあることがわかった。しっぽがあって、オタマジャクシのよう。孵化の直前だったのだろう。今にも死にそうなツラしてるくせに、俺のことを見て笑ってやがる。

『お前がずっと笑ってたのか。ん？　うおっ！？』

また上から卵が降って来た。べちゃりべちゃりと地面に落ちて、熟れ過ぎた柿のように散乱する。運悪く、その一匹が俺のすぐ近くに落ちてしまったために、汁がひっかかってしまった。

『汚ねえ、汁飛ばすんじゃねえよ！　クソが！』

俺は潰れた卵を蹴り飛ばす。いけない、足にも汁がくっついてしまった。

『あーもー、最悪だ……』

べちゃり

足元を確認していた俺の頭の上に何かが直撃した。吐き気を催すほど生臭く赤黒い粘液が俺の頭上から垂れてくる。最悪だ。
俺は頭の上からやわらかい肉の塊を引きずり降ろした。そいつは

俺の手の中で元気にビチビチうごめいている。ぎょろぎょろの目玉で俺をせせら笑うオタマジャクシ。不愉快極まりない。

『失せろ』

地面に落として踏みつけた。腹から細長い内臓がはみ出す。いい気味だ。もう一回ふんづけてやろうと、足を振り上げる。

べちゃり

また、落ちた。俺の頭の上に落ちた。赤い粘液が滴り落ちる。ふざけるな。こいつら俺を狙ってるんだ。自分の命をかけて俺をからかっている。この憎々しい笑顔。うざいうざいうざい。

『この両生類が！　何様のつもりだ！』

近くの木の幹に叩きつけた。俺は、えーっと、爬虫類だぞ！　お前らより偉い。鳥類＞爬虫類＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞両生類なんだよ。

そこでふと気づく。俺の肌が赤く塗れていた。

『あああああああああ！！』

クソクソクソ！　俺の肌になんてことしてくれるんだ！

俺は必死に赤い粘液を拭いとる。でも、ダメだ。俺の肌色と混ざって変な色になる。肌色にもどらない。俺の肌色（テイギ）になんてことを。お前らの臭くて汚い粘液のせいだ。だいたい肌色って何色だよ。白、黒、黄色？　ほら、もうわからなくなった！

あと何匹、木の上に隠れていやがる。俺は目を凝らして頭上を見上げる。

『げろげげろ』

いっぱいいる。無数にいる。木の枝に実っている。新たな生命を実らせる樹。そして、その命を冒涜する。

『落ちてこい！』

俺は跳ねる。ジャンプジャンプ。

赤くて丸い月見て跳ねる。

でも、とどかない。奴らは俺の遥か高みにいる。俺を見下して笑っている。

『そうかヨそうか！　なら、俺がお前らのところに行ってヤル！一匹ノコラずもぎ取ってヤル！』

俺は木の幹に手をかける。つかまりどころのない真っ直ぐな木。爪を食いこませてでもしがみついた。そして登る。ひたすら昇る。

その俺の顔面に向けて赤い月が落ちてくる。登っている最中だ。避けることはできない。月がぶつかるごとに、俺の体が赤く染まる。俺の定義がわからなくなる。

『チクショウ！　フザケヤガッテ！　イマニミテロ！』

どこまで登っても終わりがない。地上はかすんで見えなくなった。それでも木は上へ上へと続いている。いったいいつまで登ればいいんだ。このままじゃ、頂上にたどりつくより先に俺が俺でなくなってしまう。

そのとき、俺の行く手に何かがぶら下がっていた。今まで一本もなかった横枝がある。そこに、ウサギの首が吊り下げられていた。

真っ赤に塗れて、輪郭しか残っていない。

【ヨウＲＩ、無理ＤＡＹお。キミは地上ＮＩもどッタ方ガＩＩ】

『ウルセエ！　オレハイク！』

【不可ＮＯだ。僕タちＭＩＴＡＩニなＲＩタイノ？】

お前の言うことは聞き取りづらい。

俺は気にせず登って行く。しばらくすると、またウサギの首がいた。

【やめたＨＯＵガいいＷＡ。今ＳＵぐ引き返シテ】

吊り首を引きちぎって捨てた。ウサギの首はみるみる下へ落ちていき、すぐに見えなくなった。

それから何時間経ったか覚えていない。何日か経ったかもしれない。あるいは、何秒かだったのだろうか。

なんでたどりつけない。もう十分登ったはずだ。頭は赤く染まっていた。もうそこは“俺”じゃない。これは毒だ。俺という存在を殺す毒。早くしないと俺のすべてが毒に染まる。そうすれば、あのウサギみたいに意味のわからないナニカにされてしまう。

俺を突き動かす力の源は憎悪だった。ひたすらにあの赤い月が憎い。怒りではらわたが煮えくりかえって口から飛び出そうだ。必ず俺の手でもぎる。

『オチロ』

もぎりとる。

『オチロ』

永琳、俺はお前を。

『オチロ！』

28話「起きたら花畑」

俺はあれからどうなったのだろうか。

永い悪夢を見ていた。終わりのない悪夢。だが、俺はそこから抜け出した。

依然として俺の妖力は電波によってかき乱されている。一瞬でも気を抜けば、あの悪夢に逆戻りだ。それだけはなにがなんでも避けなければならない。二度とあんな夢はみたくなかった。

俺が目覚めると、そこは花畑だった。天国にでも来たのかと思ったが、すぐにその考えは否定できた。空に月があったのだ。ということは、ここは地球である。俺は、どういう経緯かまた地上へもどってきていた。

ここが月ではないという事実に俺は落胆した。いや、落胆なんてものじゃない。絶望した。永琳は月にいるのだ。地球からどうやってあいつのところへ行けばいいのだ。

俺の姿は一本の大きな木になっていた。まるで六島苞である。体に残る妖力の性質か、無意識にこの形をとっていた。そして、その妖力の量を見て愕然とする。とんでもない増量だった。それはつまり、俺がとても長い年月を生きた証である。その量は、千年や万年というレベルの増加量ではなかった。

まったくもって嬉しくなどない。永琳は人間だ。この億にも届こうかというほどの歳月を今もまだ生きているはずがない。俺は絶望を通り越して発狂しかけた。悪夢と現実との間を何度もさまよった。俺がこうして正気を保っていられるのは、ひとえに永琳という存在がいたからである。あいつへの復讐心が俺を悪夢からの解放へ導いたのだ。やり場のない憎しみは、それでも消えず、静かの俺の心の奥底に沈澱していった。

「今日は気分が悪いみたいですね。大丈夫ですよ、私がついていますから」

そんな俺の心の支えとなったのは、一匹の妖怪だった。彼女は俺が悪夢にうなされていると、俺の傍にずっと一緒にいてくれた。別に一人が心細かったわけではないが、彼女はどうやら植物に関する能力をもっているようで、傍にいてくれるだけで俺の精神はいくらか和らぐ。

彼女は珍しい人型の妖怪だった。緑色の髪で、赤いチェックの柄のベストとスカートを着ている。人の形をとれるということは、それなりに力をもっていると推測できた。俺を中心として円のように作られた花畑も、この妖怪が世話をしているようだ。彼女は植物の世話をすることが好きらしい。

「えへへ、今日も人間さんたちにやられちゃいました……」

だが、彼女は好戦的な性格をしていなかった。そればかりか、妖怪として致命的なほどにお人好しである。人間をおどかすどころか、薬になる薬草を提供する始末である。提供というより無理やり強奪していると言った方がいい。彼女が強気に出ないことにかこつけて、人間は執拗に薬草を寄こせと迫ってきた。渡さなければ退治すると脅してくる。お人好しの彼女は断るということを知らないのか、言われた通りにしていた。

害がないのでお目こぼしされているが、彼女も妖怪であることに違いはない。ときには人間から攻撃を受けて、傷ついて帰ってくるときもあった。

彼女は人間を襲うことはしないので、自分で妖力を調達することができない。その代わり、植物たちから微量の妖力を少しずつ分けてもらい、飢えをしのいでいる。なんとも情けない限りだ。だが、世話になっている身なので、俺もケチらず渡している。求められる

分よりも多く妖力を渡していた。

「こんなにたくさん……いつも、ありがとうございます！」

億年生きた俺からすれば、髪の毛の先ほどもない微々たる妖力だ。使いどころもないし、いっそのこと全部渡してしまっても構わないのだが、彼女が受け取ろうとしない。

俺は妖力をもった木の妖怪として彼女に認識されているようだ。妖力の大半は根っこの下にある甲羅に溜まっているので、妖力がダダ漏れというわけではない。しかし、俺の妖力によって、この辺り一帯の大地は肥沃なものへ変化しているようである。これも六島苞の妖力のなせる業か。いつも感謝されるのだが、俺は何もしていないので困る。

俺は自分から彼女に話しかけることはなかった。念話を使えば木の姿でも話はできる。だが、最初はそんな余裕はなかった。狂気に思考がもって行かれないようにするのに精いっぱいで、彼女の話に付き合っている暇はなかった。しだいに安定してくると、鬱陶しくて仕方ないと感じるようになった。いちいち木に話しかけてくる変な女である。無視し続けていた。

それでも、彼女は俺に話しかけ続けた。最低、一日に一回は声をかけてくれた。それは、悪夢に苦しむ俺を助けようという彼女のやさしさだ。俺はそのうち、彼女の話に耳を傾けるようになっていた。つまらない世間話ばかりで面白みはないが、それでも一人で考え込むよりましだ。復讐という生きる目的をなくした俺は、それ以外の何かに目を向けていなければ、すぐに狂気に取り込まれてしまう。彼女がいたからこそ、これまで俺は自分ではない“ナニカ”になることなく、今もここにいることができるのだ。

「そろそろ季節は冬ですね。見てください、今日はこんなにいっぱいドングリ拾いました！」

俺は彼女の名前を知らない。たぶん、最初に自己紹介したのだろう。そのときの記憶が俺にはない。

俺はそれからしばらくの間、名前も知らない妖怪とともにゆったりとしたあてどない時間を過ごしていた。

29話「お話しよう」

「おい、花妖怪！　言っておいた薬草はちゃんと用意したんだろうな？」

「は、はい！　今もってきます！」

ある日、人間たちが俺たちの花畑に来た。小汚い着物を来た山賊のような連中だ。俺の世話を焼いてくれている花の妖怪は、以前に頼まれていたのであろう薬草をもっていく。

「なんだこれだけか？　もっとねえのかよ！」

「も、もうありません……」

季節は冬。木々は葉を落とし、雪化粧をしている。緑など生えているはずもない。彼女がもっていた薬草は、夏のうちに乾燥させて保存していたものだった。

「ちっ！　これだけじゃ全然足りねえ。お前、妖怪なんだろ？　なんとかしろよ」

「そんなの無理です」

「使えん奴だ。あのなあ、お前みたいな弱小妖怪いつでも退治できるんだぞ？　もっと人間様に誠意をもってだな……」

「アニキ！　こっちになんか草っぽいのが生えてますぜ！」

人間の一人が花畑の雪をかき分けて、新芽を探す。春夏とにぎわいを見せたこの花畑も雪が積もり、さびしいものだった。ただ、地中には種が埋められている。春になればまた元気に育ち、美しい花を咲かせるだろう。その前に摘み取られなければの話だが。

「そ、それは薬草ではありません！　採らないでください！」

「まあ、薬草なんて誰も見分けつかないだろ。余計な草で水増しして売りつければ、なんとかなるか。よし、全部採っちまえ」

「やめてください！　ひどいことしないでください！」

「うるせえ！　お前は黙ってろ！」

人間の一味の親玉らしき者が花の妖怪を蹴りつける。彼女は身を丸めて防御するだけで、反撃しようとはしなかった。そのうちに、手下の人間たちが花畑の芽を摘み取ってしまう。新雪の白い絨毯が敷かれていた畑は、人間たちに踏み荒らされて見るも無残なものだった。

「春になったらまた来るぜ」

人間たちは好き勝手をはたらくと、足早に引き返していった。起き上がった妖怪は、体についた雪をはらいおとす。そして、自分が丹精込めて育ててきた畑の惨状を見て、目に涙を浮かべた。

「うぐっ、ひぐっ、なんでこんなことするのぉ……！」

彼女は俺のもとへとやってくる。その根元でうずくまって泣き続

けた。人間がここまで来たのは初めてだ。この場所は知られていなかったはずだが、いつの間にか彼女はあとをつけられていたのかもしれない。

腹が立った。俺は今まで一度も彼女と口を聞いたことがない。彼女は最初から俺のことを言葉が話せないものと思っているようだ。俺も最初は彼女のことを無視していたから、話しかけるタイミングを逃したということもあって、これまで何も言わなかった。だが、今日ばかりは腹にすえかねる。

『おい』

「っ！？　だ、だれ？」

『俺は木だよ。木さんとでも呼べ』

「もしかして、あなたなの！？　お話しできるのね！」

彼女はまだ泣きっ面だが、嬉しそうな笑顔になる。そんな顔してる場合じゃないだろう。

『お前は馬鹿か』

「へ？」

『なんで人間にやり返さない』

なによりもイラつくのは、こいつの態度だ。さっきまで人間連中に言うことは、特にない。人間が妖怪を敵視することは当然だからだ。あいつらがやったことは間違ってない。問題はこいつにある。

『妖怪は人間を襲うものだ。人間は妖怪を恐れるもの。それが俺たちの存在意義だろう。なのに、お前は人間を恐れている。ちゃんちゃらおかしいぜ』

「で、でも、私、みんなと仲良くしたいんです。最初から理由もなく闘おうとするなんて、おかしいと思いませんか？」

『お前の頭の方がおかしい。俺たちは理由なく人間を襲う。それが妖怪ってもんだろう。前提が間違ってるんだよ』

「確かに、そうかもしれません。でも、私、思うんです。お花を見ると幸せな気持ちになりませんか？　生きていける元気をもらえると思いませんか？　そんな気持ちにさせてくれる花たちは、すばらしいものだと思うんです。私は花畑を作って、いろんな人にこの気持ちを伝えたい。だから、人間さんとも仲良くしたいんです」

『くだらーん』

一言で切り捨てられた花の妖怪は、しゅんと背中を丸めて見るからに落ち込んだ。花なんてただの花だろう。それを見てどんな気分になるかなんて、見た本人の主観次第だ。それで、幸せになれるかなんてわからない。

「なれますよ！　幸せになれます！」

『それはお前のエゴだ。そんな押しつけがましい幸せなんて、俺だったら願い下げだね』

泣きやんでいた彼女の目に、また涙が浮かんできた。

「でも、私はっ、お花が好きなんですっ！　そんなこと言われたって、諦めきれませんよお……！」

『だったら、お前は考えを改めるべきだ。他人のためになにかしようだなんて思うな。お前は、お前のために花畑を作れ』

「え……？」

『妖怪がなんで人様に気を遣ってやらなきゃなんねえんだ？　やりたいことがあるんなら、自分のためにやれよ。そんで、それを邪魔する奴は片っ端から排除しろ』

他人のためにやることなんて、あとでいくらでも言い訳がきく。自分のためにやらないことは、いつまで経っても報われない。むしろ、彼女はその“幸せ”を押し付けるべきだ。妖怪は理不尽の象徴。それが妖怪らしいってものだ。

『だが、そのためには力がいる。力がないと何もできない。何も守れない』

「私にそんな力なんてありません……」

『だったら、一生人間にこき使われる生活を送るだけだ。花畑も諦めろ』

「……」

彼女は黙り込んでしまった。これで何かが変わればいいが。

柄にもなく説教垂れてしまった。俺が言える筋じゃないのにな。

30話「希望の光」

春になったら来ると言っていたが、約束通り、また人間がここへ来た。

最近は俺の考えを受け入れ始めたのか、花の妖怪は人間との接触を拒むようになった。まだこちらからけしかけるほどの度胸はないが、後は本人の成長次第だろう。

冬の間は草木が育たないので人間側との関わりは薄かったが、春になって啓蟄がごとく人間も活動を始めたようだ。

「木さん！　木さん！」

こいつは何を言ってるんだ？　奇声の練習か？

「木さん！　返事をしてください！」

『ああ、そうか。木さんって俺のことか』

そういえばちゃんとした名前を教えてなかった。まあ、別に困らないので今のままでいいか。俺もこの妖怪の名前知らないし。

「この森に人間たちが入ってくるのを見ました！　この花畑の方向に向かって来ています。私、どうすればいいのか……」

『普通に追い払えよ』

「それができたら苦労しません！」

元気に断言するな。彼女は人型の姿をとれるだけあって、相応の妖力をもっているはずなんだが。

ほどなくしてやって来た人間たちは団体と言っていいくらいの数がいた。警備の兵のような格好の奴らが多い。その中に、冬に一度ここへやってきた人間もいた。そいつらがこの団体の道案内をしたようだ。

「ここが噂の妖怪が棲む地か」

「へい、そうでございます」

一人だけ、馬に乗っている人間がいる。そいつだけは着物の質が他とは違って豪華だった。この中で一番偉い奴なのだろう。

ただ豪華とは言ってもちょっと色がついた程度の着物だ。花妖怪の話を聞くうちに前から気になっていたのだが、どうもこの時代の人間たちの文明レベルは低すぎる。俺が眠りにつく以前の地上の人間の文化はもっと発展していた。あれからとてつもない年月が経ったのだから、今頃はＳＦ映画のようなスーパー未来都市があふれかえっていてもおかしくない。もしかして、それこそＳＦ映画のように地球の文明は一度滅亡して、再び人間の発展が起き始めているということなのか。

「おほん！　我は藤原不比等様の使者である。お前が都で噂になっておる花の妖怪で相違ないか？」

「は、はいっ！」

「聞けばおぬし、妖怪でありながら人に施しを与えるとか。なにを企んでおるのか知らぬが、ちょうどよい。我が主が求める品、“蓬莱の玉の枝”を差し出せ。さすれば、今日のところは見逃してし

んぜよう」

「ほうらいのたまのえ？　なんですかそれ？」

「隠しだてしても無駄であるぞ！　早く渡すのだ！」

まったく滅茶苦茶なこと言いやがる。花妖怪は本当にそれが何なのかわからないと言っているのだが、偉そうな人間は一向に詳細を説明しようとしない。ただ差し出せと迫るばかりだ。

「ここには陰陽師も連れてきておる。嘘をつけばお前など一ひねりだぞ？」

「ほ、本当に知らないんですよう！」

なんか厚ぼったい服を着た連中が札をかざしながら前に出てくる。札からは嫌な気配がした。妖怪とは相いれない代物だということはすぐにわかる。妖力とは異なる、別の力が宿っている。あれはなんなのだろうか。

花妖怪もその札の力に気押されているようだ。泣きべそをかいて知らないと連呼する。その様子を見た人間は、陰陽師たちを下げさせた。

「浅ましき妖怪よ。すでに調べはついておるのだ。そこに生えている木こそ、“蓬莱の玉の枝”のなる木であろう！」

そう言って人間が俺を指差す。いや、違うし。俺はそんなわけのわからん名前はしていない。

「その木を切り倒させてもらうぞ」

「だめです！　この木さんはこの土地に恵みをもたらす大切な木なんです！」

「そのようなこと、陰陽師の占いには出ておらぬ。おとなしく譲渡せば、お前の命は助けてやってもよいのだぞ？」

花妖怪は怯えていたが、俺の幹にしがみついて一歩も引かなかった。斧を持った人間たちが近づいてきても、頑として動かない。

「ええい、そこをどけ！　これは藤原不比等様よりたまわった命であるぞ！　それに逆らうとは、なんと不届きな妖怪よ」

「どうして木さんを切り倒さなくちゃならないんですか！？　納得がいきません！？」

「我が主はかぐや姫様への求婚の約束として、“蓬莱の玉の枝”を差し上げることを誓われたのだ！　期限はもう間もない。なんとしてでも用意せねばならんのだ！」

勝手な言い分だな。しかし、かぐや姫か。月で会ったあいつの名前を思い出す。

俺は永琳のことは憎んでいるが、あいつのことは好きでも嫌いでもない。仮にあいつが生きていたとしても、ただの人間とただの妖怪というだけの関係でしかなかっただろう。

かぐや姫への求婚……たしか、高校のとき古典で竹取物語を読んだな。もうほとんど覚えていないが、そんな内容の話があったはず。五人の貴族がかぐや姫に求婚したが、その課題として伝説上の宝物を持ってこいとパシられる。火ネズミのなんとかとか、仏のあれとか、もう思い出せん。その中に“蓬莱の玉の枝”もあったはずだ。

当然、貴族たちは本物を用意できずに贋作を持って来てごまかそうとするが、すべて見抜かれてしまうという話だったと思う。
と、いうことは、今は前世の世界でいう平安時代に当たるのか？
そもそも竹取物語なんておとぎ話だ。ただ、ここは妖怪が実在する世界である。かぐや姫みたいに月からやってきた宇宙人の話が本当だったとしても、今さら驚かな……
まて、月から来た、だと？

「その木から離れるのだ！　お前も一緒に切り倒されたいか！」

「嫌です！　どっちも嫌ですう！」

「しかたない、陰陽師たちよ、この妖怪を始末……っ！？　な、なんだこの揺れは！？」

かぐや姫は竹から生まれ、絶世の美女へと成長する。様々な男性から求婚を受けるが、それをすべて断る。なぜなら、彼女は月の世界の人間であり、月へ帰らなければならないさだめにあるからだ。
これははたして偶然の一致か？　確かに俺はあのとき、輝夜が死ぬところを見た。だったら、ここで話題に上がっているかぐや姫はまったくの別人なのか？　そうだとしても、月の世界となんらかの関係をもつ人物なのかもしれない。そいつとコンタクトがとれれば、俺に植え付けられた狂気を取り除く方法がわかるかもしれない。
そして、もしもかぐや姫が輝夜本人だったとすれば、彼女は死んでおらず、億もの年月を生きたことになる。つまり、永琳も生きている可能性がある……！

「なんだ、何が起こっているのだ！」

「ひえええええっ！」

ああ！　もう考えてもわからねえ！　自分の目で確かめなければ！
俺は、全身の力を振り絞って体を起こす。巨木の根の下に封じられた甲羅から手足を伸ばし、思いっきり地面を突き飛ばした。
轟音とともに体が軽くなる。俺の甲羅から生えていた木がへし折れて倒れたのだ。土の中から這い出た俺は、甲羅に絡みつく根っこを引っこ抜く。
久しぶりの外気だ。そこには、あごが外れそうなくらい驚愕した表情の人間たちと、花の妖怪がいた。まあ、気持ちはわかるが、今はそれどころじゃない。かぐや姫のことだ。

「…アア……ウガ…ヒィ！」

くそ、喉が詰まって声が出せん。俺は息を思いっきり吸い込むと、喉の調子を整えるために叫び声をあげる。

「……ガァァァアアアアアアッ！」

痰が取れた。よし、これでたぶん普通に喋れる。
だが、人間たちに俺の叫び声は刺激が強すぎたようだ。得体のしれない妖怪の絶叫を聞いて恐れをなしたのか、我先にと蜘蛛の子を散らすように逃げ出してしまった。
残ったのは、俺と花の妖怪と、腰を抜かした偉そうな使者を名乗る人間一人である。一人いれば十分だ。俺は人間の方へ近づいて行く。

「ひいっ！？　だ、だれかおらんのか！　陰陽師はどうした！？　はやくこの妖怪を退治しろ！」

「妖怪としてここまで恐怖してもらえることは実に気分がいいの

だが、俺はただ話を聞きたいだけだ。かぐや姫はどこにいる？」

「な、なんだと！？　なぜそのようなことを聞く！？」

「お前は聞かれたことに答えりゃいいんだ。かぐや姫は、どこにいる！」

俺は人間の着物をつかんで、怒鳴りつけながら揺さぶる。人間は目を白黒させて慌てている。あんまりやると気絶しそうだな。もどかしい。

「み、都だ！」

「詳しい場所は！？」

「口では説明できん！」

めんどくせえ。俺はひょいと人間を肩の上に担ぎあげる。

「な、なにをする！」

「お前は道案内人兼人質だ。かぐや姫がいるところまで案内してもらうぞ」

「そんな！」

こいつが身分の高い奴なら人質の価値があるのだろうが、使者だからな。どれくらい牽制効果があるかわからない。まあ、そんときは力技で押し通るしかない。

「あ、あの、木さん！」

俺が人間の都まで駆け出そうとすると、後ろから声をかけられた。花の妖怪だ。俺のことを心配そうな表情で見てくる。

「あとで事情を話す。お前は人間に見つからないように隠れていろ」

俺は花妖怪を無視して、背中の人間の絶叫を森に響かせながら韋駄天のごとく走りだした。

31話「アナザー・サイド・輝夜」

私は屋敷の縁側に座り、月を見上げていた。

今はまだ新月から生まれたばかりの細い三日月だが、じきに満ちる。悠久の時間を生きる私にとって、次の満月が訪れるまでにかかる時間などあってないようなものだ。

だからこそ、時間は貴重。幾千の金にも代えられぬほどに、この一瞬には価値がある。だが、私は退屈だった。こうして月を見ながらわが身を憂うほどには。

私は月人だ。月の世界の住人。この穢れた地上に生きる者たちとは違う。生にも死にもとらわれず、ただ無為なる存在となることを望むやんごとなき月人のあり方は理解できるが、それは私にとってあまりにも味気ない。だから、私は地上へ来ることを望んだ。煩悩への執着に溺れ、穢れに満ちたこの世界は実に面白い。

永琳に作らせた“蓬莱の薬”によって、私は不老不死の体を得た。月人は不老の肉体を持つが、不死ではない。不死となることを求めるは、すなわち生への執着、すなわち穢れ。それは月人の思想に反する。それがゆえに、私はあえて蓬莱の薬をあおった。不死となることなどどうでもよいことだが、私が望んだのはこの身に穢れを宿すことだ。

穢れたこの身に与えられた罰こそ、地上への追放である。要するに、私は地上へ行きたいがために禁忌を犯した。後悔などしていない。おじいさんとおばあさんに育てられたこと、言い寄ってくる男たちをあしらうこと。地上での体験は、どれも私にとって新鮮で好奇心を満たしてくれることばかりだ。

だが、楽しい時間はあっという間に過ぎていく。次の満月がくれば、私の地上への追放期間は終わる。それを思えば、ため息の数も多くなるというものだ。最近は月を見ながら物憂げな顔ばかりして

いる。おじいさんとおばあさんにも心配をかけているようで忍びない。だが、センチメンタルなお年頃の娘だと思って諦めてほしい。

「はぁ……」

家庭教師の永琳は私のために蓬莱の薬を作ってくれた。つまり、私が地上に残りたがっていることを知っていることになる。永琳はなぜか私に甘いので、私が地上にとどまりたいと言えば手を貸してくれるだろう。切れ者の彼女のことだ。すでにその準備を進めているだろう。

しかしそうだとしても、もうこの場所には残れない。月の監視の目を避けながらの逃亡生活を余儀なくされる。退屈していた私に一時のエンターテイメントを提供してくれたこの場所には、それなりに思い入れもある。なんとも、ままならないものだ。

『くせものじゃー！　ものどもであえー！』

『妖怪がでたぞ！　こっちへ向かって来ている！』

『悪霊退散♪　陰陽師マダー？』

なにやら、今夜は騒がしい夜だ。静かに月を見る夜もいいが、都の穢れにまみれた喧騒に耳を傾けながら見る月も、また一興……

ドドドドドドド……ドカーン！

そして、唐突に屋敷の塀を突き破って現れた得体のしれない妖怪と出会うのも、一興というものだろう。

その妖怪は人型だった。全身土まみれでよくわからないが、おそらく少女の形をとっていると思われる。鬼のような形相を浮かべ、

背中に大きな岩のような物を背負い、さらに身なりからして貴人と思わしき人間を抱えている。人間の方はぐったりしているが死んではいないようだ。妖怪は体中に陰陽道の力が込められたお札が貼りつき、紫電を発している。これだけ派手にやられておきながら、倒れる様子など毛ほども感じない剛毅さ。かなりの力を持った妖怪なのだろう。

「おう、輝夜。久しぶりだな。やっぱり、俺の考えは間違ってなかったぜ」

「？」

妖怪から敵意は感じない。禍々しい気を放っているが、それが彼女の自然体らしく、こちらに殺気を向けるようなことはなかった。近頃は私の噂を聞きつけ、さらいにくる妖怪も多かったのだが、彼女はその類ではないようだ。

それに、なんだか私のことを知っているような様子である。こんな妖怪と以前にどこかであっただろうか。いや、記憶にない。

「俺もこんなところに長居はしたくねえ。お前に聞きたいことがあるんだよ」

「私に答えられることなら」

「永琳は生きているのか」

……驚いた。まさか、ここで永琳の名前が出てくることなど、誰が予想できよう。

月となんらかの関係がある妖怪なのか。それこそありえない。

「あなたは何者？　どこで永琳の名前を聞いたの？」

「一億年前にお前の口から聞いたのさ」

意味がわからない。しかし、嘘をついている様子もない。

一億年前になど、私は生まれてもいないのだ。そのころと言えば、永琳ならぎりぎり生きていたかもしれない。ということは、この妖怪は永琳と同い年ということになる。頭が痛くなってきた。到底、信じられる話ではない。

「お前のその反応を見て、確信したぜ。永琳はまだ生きているんだな」

妖怪は笑った。だが、その笑顔は邪悪だった。何かにとりつかれたような狂気の笑み。鳥肌がたった。これは稀にみる洒落にならない相手だ。今の私は服役中のため、能力が封印されているので、この妖怪とまともに戦えそうにない。まあ、不老不死なので死ぬことはないのだが。

「……仮にそうだとして、あなたはそれを知ってどうする気なの？」

「お前とは色々話がしたかったんだが、俺にはあんまり時間がない」

屋敷のまわりに人が集まり始めた。それは、これだけの騒ぎを起こせば当然だろう。妖怪退治を生業とする陰陽師が、都にはぞろぞろいる。塀に開いた穴から入って来た陰陽師が、印を結んで結界を作り始めた。

この妖怪もさすがにここにとどまり続ければ身が持たないだろう。

一方的にやってきて、一方的に質問し、一方的に帰っていこうとしている。まったくもって理解ができない。
が、面白い。

「待ちなさい」

私が一声かけると、妖怪は律儀に立ち止まってこちらに振り返る。もうほとんど結界は完成しているというのに、まるで堪えていないようだ。もっと上位の陰陽師でないと対抗できないだろう。
これほどの妖怪が今ここに現れたということに、私は少なからず喜びを感じている。私の退屈を紛らわしてくれたお礼だ。彼女には、私のさらなる余興になってもらう。

「次の満月の夜、ここに来なさい。あなたが探している人と会えるわ」

妖怪はニヤリと笑った。その口元は今夜の月のような三日月の形。ただし、赤い。
底冷えするような妖気をばらまいて、妖怪は風のように去って行った。結界はあっさり破られている。抱えていた貴人を残して、影も形もなくなっていた。

「さて、これは面白くなってきたわ。ふふ、あの永琳の驚く顔が見られるかもしれないわね」

32話「瞬間享楽」

俺は来た道を引き返し、森の木々に身を隠しながら走る。ここまで追いかけてきた妖怪退治人も、森の中までは追ってこれなかったようだ。

空気がすがすがしい。晴々とした思いだ。輝夜が生きていた。そして、永琳が生きていたのだ。俺の不安定だった憎悪が再び燃え盛る。これで狂気を抑え込むことができる。憎悪という感情で狂気を塗りつぶせば、一応の正気を維持できる。それは、自分の中に封じこんだバケモノを鎖でつないだ紙一重の状態。狂気という犬を憎悪の鎖につなぐのだ。

表面上は俺の人格が、なんとか性格を形成しているが、一歩内面に踏み込めばズタボロの精神が顔を出す。傷は膿み、腐り、いつまで経っても治らない。俺の頭の中の犬が暴れるからだ。だが、こいつを保健所にブチ込む算段がようやくついた。永琳が生きていた。この狂気もようやく終わる。

「はやくしてくれええ！　えーりん！　えーりん！」

俺は輝夜に永琳の生死について聞くつもりだった。俺の思った通りだ。月に行った人間のテクノロジーは常軌を逸していた。たぶん、寿命をながーく延ばす技術によって、永琳はまだ生きているのだ。輝夜は、そうだな……死体を冷凍保存して、あとはオーバーテクノロジーで生き返らせたとか、そんなところだろう。いや、輝夜のことなんてどうでもいい。とにかくえーりん！　さらに輝夜は親切にも永琳が次の満月の夜に地上にやってくることを教えてくれたのだ。

俺は走る。頭頂部にくっついたウサギの耳を両手で引っ張りながら走る。次の満月まであと何日だ。もう一分も待てない。永琳、早

く来てくれ。よぼよぼのおばあちゃんになっていてもいい。お前が生きていてくれれば俺は救われるんだ。

本当は殺してやりたい。八つ裂きにしてハラワタを引きずり出して、痛みに苦しむ様を見ながら少しずつ腸を食うんだ。名付けて内臓ポッキーゲーム。大腸と小腸は長いからならな。ちょっと時間がかかるかもしれないが、その待ち時間さえ愛おしい。そして、ついに十二指腸にたどりつき、俺は永琳の血まみれのおなかに顔をうずめながら濃厚なキスをするのだ！

「だめだあああ！　それじゃ、えーりん死んじゃうよおおおお!?」

永琳を殺したら俺の狂気は治らない。他の月人間にも治せるかもしれないが、もし永琳にしか治せなかったらどうするんだ！　だいたい、このウサ耳をはずす手術を永琳以外のだれに任せられる？　見ず知らずの他人に「ちょっとウサ耳はずしてください」なんて頼めるか？　手術中に麻酔をかけられている間に変なことされるに決まってる。

「え、でもさ、永琳だって俺に変なことするかもしれないよ」

しえねえよ！　永琳はそんなことしねえ！　俺は永琳のことを信じてんだよ！

「絶対するって。俺が手術台に寝そべってる間に俺のあたまんなかもっとグチャグチャにされるぜ」

だめだ。不安になってきた。

このウサ耳、自分ではずせないかな。案外、ひっぱったらスポンって取れたりするんじゃね？　やってみよう。

『コノ行動ハ許可サレテイマセン』

なんか頭の中に声が響いた。この行動は許可されていません、だと？　腕に力が入らず、それ以上ウサ耳を引っ張ることができない。つまり、俺は自分でウサ耳をはずすような行動をとることができない。

「なんでだあああああああ！？　ちくしょおおおお！　えーりんのやろう絶対許さん！　絶対許さん！　ゆるさなえ♪」

どうすればいいんだ。どんどん不安になってきた。

あの輝夜って俺が知っている輝夜だったのだろうか。もしかしたら、そっくりさんで全くの別人だったらどうする。そうだ、クローン人間とか。あれ、クローン輝夜だったらどうよ。ヤバイ、この仮説はテクノロジー的に達成難易度が低い。月の世界には輝夜ＭＫ？とかＭＫ？とかいっぱいいるんじゃないか？　だったら、永琳ＭＫ？とか永琳ＭＫ？もいるはずだ。

「うへへ、えーりんがいっぱい、殺しほうだいだー！　って、そんなこと言ってる場合違う！」

ＧＥＲＯＧＥＲＯＧＥＲＯ！

あいつらの声が聞こえてきた。まずいな。ちょっと興奮しすぎた。落ちつかないと、狂気が暴れ出してしまう。なんだこの厨二設定。

とにかく、まずは永琳本人に会ってみないと。話はそこからだ。俺なら本物の永琳を見分けられる。そして、永琳に交渉して俺のウサ耳をとってもらう。

ソシテ、コトワラレタラ、コロソウ。

＊　＊　＊

追手を振りきったので、俺はゆっくりと森を歩く。途中、見つけた小川で体を洗い、土を落とした。春の川の水は冷たい。甲羅は断熱効果があるのか、中身はあったかいのだが、むき出しの手足が寒い。一応、服は着ていた。モニカに作ってもらったゴワゴワのベストと短パンだ。どちらも袖と裾がないので、やっぱり寒い。それにしても、この服、丈夫だな。あれから一億年も経ったのに。もはや俺の体の一部と化しているようだ。

とりあえず、俺は元いた花畑にもどって来た。そこに花の妖怪もいた。

「あっ！　木さん！」

俺の背中から生えていた木が倒れている。その上に腰をおろしていた花妖怪がこちらに駆け寄って来た。

さて、こいつには何と説明しようか。念話を使うようになってからは、ちょくちょく話をしていたのだが、まだ俺の身の上話については何も教えていない。

「大丈夫でしたか？　怪我はありませんか？」

「大丈夫だ、問題ない」

馬鹿正直に本当のことを話しても、信じてもらえないだろう。こちらもあのときのことは口にしたくない。適当にごまかすか。だが、その前に言っておかないといけないことがある。

「あと、俺は木さんではない」

「え？　だって自分のこと木さんって呼べって……」

「あれは嘘だ」

「えええええ！？」

「俺の名前は葉裏。カメの妖怪だ」

花の妖怪は、俺のことを本当に木さんだと思っていたようだ。木って、お前、普通おかしいと思わないか。かなり純粋な奴みたいだ。

「お前の名前も教えてくれないか？」

「あ、はいっ！　私は風見幽香です。花の妖怪です！」

こうして、俺たちは出会って数十年目にして、ようやくお互いの自己紹介を済ませたのであった。

33話「ゆうかりんといっしょ」

「そういうわけで、俺の体は悪のマッドサイエンティスト、ドクター・エーリンの手によって改造されてしまった。俺は復讐を胸に誓い、復活の時を待って深い眠りについた。しかし、俺が目覚めた時、すでに途方もない年月が経過し、エーリンの消息もわからなくなった。俺は絶望し、この地に根を下ろし、ただ死を待つのみの運命をたどるはずだった……しかーし！　そこに現れた偉大なる花の精霊ゆうかりんの力によって、俺は再び目覚めることができたのだった」

「そ、そうだったんですか！」

「そして、物語は急展開を迎える。ドクター・エーリンの行方を知る唯一の人物、プリンセス・カグヤ。彼女がこの時代にいることがわかった。彼女の話によれば、次の満月の夜、エーリンは人間の都に現れるという。はたして、俺は復讐をなしとげることができるのか、エーリンの真の目的とは一体何なのか、カグヤの過去に秘められた衝撃の真実……次回、最終回『放て！　闇を切り裂く拳！　死闘の終焉を越えて』。こうご期待！」

「おおお！　続きが気になります！」

幽香は俺の言うことをあっさり信じた。これなら月云々のことを正直に話しても信じてもらえたかもしれん。一応、俺の過去に関する話であることに違いはないので、他言無用だと言っておいた。幽香は誰にも言わないと約束してくれた。

「しかし、ゆうかりんのおかげで俺はこうして正気でいられる。本当に感謝してるんだ。ありがとな」

「い、いえ！　私の力は『花を操る程度の能力』です。こんなことでしかお役に立てませんが……」

幽香がこの森で俺を見つけたとき、俺は全身から呪いを噴き出し、枯れる寸前まで病気が進行していたという。彼女の力はあくまで『花を操る程度の能力』。樹木である俺にも多少の応用は聞くとは言っても、専門外であることにはかわりない。だというのに、ここに住みこんで俺のために献身的な看護をしてくれたのだ。頭が下がる思いである。

「でも、病気か……呪いが噴き出してたんだよな？」

それについては心当たりがない。俺の負の感情が呪いとして現実化したということなのか？

「今も、うっすらとですが、葉裏さんの体から呪いの気を感じます」

「え？　そうなの？」

そういえば、なんだか目が覚めてから頭痛がするし、喉が痛いし、鼻が詰まるし、咳が出るし、風邪気味だなあと思っていたのだ。俺は病に冒されているのか？

自分の健康不調の原因がなんなのか、調べてみる。意識を内面に向けて、病巣を探る。妖怪はよっぽどのことがない限り病気になどかからないものだ。かかるとすれば、妖怪の命の源たる妖力に原因があるはず。自身の妖力を探れば何かわかると思う。

そして、その考えは正しかった。俺の妖力の中に異質なモノが混ざっている。ヘドロのように粘着質の沈殿物が、俺の妖力のプールの底にへばりついていた。これはなんだ。尋常でない呪いの瘴気を放っている。これだけ濃い呪いを体の中から食らっていれば、そりゃ体調も悪くなるわけだ。だが、この瘴気、なんだか見覚えがあるぞ。

「そうか！　これはデスフロッグの……！」

月でデスフロッグの大群が人間の要塞にしかけた戦い。そこで戦死したカエルたちの屍からあふれ出した瘴気と同じものだ。しかも、あのとき見たものより断然濃度が高い。今の俺の状態は、人間にしてみれば液状の硫化水素を丸飲みしたようなものだ。よく風邪の諸症状程度で済んでいるな。

おそらく、この瘴気は肉体よりも精神に影響する性質がある。狂気に長年耐え続けた俺だからこそ、平気でいられるのだろう。つまり、俺はウサ耳の怪電波とデスフロッグの呪い瘴気の二重苦を味わされていることになる。なんというバッドステータス地獄。

さらに原因を探ると、この瘴気の出どころは俺の甲羅の中にあった。要塞の内部で拾ったデスフロッグの卵である。こいつが腐ってドロドロに溶けだし、瘴気を発していた。激辛蜜柑も腐ってカビが生えたし、同じナマモノの卵もこれだけ放置すれば腐りもするだろう。しかも、最悪なことに甲羅の優秀な密閉性によって、卵に蓄えられていた妖力を逃さず閉じ込めていたのだ。そのせいで、半ば癒着する形で腐った卵が俺の体と融合してしまっていた。

「あー、なんかさあ、妖怪の卵を拾い食いしたんだけど、それが傷んでたみたいで、中っちゃったみたいなんだよね」

「ええ!?　それで呪われたんですか!?」

幽香によると、自分と比べて妖力が高すぎる相手を食った場合、呪われることがあるらしい。妖怪各々が個人でもつ妖力には、千差万別の性質が宿る。俺の持つ妖力と幽香の持つ妖力も一緒のようで違いがあるのだ。妖力は妖怪にとってのエネルギーなわけだが、自分の持つ性質と異なる妖力を体に取り込んでも、それを１００％自分のものにできるわけではない。それをいったん消化して、自分の性質と馴染ませた分だけ取り込むことができる。その消化によるロスは大きい。食事によって得られる妖力はそれほど高いわけではない。

そうして、消化しきれなかった分の妖力はもったいないが、体外に排出することになる。自分と異なる性質の妖力は異質なモノであり、それをいつまでも体内にとどめておくと害をもたらす。それゆえに、自分よりも巨大な妖力を持つ相手を食うようなとき（普通、そんなことは滅多にないが）、取り込んだ妖力の消化処理が間に合わず、異質な妖力に体を冒されて中毒を起こすのだという。それがここでいう呪いだ。

ちなみに、食われる側が自分から妖力を譲り渡したときは、この拒絶反応はあらわれないようだ。そんなことを進んでする妖怪なんているとは思えないが。

以上、ゆうかりんの妖怪講座でした。へぇー。

「ということは、だ」

それを踏まえて考察するに、次のような仮説を立てた。

俺が最初に他の妖怪から妖力を得た機会は、六島苞との出会いだ。最終的に、あいつは俺の体を乗っ取ろうとして、自分の妖力をすべてそこに集めたが、結局そのもくろみは失敗する。さらに長年肉体同士を融合し続けた結果、俺と六島苞の妖力は同質性を持ち、拒絶反応を起こさなくなっていたのではないだろうか。そういうわけで、

奇跡的に妖力の譲渡が問題なく成立した。これは極めて稀なケースだろう。

次に、デスフロッグの卵に含まれていた妖力は膨大だった。しかし、俺がもともと持っていた妖力に比べれば小さい。よって、普通に拾ったときに食べていたなら、こんな中毒を起こす結果になはならなかったはずだ。そのときは、俺が消化しきれなかった分の妖力は体の外に捨てていただろう。

だが、俺はあのとき甲羅の中に卵を入れ、それを放置した。この点が曲者だ。俺の甲羅の中の空間は、一応、俺の体内と定義づけられるようである。その劣悪な環境（？）の中で、卵は死に、腐敗した。だが、その腐った妖力は甲羅の密閉性により外に漏れ出さず、ずっと甲羅の中にとどまった。その結果、卵だったモノが甲羅の中で俺の体と癒着。腐敗した妖力を消化処理もせず、丸ごと腹の中にため込んだ状態になってしまった。

生まれてもいない卵に意思があったのか、定かではないが、こいつは俺のことを拒絶している。徹底的に俺の妖力と馴染もうとしない。にもかかわらず、俺と無理やり合体してしまったために、俺から離れることができないでいる。A型の血液の人間に、B型の血液を輸血してしまったようなものだ。

俺は立ち上がり、息を深く吸い込む。

「すううーー……げっほん、げっほん、げっほんほん！」

思いっきり咳をしてみた。喉の奥から黒い霧状の瘴気があふれ出す。瘴気はいくらでも俺の体から湧き出してくるが、その瘴気を生み出している肝心の腐った妖力は、俺の中にへばりついて出てこようとしない。これを取り出すことは今の俺にはできそうにない。血の中に混じった毒が体を巡っているようなものである。どうやってそれを抽出するというのだ。妖力の人工透析のしかたなんて俺は知らない。

さらに、腐った妖力は億年もの間、俺と一緒に狂気の電波を浴び続けた影響か、そこから発する瘴気はすさまじい“ニオイ”をさせていた。歯が溶けそうなくらい甘ったるい匂いだ。意識して嗅ごうとするだけで、頭がクラクラして何も考えられなくなる。もともとデスフロッグが持っていた妖力の性質である“呪毒”に狂気が組み合わさったもの、名づけて“狂呪毒”！　試しに、幽香に息を吹きかけてみた。

「ふうーっ！」

「……ふにゃあ～！」

一発で目を回して倒れ込んだ。

これは俺自身、気分が悪くなるので使いたくない技だが、何かの役に立ちそうだ。ううえっ、胸やけがひどい。

34話「自傷行為」

「葉裏さんのそのウサギさんの耳って、かわいいですね」

「ああん!?」

「ひうっ！　ご、ごめんなさい！」

いかん、つい殺気を放ってしまった。このウサ耳のせいでこっちは毎秒頭の狂う思いをしているのだ。褒められてもうれしくない。

あれから俺たちは森の中をうろうろしながら気ままに生活を送っていた。元いた花畑は陰陽師が来て結界を張ってしまったのだ。別に簡単にぶっ壊せるのだが、この大事な時期に人との間に問題を起こしたくない。わざわざ自分から厄介事の種をまく必要はないだろう。

幽香は自分の花畑がめちゃくちゃにされてしまったわけだが、意外と気にしていないようだ。また別の場所に作るつもりだと言う。俺の背中の木が、この地に恵みを与えていたようで、その木がなくなった結果、ここは元の痩せた土地にもどりそうだと言っていた。しばらくは、俺と一緒にここにとどまるが、いつかここから離れて畑に向いた土地を探すそうだ。ふらふらと森の中を歩き回る俺の後ろを、いつも雛鳥のようについてくる。

「はっ！　そうだ！　ゆうかりん、俺のウサ耳をつかんでくれ！」

そういえば、まだ一つ可能性を残していた。俺はウサ耳インターフェースから直接脳に下されるプログラムによって、自分でこのウサ耳をはずすような行動を取ることができない。

しかし、他人である幽香になら俺のにっくきウサ耳をぶち抜いてくれるかもしれん！

「えっと、これでいいですか？」

「もっと強くにぎって！」

俺はあれから毎晩、悪夢にうなされながら眠っている。いつのまにか、気がつけばウサ耳を触るくせがついていた。いつもいつもウサ耳を揉みまくっているうちに、耳はよれよれになり、もはやウサ耳なのかなんなのかわからない形になっている。

さらに最悪なことに、俺のケツにはウサギの尻尾までついていた。これは、短パンの中に隠している。これもインターフェースの一部なのだろうか。

「いいか、いちにのさんで、思いっきり引っ張ってくれ！」

「ええ！？　そ、そんなことしたら痛くないですか？」

「痛くてもいいんだ！　手加減なんかせずに引っこ抜け！」

「ほ、ほんとにいいんですね？」

「ああ、やってくれ。……中途半端に力を入れるのだけはやめてくれよ。ひとおもいにブチッとやれよ！？」

「わかりましたっ！」

俺は腰をかがめ頭を突きだし、幽香は俺の耳を両手でつかんでいる。緊張の一瞬。なんか、失敗する雰囲気がバリバリ出てるが、俺

はやる。やってやんよ！

「いち、にの……さん！」

「えいっ！」

その瞬間、俺の脳内がショートする。原色ギトギトの極彩色が視界を埋め尽くし、世界がぐにゃぐにゃと秩序を失くした。

『へでゅあべおＱＶＢＲＹくぉＷＸ２べＢｂあＲばせおしずびいいいいいいいい！！』

これは、シャンパンボトルのコルクだ。ウサ耳はコルク栓。抜けば、頭蓋から脳（サケ）がしぶきを上げて噴（ボトル）き出してしまう。受け止めるグラスなんてない。俺の能天気な自我が、外気に触れて劣化してしまう。

【ＤＡいじょブデＳＵＫあ！？　シッカＲＩＳＩてくダさい！】

俺は頭を押さえてうずくまる。頭頂部にはウサ耳がある。抜けなかったようだ。抜けていたら、俺は死んでいただろう。やっぱり、力技でこいつをどうにかするのは無理なようだ。

＊　＊　＊

月人は強い。

その科学技術は俺の前世とは比べものにならないほど進んでいる。一億年前で、それだけの技術をもっていたのだ。月人も文明が地上と異なる発展を遂げたのなら、今頃月にどんな世界が広がっているのか想像もつかない。

俺はたまに人間のもとへ近づいた。情報収集するためだ。都に近づくと陰陽師に妖力を察知されるので、姿を隠しながら森に面した道の近くに潜み、通りかかる人間の話を盗み聞く。それによると、かぐや姫は次の満月の夜に、月からの迎えが来て、月の世界へ帰ってしまうのだという。それを知った帝が、かぐや姫の月への帰還を阻止すべく、兵を集めているようだ。

このあたりは、俺の知っている昔話と内容が一致する。次の満月、それは永琳が地上へ来る日だ。つまり、永琳は輝夜を月へ連れ戻すためにここへ来るということなのだろう。竹取物語では、人間は月人の力の前に無力化される。それを可能にする技術があるのだ。

その月人に、俺は一匹で立ち向かわなければならない。普通に考えれば、無謀である。だが、やらなければならない。なんとしてでも永琳との接触を果たさなければならないのだ。

そのためには、力が要る。月人に対抗するだけの戦闘力が要る。

「ふぅ、せいっ！」

俺は妖力弾の練習をした。妖力の量は無尽蔵だ。一日中、全開でぶっ放しても妖力切れは起きないだろう。

だが、これだけではだめだ。威力が弱すぎる。何発撃てようが、一発にこめられる威力には限界がある。これでは月人のシールドに阻まれてしまうだろう。

妖力弾はあくまで補助的に使うことになる。やはり、肉弾戦を主体に考えるべきだ。妖力の増加に伴って、筋力も増した。素手で岩を砕くことなど造作もない。当たればいかに月人といえども、致命傷は避けられない。当たれば、の話だが。

そこで、俺が考えついたのは、かつてロバートに教わった月のウサギの武術『玉兎三技』を使えないかという案だった。

「……」

まずは精神を集中し、妖力の動きに意識を向ける。

“フォースの循環”が可能となれば、爆発的な効率をもったエネルギーの運用ができる。三技のすべてをこの短期間で習得することはできないだろうが、その運用法だけでも使えるようになれば多少は使えるようになるはずだ。

フォースとは、すなわち妖力。それを体内で回転させる。かつての俺は、ロバートに教えられてもこの技を身につけることができなかった。体の中の妖力は緩やかに対流するばかりで、エネルギーからエネルギーを生み出すことなど不可能だと思っていた。

だが、その考えは誤りだ。“フォースの循環”とは、言いかえれば、妖力の活性化現象。つまり、妖力は通常ではそのエネルギーを完全に使用可能な状態になっていないのだ。いや、妖怪はあえて活性化を無意識のうちに封じ込めている。そうしなければ、開放された力に精神を壊されてしまうからだ。

「ぐ、おおお……！」

月のウサギは活性化に伴う精神への影響に耐性があった。だから、少ない妖力でもそれを何倍にも増幅させ、使用することができる。

俺が妖力を活性化できない理由は簡単だ。ビビっている。妖力のプールで水遊びする程度の度胸しかないから使えない。本気で活性化しようと望むなら、そのストッパーをはずさなければいけない。水槽は肉体。水は妖力。回転の力は妖力を回す。水槽の外にこぼれるくらいの勢いで臓物をかき回さなければならない。そうでなければ、体外に自分の妖力を実体化させ、自在に形成させることなどできるはずがない。それはつまり、自分という殻を自ら破壊する行為だ。精神の崩壊と循環のエネルギーとの狭間で、己を律することができる者のみが、この力を得ることができる。

妖力弾はただの妖力の排出行為でしかない。おしっこをひっかけ

るのと一緒だ。膀胱に尿が溜まっていれば、猿でもできる。それと異なり、妖力の活性化は内面から精神を破壊する。その結果、自己意識の破壊によって、自分という存在の定義があいまいになる。そこをうまく利用し、自己の定義を拡大解釈するのだ。それによって、肉体という縛りを超えて、体外に自己の妖力の影響を及ぼすことができる。妖力で肉体が形成されている部分が大きい妖怪という種族だからこそできる、規格外の荒技だ。

こうして改めて原理を考えてみると、どうあがいてもできそうにない。だが、俺は幸か不幸か、いや、不幸にも妖力過活性化電磁波を思い出すのも億劫になるほどの長期にわたって浴び続けた。そのせいで、活性化が精神に及ぼす影響を、嫌というほど味わっている。

あとは、自己意識の破壊に慣れ、存在の拡大解釈ができるようになれば、活性化の力を自分のものにすることができる。

俺はそれから毎日、狂気と闘いながら瞑想を繰り返した。

３４話「自傷行為」（後書き）

僂月抄のｗｉｋｉを今さら見て愕然とする作者。

月夜見に関しましては、後付けですが設定を作りました。機会があるときに記載します。

35話「粗品ですが」

「うおえええええっ！」

「葉裏さんっ！」

吐き気を催した俺のもとへ幽香が走ってくる。俺の額に流れる汗を手ぬぐいで拭いてくれた。幽香は俺が何の特訓をして自分を追い詰めているのかわかっていないが、いつも俺の傍にいて見守っていてくれた。

自分という存在を壊さなければ力を扱えない。しかし、完全に破壊すれば俺という存在が消滅する。適度にその中間を保たなければならない。言うなれば、精神をスカスカのスポンジ状態にしなければならないのだ。そのスポンジに水、つまり妖力を吸わせた状態に保つ。そうすれば、水をスポンジの外ににじみ出させることができる。だが、当然スポンジなので、ちょっとした衝撃で簡単に凹み、水をどばどば吐き出してしまう。自我が垂れ流される。その工程は筆舌に尽くしがたい。

さらに面倒なことに、俺が妖力を活性化させると、例の腐れ卵が悲鳴をあげるのだ。他人様の妖力なので、そっちは俺の管轄外である。だが、俺と融合しているので俺自身でもある。アパートの隣人が深夜に轟音をまき散らしている状態といえようか。

腐れ卵は液状化して、妖力そのものに近い形になっているようだ。普段は俺の妖力と決して混ざることなく、プールの底に沈殿しているのだが、循環回転させることでその性質が表面化する。つまり、大量の瘴気をまき散らす。活性化中の俺は体中から黒いオーラを醸し出すようになった。すげえ、悪役設定。

そのせいで俺は活性化を行うと、頭を狂気で冒されるだけでなく、

全身を駆け巡る瘴気の毒のせいで強烈な体調不良を起こすようになってしまった。幽香はこんな俺でも嫌いにならずに付き添ってくれる。ええ子や。

満月の夜まであと少ししか日は残っていない。俺はほとんどの時間を瞑想に費やしたが、三技を使えるようになるには程遠かった。やはり、付け焼刃ではダメか。

「ちくしょう、これだけやってもダメなのか。自己破壊はぎりぎりできるようになったけど、拡大解釈ができない。その自己破壊でさえも、気を抜くとすぐに状態を維持できなくなるし……」

「えっと、葉裏さんが何をしているのかさっぱりわかりませんけど、気を落とさないでください。なんか、そのオーラだけでも私、近づくだけで気絶しそうなくらいですよ。葉裏さんは十分強いです」

オーラというのは、瘴気のことか。なるほど、これは“呪毒”だ。それ単体でも周囲に悪影響を及ぼす。その効果の対象は妖怪や人間にとどまらないだろう。息抜きに、ちょっと技を開発してみるか。

俺は軽く妖力を活性化させ、瘴気を発生させる。セットで内臓までぶちまけそうな吐き気もついてくる。それは気力で飲み込むとして、俺は特に拳に集まる妖力を活性化させた。拳から黒い瘴気が噴き出す。えっと、技名は何にしよう。よし、これだ。

「はあああああ！　暗黒殺法・呪闇拳！」

叫ぶと同時に、近くの木を殴りつけた。その衝撃で木はへし折れ、そして俺の拳から感染した呪毒が全体に広がっていく。若々しい青い葉を茂らせていた木は見る見るうちに枯れていき、砕け散った。

おいおい。

これはただのパンチであって、玉兎三技は使っていない。俺が受

けた呪いの副作用だ。いまいち、自分では納得いかないが、今はこの技で我慢しよう。殴るだけですでに人間にとっては致命傷なので、そこにさらに呪毒を投与するなんて嫌がらせをすることに意味はない。だが、月人に俺の純粋な筋力による攻撃が通用するかわからない今、少しでも手数は増やしておきたい。月人の妖術に対抗する技術は高いので、おそらく防がれてしまうだろうが。

さっき殴りつけた木は極端に呪毒の影響を受けたが、普通の妖怪なら自身が持つ妖力である程度抵抗できるので、ここまでの効果は望めないと思う。人間には効くだろうが、霊力という力をもった陰陽師なら妖怪と同じ理由で抵抗されるだろうな。そういえば、つい手ごろだったので木に攻撃を当ててしまった。幽香は植物を大切にするので、怒っているかもしれない。

「ゆうかりん、ごめ……」

幽香は俺から１０メートルくらい離れた木の陰に隠れて、涙目で震えていた。マジでごめん。

＊　＊　＊

俺は甲羅の中の物を整理した。

月で要塞に入ったとき、いろんな物を突っ込んでおいたことを忘れていたのだ。ぱくった物の中には、月人の兵器もあった。もしかしたら、大幅戦力増強もありえる。なんでこんな大事なことを忘れていたんだ。

とりあえず、甲羅の中に入っている物を全部引っ張り出す。大量のガラクタがどんどん出てきた。カチカチになった激辛蜜柑も出た。お前はもういいよ！　確か前に全部捨てたと思ってたのに、なんでまだ入ってんだよ！

「何をやってるんですか？」

「んー？　ちょっと持ち物の整理をな。くそ、どれもこれも使えねえもんばっかしだ」

兵器はあった。ハイテクなレーザー銃だ。だが、どれも燃料切れ。一億年もメンテナンスしてないので、錆ついて鉄クズ同然だった。比較的状態がいい物を一つだけ取っておき、後は穴を掘って埋めた。月人に突きつければ、コケ脅しには使えるかもしれない。

「ん？　なんだこれ？」

かさばる兵器類はすべて捨てたが、他にも何か入っているみたいだ。取り出してみる。

それは、一本の短剣だった。刀身を鞘から抜き放つ。そこに錆はなかった。どこまでも黒い刃が冷ややかに光っている。これをくれたジョージの顔が頭に浮かんだ。ジョージは俺と同じく、頭に偽ウサ耳をブチ込まれ、人形となった。人間のやり方は気にくわないが、方法としては冴えた手だ。楽に月面での労働力を手に入れることができるのだから。俺が人間の立場だったら、迷うことなくその手を選ぶだろう。ただ、ほんの少しの感傷は俺の心にもあった。

そして、もう一つ。くすんで茶色くなったベレー帽が出てきた。ロバートもいい奴だった。モニカもだ。ふたりはあの後、どうなったのだろうか。永琳に改造されてしまったかもしれない。だが、今となってはすべてが過去のことだ。遠い記憶の奥に隠れてその片鱗をのぞかせるにすぎない思い出。

俺は短剣を腰に差し、帽子をかぶった。帽子の中にウサ耳を隠す。ロバートはこの帽子を、戦いで耳を失くした戦士に贈る名誉の証だと言った。だとしたら、滑稽なものだ。俺はくっつけられた耳を隠すためにこの帽子をかぶるのだから。自嘲の笑いがこぼれた。

「葉裏さんの甲羅って、いろんなものが入ってるんですね。魔法みたいです」

「そうか？　ゆうかりんにもなんかやろうか？」

幽香にはお世話になったからな。月の珍しいお土産でもプレゼントしてやろう。お、なんかちょうどよさそうなものが……

『月人お酒の友シリーズ？　ヒマワリの種』

「……」

なんで持ってきたし。ご丁寧に真空パックされており、未開封の袋を外から見る限りでは、食べられそうな気がしないでもない。だが、無論、食うつもりはない。

「ゆうかりん、これあげる」

「え！？　いいんですか！？　ありがとうございます！」

幽香にあげた。花の種だと思っているようだ。まあ、そうなんだけど、たぶん炒ってあるよね。でも、幽香なら能力でどうにかできるかも。

「ヒマワリっていうんですか？　どんな花なんでしょう？」

「黄色くて、太陽みたいな花だよ」

「わあ、すごいです！　絶対、この子たちを育ててみせますね」

「う、うん。頑張って」

なぜか節分の鬼の話を思い出してしまった。

36話「ガール・ミーツ・ガール」

満月の夜が来た。俺は一昨日から一睡もできなかった。だが、絶好調だ。空に浮かぶ丸い月。その光を見るだけで、俺の心は高鳴った。嬉しくて、嬉しくて、思わずジャンプしたくなる。

「ゆうかりん、行って来る。俺は行くぞ！　永琳に会うんだ！」

「は、はい……気をつけてくださいね……」

幽香に見送られて俺は森を飛び出した。蔦のサンダルを踏みしめて、夜の森を駆け抜ける。甲羅を装着し、腰のベルトには短剣と壊れたレーザー銃をねじ込んだ。そして、頭にはベレー帽。装備は完璧だ。

都の門の前の木陰に隠れる。都はぐるりと塀に囲まれ、出入りのための門が四方に四つある。この囲いそのものが結界になっており、妖怪が侵入するとすぐに陰陽師に発見される。うまくかいくぐるには、小さな妖力しかもたない妖怪であるか、相当うまく妖力を隠し通せる者でなければならない。俺は妖力を隠すのが苦手だ。甲羅に押し込めば結構ごまかせるが、それでも元の妖力が大きすぎるため、すぐにバレてしまう。

乗り込むタイミングはまだ後だ。今日は都中が月人の襲来に備えて殺気だっている。そのため、月からの使者が来れば、ここにいてもすぐにわかるだろう。本番の前に余計な体力を使いたくはない。月人はあなどれない相手だ。万全の態勢で挑まなければ。

本当は今すぐ輝夜がいる屋敷に乗り込んで、陣取っていたい。我慢だ。我慢我慢我慢。我慢しろ。

俺はこれ以上ないくらいに興奮していた。飛び出しそうになる体

を何とか理性で押さえつける。徹夜で血走る赤い目で、瞬きもせずに月を見つめ続けた。月人はあそこからくる。一瞬たりとも目は離せない。月がゆっくりと中天にさしかかる。時間の流れが遅すぎる。早く来い！　早く来い！

そして、そのときは来た。

「来た……！」

月の光の中に点が見えた。その点はだんだんと大きくなる。俺は笑顔になった。だめだ、もう笑顔にしかなれない。ようやくだ。ようやく、永琳に会える。俺の悪夢が終わる！

俺は理性の縛りをかなぐり捨てる。頭で考えるよりも早く、体が動いていた。都の塀を飛び越えて、家々の屋根の上を走り抜ける。俺の甲羅の重量はとんでもない。そんな体重の俺が藁でできた家屋の屋根の上に飛び乗れば、すぐに陥没して落ちてしまう。だが、俺は踏み出した足が沈み込むよりも速く反対の足を踏み出して先に進んだ。水面に荒波を立てるかのように屋根を破壊しながら走り抜ける。

俺は一直線に輝夜の屋敷へ駆けつけた。屋敷の前に降り立つと、警護の兵士たちが一斉にこちらに振り向く。

「いーっひひひっひふへはほあほあほあひゃあああっはふあああ！」

笑い声を抑えきれない。もっと静かに登場する予定だったのに。

「よ、妖怪だ！　妖怪が出たぞ！」

「よりにもよって、こんなときに……！」

「しかも、この妖気、ただものではないぞ！」

兵士たちが刀を抜いて俺を包囲する。俺は妖力を活性化させて、体から瘴気を噴き出した。その禍々しさに恐れをなしたのか、構えるばかりで斬りかかっては来ない。

そうするうちに、天からの使者の全容が見えた。形式ばったことに、空飛ぶ巨大な牛車での登場だ。その牛車から、瘴に障る力があふれ出た。電磁波だ。その波長に触れた者は、事切れたように眠りに落ちる。警護の兵士たちは全員、一瞬にして無力化されてしまった。

俺も眠くなった。強烈な催眠電波によって、思考がシャットアウトされそうになる。発狂電波の次は催眠電波かよ。月の宇宙人は、つくづく毒電波攻撃が好きな連中だ。

俺は妖力をさらに活性化させた。“眠気”を“狂気”で押さえつける。さらに、腰から短剣を抜き、自分の腕に根元まで突き刺す。妖怪の体は頑丈だ。このくらいで死にはしない。痛みで眠気を吹き飛ばした。

すぐさま輝夜の屋敷に乗り込む。縁側には、輝夜とその隣に立つ、え、ええ、え、

「えーりん」

永琳がこちらを見た。きょとんとした表情で、俺の顔を見つめる。そして、その表情は次第に驚愕の色に染まっていく。

俺の顔はそれに合わせて、どんどん笑顔になった。たぶん、ひきつってうまく笑えていないと思うけど、笑顔だ。歓喜した。永琳は俺のことを覚えている。億年経った今でも、俺のことを覚えていてくれた！

この感情をどう表現すればいいのかわからない。俺の全身の細胞が湧きたち、震えている。そう、これは神と対峙した信者のよう。永琳は俺を悪夢から解放してくれる神なのだ。

「あ、ああ、えり、た、け」

声がうまく出せない。ほら、早く言わないと。

俺は一歩一歩かみしめるように前へ進み出た。永琳はなぜか、それに合わせて後ろに下がる。逃げなくていい。俺はお前と話がしたいだけなんだ。

だが、俺の前に何かが立ち塞がった。永琳が見えないじゃないか。邪魔だ。消えろ。

「ーーーーー！」

血しぶきが舞う。なんか邪魔な物があると思ったら、人間だった。月人だ。俺があんなに恐れていた月人。それが俺の腕の一払いで肉塊になった。結局、こんなものなのか。がっかりしたよ。何のために強くなろうとしたのかわからない。でも、いいんだ。永琳に会えたんだから、すべてはどうでもいいことだ。

「えーりん、俺だよ。覚えてるんだろ？」

「いや、来ないで」

永琳の声だ！　永琳は幼かったあのころと比べて、随分と大人っぽく成長していた。永琳が綺麗に育ってくれて俺もうれしい。

「ほら、見てくれ。お前が俺に植え付けた地獄だ」

俺はベレー帽を取り、ウサ耳を見せる。永琳の顔が青くなった。

永琳はきっと、俺にこんな物を取り付けたことを後悔しているんだ。

だから、頼めばきっとはずしてくれるはず。俺の狂気（ぴょうき）をきれいさっ

ぱり治してくれるに違いない。
俺は永琳を怖がらせないように、エガオを心がけながら、ゆっくりゆっくりと近づいて行く。

「ひぃ……来ないでって言ってるでしょ！？」

『命令認識。待機シマス』

俺の頭の中に声が響いた。その途端、俺の足が動かなくなる。あれ？　おかしいな。これじゃ、永琳のところに行けない。永琳が何かしたのか？　永琳の奴、きっと照れてるんだ。だから、俺にいじわるするんだ。
俺は脳内に直接下される命令を無視して、足を踏み出す。

『“エラー”ガ発生シマシタ』

まだ命令は有効なのか、俺の足は棒のように固まって動かない。でも、無視した。コンクリートで固められたみたいに動かしにくい足を前に踏み出す。一歩あるくだけで、プレス機で脚を粉砕されているような感覚が走る。でも、気にしない。ぎこちなくだが、前に進む。そのうち脚の感覚がなくなってしまった。しかたがないので、四つん這いになって、前に進む。

「……永琳、これはどういうことなの？　この妖怪は何？　なぜ、あなたはそんなに怯えているの？」

「ち、違うの！　私は悪くない……！　私は輝夜のことを思って、だからそんなつもりはなかったの……！」

もう、腕の感覚もなくなった。匍匐前進もできない。腹ばいの格

好で寝そべったまま、首を動かして何とか前に進めないか試してみたが、ダメだ。口の中に土が入るばかりで、進めやしない。

「えーりん、もういじわるはよしてくれよ。たすけてくれよ。たすけて、えーりん」

「やめて……もうやめて……」

大丈夫、俺は永琳を信じている。永琳ならできる。もう俺は、怒ってないんだ。だから、はやく、はやくはやく、はやくしてくれ。そうしないと、もうおさえきれそうにない。いまのうちに、おれがじっとしているうちに……はやく。

「まさか、こんなことになるなんて思ってもいなかったわ。ちょっとしたサプライズになれば、くらいのつもりだったんだけど……永琳、しっかりしなさい。まあ、玉兎が地上にいるのはびっくりしたけど、たかが妖怪一匹程度に怖がりすぎよ。それに勝手に自滅してるじゃない」

「……」

「まったく、しょうがないわね。私たちは、こんなことに時間を取っていられないのよ。さっさとここから逃げないと……永琳？」

「……」

どうしたんだ？　俺は気になって首を動かした。永琳の方を見上げる。

永琳は俺に向けて、銃を構えていた。

37話「贖」

「うそ、だよね、えーりん、なんで……」

「あなたの病は私には治せない」

永琳は泣いていた。泣きながら、銃の引き金に手をかける。おそらく、レーザー銃だ。いくら妖怪といえども、頭部を焼き切られれば死ぬ。

「なにをいっているんだ？　たすけてくれよ、えーりん」

「あなたの悪夢はあなた自身が生み出したもの。その苦しみを癒す方法は、ただ一つ」

嘘だ。俺は永琳を信じている。永琳ならできるはずなんだ。

「ごめんなさい。これはすべて、私の責任。だから、私が決着をつける。その悪夢を終わらせてあげる。私の手であなたを」

――このクソアマ。

「「殺す！」」

引き金が引かれる寸前、俺は四肢と頭部を甲羅の中へ引っ込めた。

憎い。

殺したい。

もう我慢できない。

狂気を集めろ。
感情が振り切れるまで。
怒り狂え。

『“エラー”が発生しました』

『ＧＥＲＯＧＥＲＯＧＥＲＯ！』

「アガアアアアアッ！」

感覚なんてものに頼るからおかしくなるんだ。すべて怒りに任せてしまえ。憎しみを力に変えろ。愛と正義と友情と裏切りと悪と憎悪だよ。

俺は甲羅から飛び出した。視界を極彩色が埋め尽くす。モザイクだ。世界がモザイクにしか見えない。目の前にある二つの物体。青と赤の色をした棒と、黒色の棒がある。たぶん、永琳は前者だ。俺はすべての殺意をそこへ注いだ。

【ｘｘｘｘｘｘｘｘ！】

もう、なんて言ってるのかわからねえよ。とにかく殺す。

全身全霊、頭の先から足の先まで、すべての力を拳に集める。間違った。すべての憎しみだ。

思えば、最初から俺はこうしたかったんだ。永琳を見た瞬間から、ずっと殺意を殺していた。この状況はそれを解き放った帰結にすぎない。水が高いところから低いところへ流れるのと同じだ。

ああ、至福のとき。俺は永琳を殺せるんだ。例えるなら、仕事上がりにゆっくり風呂に浸かって、その後冷えたビールを飲み干す感じ。たまらない。このときが来るのをずっと待っていた。俺が殺した初めての人間は……そういえば、さっきの月人だった。俺の童貞

は永琳に捧げられなかった。残念だが、しかたがない。許してくれ。
一瞬だ。一瞬で俺の拳は永琳の体を貫くはず。ちんけなシールドなんか目じゃない。さあ、永琳、食らってくれよ。
そして、俺の拳が、永琳の前で、
止まった。

『コノ対象ハ“マスター”登録サレテイマス。攻撃対象ニ指定デキマセン』

『ＧＥＲＯＧＥＲＯ！』

は？
俺は目の前の青と赤の物体に向けて拳を振るう。当たらない。
蹴りならどうだ。当たらない。
なんで。どうして。いみがわからない。ふざけるな。あとちょっとだっただろ。え。まて。おかしい。あんまりだ。
感覚は憎悪でごまかすことによって、待機命令を無視できた。だが、最初から攻撃対象に指定できないって、それじゃあ打つ手がない。
俺の姿は永琳にどう映っている。殺気を放っておきながら、手足をぶんぶん振り回しておかしな動きをするだけの哀れな人形だ。なんてマヌケ。ははは、ははははははははははは！！

「う、そ、だ」

『ＧＥＲＯＧＥＲＯＥＧＲＯ！』

青と赤の棒と、黒の棒が移動する。すっと滑るように俺の前から離れていく。

「うそだあああああああああ！！」

俺の周りには、いつの間にか、白い棒がたくさん立ち並んでいた。なんだお前ら、今それどころじゃない。永琳を追いかけないと。白い棒は俺の行く手を遮ってくる。へし折る。片っ端から棒をへし折って行く。細切れにして食う。食べる。食する。

うまい。

38話「後夜祭」

俺は永琳の後を追って山に入った。永琳たちは歩いて移動した。ということはまだ月には帰っていない。今なら間に合う。早く追いかけるんだ。追いぬけ。俺が一等賞だ。お前らになんか渡さん。でも、五等賞も捨てがたい。

知らないうちに俺は血まみれになっていた。体中傷だらけだ。腕には俺の愛剣が突き刺さっている。だれがこんなひどいことしたんだ。俺は剣を抜いて、鞘にしまった。そして、右の眼空に鞘ごと突き刺す。血と肉が飛び散った。よし、しっくりきた。でも、穴が小さくて奥まで入らない。これではすぐに外に出てしまう。念入りに深く突き刺しておこう。ぐりぐり。

山の中を進んでいると、何かが俺の前に飛び出してきた。妖怪だ。俺は颯爽と腰に差していたレーザー銃を構える。

「手を上げろ！　お前は完全に包囲されている！」

俺の前に現れた妖怪は、鬼だった。人間の大男のような体格で、頭に角があり、皮膚が赤い。間違いなく鬼だ。それか、セールスマン。

とりあえず、射殺する。

「ばきゅーん☆　ばきゅーん☆　お前は死んだ」

「なんだお前？　俺に喧嘩売ってるのか？」

鬼が拳をパキパキ鳴らしながら近づいてきた。俺のレーザー銃の光線を受けて死なないとは、この鬼、かなりのテダレだ。俺の編み

物教室レベルでは、もはや通用しないと言っても過言である。

「はっ、まさかお前は、えーりんの手下なのか！？」

「はあ？　俺はこの山に住む鬼だ」

やはり、永琳の配下の者であるようだ。どうりで強いと思った。これは俺も本気を出さなければ。俺はレーザー銃を腰に戻した。空手のポーズで迎え撃つ。

「鬼さん、暴力はいけません。お互いの見解が食い違うときは、手を上げて自分の主張を発表すべきです」

「ごちゃごちゃウルセエ奴だ！　鬼に喧嘩を売るってことがどういうことなのか、お前にもわかってるだろ？　さっさと始めようぜ」

鬼は先手必勝とばかりに、こちらに向かって来た。それに対し、俺は土下座からの前転キックを繰り出す。鬼は俺の蹴り足をつかんだ。そのまま持ち上げようとする。

「お、重っ！？」

鬼が体勢を崩した。今だ！
俺は鬼の腹にしがみついた。そのたくましいお腹を、舐める！
ペロペロペロペロ。

「……なにしてんだ、お前」

ペロペロ、ん、このお腹……腹筋が六つに割れている、だと！？
一個もらおう。

腹筋を一個、むしり取った。鮮やかな赤色をした血のしたたる筋繊維だ。

「ぐあああああ!?　テメエ、やってくれたな!」

鬼が俺の頭を殴る。右目の穴から剣が吹っ飛んだ。いや、さすが永琳の配下の者、ブリティッシュジョークがうまい。座布団三枚はかたいだろう。

「はっはっは!　傑作でしたね!」

「な、何笑ってんだ、テメエ……」

鬼さんが俺の体を突き飛ばす。そのとき、俺の腰からレーザー銃が滑り落ちた。俺は慌てて拾おうとする。あぶない、あぶない。

「なんだ?　人間の使う道具か?」

俺の手がレーザー銃に届くより先に、鬼がそれを無造作に踏みつけた。

「あ〝あ〝あ〝あ〝あ〝あ〝!」

俺のレーザー銃が!

俺はすぐに鬼の太い脚を両手でつかむと、二つにへし折り、引きちぎった。

「ぎゃあああああっ!?」

「クソクソクソクソ!　俺の銃に何してくれてんだ!　謝れ!

俺の家族に謝れ！」

倒れた鬼の体を、瘴気を纏った拳で殴りつける。筋肉をはぎ取る。筋繊維をむき出しにする。これで、水中でも呼吸できるようになった。

「はあ、はあ、はあ……！」

鬼は死んだ。きっと仲の良い友達がドライブスルーまで死体を運んでくれるだろう。

俺は鬼を殺すと、踏みつけられた銃を確認する。幸いにも、銃はやわらかい土の上に落ちていたので、踏まれても壊れていなかった。これで俺はまた、戦える。

俺は飛んでいった短剣を回収し、右目に突っ込みなおした。そのうちに、あたりが騒がしくなる。なんと、ぞろぞろと鬼たちがまた現れたのだ。さっきの鬼の悲鳴を聞きつけてきたか。さすが、永琳配下の特殊部隊、勘が鋭い。

「おうおう！　喧嘩か？　俺たちも混ぜろ……あ？」

「な！？　ひでえ殺し方しやがる！　お前がやったのか！？」

俺はすぐにレーザー銃を構えた。鬼たちに向けてレーザー弾幕を放つ。

「ドドドドド☆　ドドドドド☆　シュビーンシュビーン☆」

「聞く耳持たねえか。どこの妖怪か知らねえが、この山にはこの山の掟がある。俺たち鬼の一族に刃向かう奴は、誰であろうと力でねじ伏せる！　覚悟しろ！」

やはり、レーザー攻撃が効かない。強敵だ。
どうやら、こいつらを倒さない限り、先には進めないようである。
さっさと殺して永琳を追いかけよう。

＊　＊　＊

軽く鬼を全滅させた俺は、山の頂上目指して走っていた。
月は中天を過ぎ、山の向こうに消えようとしている。急がなければ。
そして、山頂に到着した。木々がなく、開けた場所に出る。永琳はいない。どこに隠れているんだ？

「なーんか、今日は山が騒がしいと思ってみれば、とんでもない来客もあったもんだ」

声が聞こえた。広場の中央に転がる大岩の上に誰かいる。それは少女だった。ひらひらした服を着て、頭に大きな二本の角があった。ひょうたんを手に持ち、それに口をつけてあおる。中身は酒だろうか。変な飾りのついた鎖をも体に巻きつけている。
彼女は誰だ。頭に角があるから、鬼？　でも、小さい女の子だし、もしかして、校長先生かもしれない。だったら、挨拶しないと。

「こんばんわー、校長先生ー」

「ぷはー！　今日も酒がうまい！」

しかし、どうして永琳がいない？　どこへ行った？　ここには校長先生しかいないし……
はっ！　もしや、この校長も永琳の手下！？　永琳め、校長先生

まで配下にもつとは、底が知れない。

「なるほど、ということは、校長はさしずめ中ボス。校長を倒さなければ、永琳は姿を見せないということか」

「お前も酒飲んでくかー？」

校長先生……こいつは強敵だ。ザコの特殊部隊とはわけが違う。なんたって校長だ。おそらく、レーザー光線は効きそうにない。本気を出さなければパイナップルにされてしまう。

「その手は食わんぞ！　ぱきゅーん☆　ぱきゅーん☆　くそう、やっぱりレーザーが効かない！　肉弾戦で決着をつけるしかない！」

「まあ、そうだな。酒盛りの前に、一勝負やるとするか」

校長は岩の上に立ちあがった。校長先生だからって生意気だ。俺のこと見下しやがって。この高給取りが！

「あたしの名前は伊吹萃香。ま、せいぜい楽しく殺ろうじゃないか」

39話「アナザー・サイド・萃香」

酒呑童子として人間に恐れられ、この山に居座るようになったのはいつのことだったか。仲間の鬼たちを集めて、勝手気ままにやってきた。酒盛りをしてはしゃぎ、気に入った人間をさらっては勝負を挑む。最近は人間たちが鬼の扱いを心得てきたようで、どうにも面白みがないが。

満月の夜のことだった。雲もかからない月見酒にうってつけの良い月だ。この山に客が来た。どこぞの馬の骨とも知れない迷子の妖怪だ。調子に乗って勝負を挑んだ鬼が殺された。その後に続いてのこのこ出ていった連中の残らず皆殺しだ。怒りを通り越して笑ってしまう。なんともわかりやすく、すがすがしい奴じゃないか。

仲間が殺されたことには腹が立つ。だが、鬼が力比べで負けて殺されたのだ。憤慨以前に興味がわいた。

鬼とは妖怪の上に立つ妖怪だ。その象徴は絶対的な力である。普通の妖怪では真正面からぶつかっても勝つことはできない。妖怪最強の種族だと自負している。その鬼の一族を複数相手にして殺したとなれば、異常も異常、とんでもない大妖怪に違いない。

妖怪は頂上目指して山を登ってくるようだ。ちょうどいいので、酒でも飲みながら待つことにした。どんな奴がやってくるのか、楽しみである。仲間を殺したおとしまえはきっちりつけるつもりだ。だが、勝負に負けただの勝っただの、きったりはったりは手前の勝手。そんな腕っ節のいい妖怪がいるのなら、ぜひともに酒を酌み交わしたい。命までは取らずにおくかと思っていた。

だが、こいつはだめだ。一目見て思った。やばすぎる。

「こんばんわー、校長先生ー」

そいつは、私と同じくらいの背丈の少女の姿をしていた。粗末な服と帽子を身につけていたが、鎧だけは巨大でものものしい有様。鎧から突きでたむき出しの手足は、関節がおかしな方向に曲がっており、骨折しているのは一目瞭然だ。どうして平然と立っていられるのか不思議である。肌は傷だらけで全身血まみれだった。そして、右目は潰れ、その穴に剣の鞘を突き刺している。だが、鬼を相手にしたのだから、その程度の負傷で済んだことの方が驚きである。容姿に関しては、多少奇抜だが、妖怪なんてそんな奴ばっかりだ。特に気にならない。

問題はそいつの放つ気迫だ。ここまで強烈な殺気は感じたことがない。妖力もでかい。私より遥かに上だろう。肌を焼くように突き刺さってくる。厄介な相手だ。だが、それもいい。これは私も手を抜いていられない。本気で命のやりとりをすることになる。

まったく、勝負の後の酒がうまくなりそうだ。

「その手は食わんぞ！　ぱきゅーん☆　ぱきゅーん☆　くそう、やっぱりレーザーが効かない！　肉弾戦で決着をつけるしかない！」

相手もどうやらやる気のようである。私は立ちあがって宣戦布告した。

さあ、楽しい勝負の始まりだ。

＊　＊　＊

手始めに、私が座っていた大岩を片手で持ち上げ、投げつけてみた。

「なんて怪力だ！　さすが校長先生！　俺も負けてらんねえ！」

すると妖怪は、避けるどころか自分から岩に飛び込んできた。そ

のまま頭からぶつかり、大岩を頭突きで粉砕する。大した石頭だ。

「食らえ必殺！　暗黒殺法・呪闇拳！」

その勢いのままこちらに突っ込んできた。妖怪の体から黒い霧が噴出する。なんの技だろうか。様子見に、避けずに防御してみる。受け止めた腕に衝撃が走る。みしりと骨がきしむ音がした。

「……！　なるほど、呪いね」

黒い霧は私の体にまとわりつくように浸食してきた。これは生ける者すべてに無差別に害を与える呪いだ。しかも、強力極まりない。むせかえるような甘い匂いをさせ、容赦なくこちらの思考能力を奪おうとしてくる。えげつない神経毒だ。

私は浸食が進む前に、体内から妖力を発して呪いをはねのけた。一発ならどうということはないが、連続で当てられると厄介である。まあ、それなら避ければいい話だ。

「はあああ！　呪闇連衝拳！」

それは相手もわかっているようで、連続で高速の拳を撃ってきた。息を飲むような速度でいくつもの黒い拳が壁のように迫ってくる様は見ていてぞっとしないものがある。私はその一つ一つを落ちついてかわしていく。

「な、なぜ当たらない！？　貴様、エスパーか！？」

妖怪は動揺した。その隙は大きい。連撃の攻撃を見切り、蹴りを胴に差し込む。

「え、なんで？　何が起きた？」

内臓を潰す気で蹴ったのだが、まったく効いていないようだ。多少よろけはしたが、平然としている。それよりも、私の攻撃が入ったことに驚いているようだ。鎧は見た目どおり、頑丈か。ならば、手足か頭を狙った方がいい。

「やるな！　校長！　さすが中ボスだ！」

「さっきからあたしのことをコーチョーって呼んでるみたいだけど、あたしの名前は萃香だよ」

「萃香さん！」

「そうそう」

妖怪は、またもや黒い拳で殴りかかってくる。もう決まり手が見えてきた。私はあくびをしながらその攻撃をかいくぐる。それにしても、ひじの関節が逆方向に骨折しているのに、よくこんな無茶な正拳突きをぽんぽん撃てるものだ。可哀そうだから、関節を元の方向に戻してやろう。

ばきっ

「あっ」

私の手刀が妖怪の腕にきまる。おっと、普通ならここで痛みに怯むところだが、こいつはそんなこと気にならないのかもう片方の手で構わず殴りつけてくる。それを受け流して脇に挟み、後ろに回ってひねりあげる。そのまま引っ張って肩を壊した。

「あれ？　あれれ？　おかしい。なんで？」

「はあ、思ったほどじゃなかったね、あんた。動きがド素人だよ」

確かにこいつの攻撃は速いし、重い。鬼たちがやられた理由も納得できた。だが、動きが読みやす過ぎる。牽制も何もない真っ直ぐの攻撃しかしてこないと、構えを見た時点で予測できる。

こういう始めから力が強い妖怪というのは、すべての闘いを真正面からの力技で片付けようとする。そして、その方法を通用させるだけの実力がある。格下の相手ならそれで問題なく倒せるだろう。だが、実力が均衡してくると、途端に泥仕合になってしまう。相応の技術を身に付けた相手なら、実力の差を覆して勝利をつかみとることも不可能ではない。

鬼がいい例だ。最初から力をつけて生まれたばっかりに、いつも決まった一つ覚えの闘い方しかできないのだ。鬼の私が言えた義理ではないが。この妖怪もたぶんそうだ。実戦不足が如実に攻撃にあらわれている。

はっきり言って拍子抜けだ。こんなんじゃ、全然物足りない。勇儀とじゃれあっていた方がまだ楽しい。やっぱり、考えが変わった。こいつと酒を飲んでも楽しくなりそうにない。ここで殺してしまおう。

「お、俺は強い！　こんなところで死ぬわけがない！　だってまだ中ボス戦だよ！？　えーりんもまだ出てきてないのに！」

「ああ、あんたは強いよ。でも、相手が悪かったのさ」

一撃で仕留めよう。私は妖力を練り上げ、拳にこめる。一息で相手の懐へもぐりこんだ。このまま顎を撃ち抜いて脳天まで砕く。さ

すがにこの頑丈な妖怪でもただでは済むまい。

「い、いやだ！　えーりん！」

「おおお？」

だが、私の思惑ははずれた。なんと、相手の頭が鎧の中にすっぽりと引っ込んだのだ。目標を失くした拳が空を切る。大きな隙ができてしまった。追撃に備えて空中で体勢を整える。だが、相手からの攻撃はない。妖怪は、カメのように手足もすべて鎧の中に隠れてしまったのだ。なんとも芸の多い奴。

しかし、これでは手が出せない。試しに殴ってみたが、案の定こちらの手が痛くなるほどかたい。持ち上げようとしても、尋常でない重さだった。鬼に言わせるのだから大したものだ。

「おーい、でてこーい」

無反応。つまらない。

私は大きくため息をついた。ここは向こうが顔を出すまで気長に待つか。

何かぶつぶつと小さな呟きが聞こえてくる。カメ妖怪は甲羅の中で何か独り言をつぶやいているようだ。私は能力で音を『萃めて』聞いてみた。

「なんで俺の攻撃が効かないんだ！？　俺は負けるのか？　ここでゲームオーバー？　そんなの嫌だ！　あいつはおかしい！　強すぎる！　ゲームバランスが狂ってる！」

なにやら、私に対して文句を言っているようだが、聞きなれない言葉ばかりで何の事だかわからない。自分が敵わない理由がわから

ないらしい。哀れなものだ。

「たすけて、たすけて、たすけて」

最後は命乞いだ。本格的に興味がなくなった。こんな言葉を盗み聞きする価値もない。勝負の最中に逃げ出すなど、妖怪の風上にも置けない奴だ。さっさと殺して、終わらせたいところである。

ひょうたんの蓋を開け、酒をあおる。早く出てきてくれないものか。

「んあ？」

それは酒を口に含んだほんの少しの隙だった。甲羅に目をやる。気配がない。甲羅はそこにあるのだが、そこから先ほどまで感じていた殺気を読み取れない。

そのとき、ぞくりと背筋に悪寒が走った。背後にいる。いつの間に移動したんだ。甲羅の鎧を脱ぎ捨てたのか。よしよし、少しは楽しくなりそうじゃないか。

「不意打ちなら、もっと殺気を隠しなよ」

私は後ろへすぐさま振り返る。だが、そこには誰もいなかった。そんなはずはない。さっきまで確かに背後に気配が……

「ｕｓａｇｉｔｏｂｉ」

その声は、私の後ろから聞こえた。どうやった。なぜ、そこにお前がいる！？

私は舌打ちしながら振り向きざまに回し蹴りを入れる。相手の体勢もわからないまま放った蹴りは、上体をそらすことで簡単にかわ

された。それはいい。この蹴りは牽制にすぎない。相手の姿を視界に捉えた。もう逃がしはしない。

そこで相手は拳を突き出してきた。またもや正拳突きだ。いい加減、こいつには学習能力というものがないのだろうか。何度やろうと無駄だ。その攻撃は見切っている。

「ｕｓａｇｉｇａｒｉ」

「な、にいっ！？」

だが、私はその攻撃をかわしきれなかった。正確には拳には当たらなかった。しかし、その拳に纏わりついていた呪いの塊がはじけとんだのだ。呪いの飛沫に触れることくらい、なんでもない。私の身に起こったことは、それとは関係なかった。

気づいたときには、内臓をやられていた。せりあがってきた血が口から吹き出す。何をされたのか、全然わからなかった。今までの闘い方とは次元が違う。

「ぐ、お……！」

しかも、ただの打撃じゃない。体の中に異物を埋め込まれた。呪いだ。呪詛が肉体を侵食していく。視界が揺らぎ、頭がうまくはたらかなくなる。

この呪いは、さっきからずっと見せてもらっている黒い霧状のものである。これが体表にとりつく分には、簡単にはらうことができる。しかし、体の中に埋め込まれたとなれば話は別だ。内部の深くにまで打ち込まれた毒は、用意には取り除けない。

油断した。これだけの力があるのなら、なぜ最初から本気を出さなかったのか。いずれにしても、考えている余裕はない。敵の攻撃の正体がわからない以上、足を止めるのは危険だ。

呪いで鈍くなった体に鞭を入れ、一時後退する。相手は当然、追いすがって来た。甲羅を脱ぎ捨てて身軽になったのか、さっきまでとは段違いの速さだ。いや、それだけじゃない。何か他にも術を使っている。この速度は異常だ。

「Ａ－ｒｉｎ，Ａ－ｒｉｎ，Ａ－ｒｉｎ，Ａ－ｒｉｎ，Ａ－ｒｉｎ，Ａ－ｒｉｎ，Ａ－ｒｉｎ，Ａ－ｒｉｎ」

動きはさっきまでと同じだ。予測しやすい、読みやすい軌道で動いている。だが、その速度を認識できても、反応が追いつかない。単純に私より圧倒的に速いのだ。

拳が飛ぶ。回避は間に合わない。とっさに腕で防御する。黒い衝撃がはじけた。

あっけなく折れる腕の骨。それでも力を殺しきれず、余波が胸を貫通した。肋骨が砕け、心臓と肺が押しつぶされる。そして、痛みよりも先に走る虚脱感。喪失感。悲壮、停滞、憎悪。呪いの毒が体を巡る。

目がかすむ。ここで意識を手放してはまずい。妖怪は、自分の目玉に刺さった刀に手をかけ、刀身を引き抜く。

「Ｈｅｌｐ，　ｍｅ！」

黒く光る短刀が風を切った。その閃光は瘴気を帯びて軌道上に線を描く。

私の左の肩から先がなくなる。鮮血が舞った。

ああ、これは死ぬかもなあ。いや、ほんと。

「……やっぱ、撤回する。あんた、最高だ」

私は能力を行使する。『密と疎を操る程度の能力』だ。あらゆるものの“密度”を操る力。それは事物の構成要素の“集合”と“分離”を自在に操ると言い換えてもいい。あいにく、相手の体をバラバラにするなんてことはできないが、こと自分の体をいじる点においてはかなりの融通がきくのだ。

私は切り離された左腕を『萃めた』。時間を巻き戻したように腕が元通りになる。

ニヤリと口もとをゆがめ、地を踏みしめて気合いを入れる。

「うおおおおあああああああ！！」

「Ａｈａ－ｈａ－Ａｈａ！」

私は突進した。一寸足りとも怯んでやるものか。

妖怪が刀を振り上げる。その筋を読み、腕を差し込んだ。斬り飛ばされる。構わない。そのまま残った方の拳で腹を殴りつける。鳩尾に叩き込んだ拳を振り抜く。妖怪は枯れ葉のように宙を舞った。軽い。鎧の守りを失くした妖怪の体は脆かった。

吹き飛ばされて地面を転がる。ふらふらと立ちあがった妖怪は口から大量の血を吐きだす。これでお相子だ。その顔に苦しみはない。狂ったように笑っていた。そうこなくっちゃ。私は斬られた腕を元に戻す。

元に戻すと言っても、完全に再生することはできない。外傷はなくなり、一応問題なく機能するが、こんな反則的な技を使い続ければ色々と不具合がでてくる。ここまで精密な能力の行使は久しぶりなので、疲労も半端ではない。痛みも蓄積していく。なにより注意すべきは、あの呪いだ。効果は地味だが、確実にこちらの体力と精神力を奪っていく。

だが、楽しもう、この命のやりとりを。力の限り、な。

４０話「嵐が過ぎれば」

なんでこんなに強いんだよ。反則だろ。腕も脚も胴も切り落とした。でも死なない。目の前の鬼の少女は、どれだけ致命傷を与えようとも復活する。

俺の精神はこの闘いの中で、自己破壊の次の段階へと進むことができた。存在の拡大解釈だ。俺という存在の破壊と再生が繰り返される。その不安定な状態こそが“俺”だ。その感覚をつかめば、玉兎三技の使用は簡単にできた。俺の体の周囲に妖力を形成する。つまりそれは、“一瞬先の俺”を作り出すことだ。そのヴィジョンを明確に頭の中に描き、妖力を操れば、そこに現実と理想の齟齬が生まれる。後はその二つが統合されるまで待てばいい。自然な修正力によって、妖力の形成が現実化する。そのとき生まれるエネルギーは計り知れない。

この力があれば、どんなことだってできる。目の前の敵を容易く排除できる。そのはずだ。なのに、どうして。

手が砕かれて、もう短剣をもつことができない。原形を失くした腕をがむしゃらに振るって殴りつけるだけだ。二回に一回はかわされる。当たっても倒れない。逆に反撃されてこちらが吹き飛ばされる。相手もだんだんと動きにキレがなくなってきた。傷は回復しているが、ダメージは与えているはず。もう少し耐えれば俺が勝つ。

拳を撃ちにいった俺の前で、少女の体が二つに分かれた。またか。分身だ。二人になった少女は左右から俺に攻撃してくる。いったいどんな妖術だ。分身って、単純に戦力二倍だろ。ふざけんな。俺は二方向からの攻撃に、ボコボコ殴られるしかない。めくらめっぽうに腕を振り回す。やめろ。どっかいけ。俺の前から消えろ。

「はあはあはあ！」

「ｇｉｇｉｇｉ……」

俺は勝たなくちゃならない。こいつを倒して永琳に会いに行く。こんなところで死ぬわけにはいかない。この中ボスを倒せば、きっと永琳が……

そういえば、永琳はどこに行ったんだろう。

「よそ見ぃ、すんなああっ！」

また殴られる。いや、それどころじゃない。永琳はどこだ。俺は、こんなところでこんな奴と闘っている場合か？　違うだろ。永琳を探さなくちゃ。早くしないと、月に帰ってしまう。帰らせてなるものか。永琳は俺のものだ。誰にも渡さない。

「Ａ－ｒｉげｎ，Ａ－ｒｉｎごほっ！，Ａ－ｒｉぐぶｎ　Ａ－ｒｉｎ，Ａぎあ！－ｒｉｎ，Ａ－がｒｉｎ」

「てめえ、はあはあ！　勝負の最中に、はあ！　どこに行こうとしてんだっ！」

鬼の少女は俺に馬乗りになって顔面に連打を食らわせてくる。俺も殴り返した。互いに防御なんてしない。一発一発に全力をこめた一撃を相手の顔面に叩き込む。鈍い衝撃が頭部を揺らす。一秒ごとに意識が白む。目の前が白く染まっていく。

いや、違う。これは光だ。光が森の闇を取りはらっていく。朝日が昇った。

空に、月は、もうない。

「……えーりん……」

ぷつりと糸が切れた。腕が上がらない。今までずっと感覚を殺していた。限界を超えた肉体を憎悪で無理やり動かし続けた。燃料切れだ。心が空っぽになっている。

鬼の少女は動かなくなった俺を、なおも殴り続けた。もう、攻撃を食らっても、痙攣するくらいの反応しかできない。それでも殴られる。

「『まいった』って、いえ！」

殴られる、殴られる、殴られる。

「まけを……はあ……みちょめろっ！」

そうだ、とっくに永琳はここにはいない。逃げられた。もう追いつけない。あの女、逃げやがった。俺がどれだけお前のことを求めてきたと思ってるんだ。どれだけ焦がれてきたと思っている。ちくしょう、逃げられた！　あいつは逃げて、俺はまたひとり。

俺は……

「……ま、け、た……」

もう、永琳を殺せない。

「あたちの、かちだあああああっ！！」

鬼が吠える。俺の体を踏みつぶし、勝利の鬨をあげる。俺の口もとが歪む。への字に歪む。悔しい。涙がとまらない。情けない嗚咽を我慢できない。俺は泣きじゃくることしかできなかった。

＊　＊　＊

てっきり殺されるかと思っていたのだが、どっこい俺は生かされた。

鬼は俺の肩を持って、どこかに運ぼうとしているようだ。獲物は巣穴に持ち帰ってゆっくり食らう主義なのか。

「はあ、ふう、まっちぇろ、もうすぐ、らから、はあ」

だが、不思議と悪いように扱われてはいなかった。むしろ、彼女は俺の体をいたわっている。ぴくりとも動かない俺を、気遣うように丁寧に運ぶ。だが、彼女の体力も限界のようだ。足はふらつき、がくがくと震えている。甲羅を背負っていない俺の体なんて、ただの人間の少女と変わらないほどしかない。鬼の力があれば羽のように軽々と持ち上げるはずだ。それができないということは、くたばる寸前まで追い込まれているということ。そんな状態になっても、俺のことを見捨てようとはしなかった。

ついに鬼は、倒れた。ばたりと地面に寝転がる。俺の体も動かない。二人して枯れ葉のにおいのする地面に横たわった。

「ふひい、らめら、ちょっと、きゅうけい、ひよう……」

「うぐっ、ぐすっ、ふああ」

俺はまだ泣いていた。これじゃ、本当にか弱い人間の女の子みたいだ。だが、どうにも涙がとまらない。

妖怪の体というのは常識外に頑丈である。このまま休んでいれば、体力はすぐに回復するだろう。即死するような致命傷でないかぎり、どんな深い傷も案外すぐに回復するのだ。

だが、ここは鬼がはびこる山。そこらじゅうに妖怪の影がある。

傷つき、動けない俺たちを狙う輩がいるということは、当然予想しておくべきだった。

「ケケケ！　何事かと思えば、お山の大将がこんなところでへばってるぜ！」

「まさか化け物に化け物呼ばわりされる、あの酒呑童子がこの様とは」

「珍しいこともあったもんだ！　こいつはまさに千載一遇って奴だ！」

小妖怪たちがわらわらと集まってくる。極上の妖力を持った大妖怪が二匹もまな板の上の鯉状態なのだ。放っておくわけがない。

「にゃんだあ？　おまえら、あたちとやろうってのか！？」

顔面を何十発も殴られ、腫れあがった青あざだらけの鬼の少女は呂律が回らない。それでも気合いで起き上がり、ファイティングポーズをとる。

「へぷうっ！？」

しかし、小妖怪が撃ってきた妖力弾を避けることもできず、顔面で受け止める。そのまま、後ろに倒れて動かなくなる。

「やったぞ！　鬼の大将を倒した！」

「げへへ、こりゃ一生もんのうまい飯だぜ」

「何言ってやがんだ！　あれは俺のもんだ！」

「なんだあ？　一人占めする気か！？」

「俺が倒したんだから俺のもんだ！」

「じゃあ、そのお前をぶっ殺せば俺のもんだな！」

だが、頭の悪い小妖怪たちは、誰が食べるかで喧嘩になり、俺たちをそっちのけで戦いはじめた。

「すーーいーーかーー！！」

そのとき、遠くから聞こえる誰かの声。その声は徐々に大きくなりながらこちらへ近づいてくる。どかんどかんと轟音のする方を見れば、森の木々が紙切れのように伐採されながら宙を飛んでいる。

「や、やべえ！　隣山の星熊童子だ！」

「逃げろおお！」

一目散に逃げていく小妖怪たち。今度は何が来るって言うんだ？

41話「同衾しました」

「萃香！」

木を吹き飛ばしながら現れたのは、またしても鬼だった。背の高い若い女の鬼だ。体操服みたいなデザインの上着とスカートを着ている。額には、一角獣のように立派な角があり、☆マークがついている。

「萃香！　どうしたんだ、しっかりしろ！　萃香！」

「へぶっ！　へぶへぶうっ！」

俺と闘った鬼の少女の名を呼びかけ、気付けには少しばかり強すぎるではないかという威力のビンタを食らわせている。もう鬼の少女の顔面のＨＰは、やばいことになっていそうなのだが。

鬼の少女は、白目をむいて気絶した。決定打はさっきのビンタっぽい。

「だれがこんなことを……お前かっ！」

「ふえええええん」

横に倒れていた俺の存在に気づいたのか、鬼のような形相、いや本物の鬼だが、とにかく怒りをあらわにして睨みつけてくる。俺の髪の毛をつかんで引っ張り上げ、拳を握りしめている。弁解などできない。また殴られるのか。

「やめろ、ゆうぎ！　そいちゅは、わらひの……ともらひだっ！」

だが、そこで待ったがかかった。俺を殴ろうとしていた鬼は、驚いた顔をして俺をつかんでいた手を放す。どうやら、俺はまた命拾いしたようだ。

＊　＊　＊

ひとまず、身動きの取れない俺と萃香は、勇儀という鬼に抱えられて巣穴まで運ばれた。山の中腹にある中規模の洞窟だ。中はコウモリなどの動物は棲みついておらず、きれいに整備されていた。妖力を感じる炎が壁の穴で燃えており、中は明るい。鬼火というやつだろうか。

「悪いな、萃香。山向こうの谷の沢に、おいしい山菜があるって聞いて、昨晩はそれを採りに行ってたんだ。明け方に帰って来て、お前の山に大妖怪の襲撃があったって仲間たちが言うもんだから慌てて来てみれば……間に合わなかったみたいだ」

「なあに、いいっていいって」

俺と萃香は、布団に寝かせられているのだが、布団が一つしかなかったようで、二人で一緒に使うはめになった。俺はそこらへんの床に放置されていても、いや、そのほうがよかったのだが、なぜか萃香は俺のことを気に入っているようで、布団に引きずり込まれた。角が邪魔で居心地は最悪だ。

「それで決着は、ついたんだな？」

「ああ、こいつは強かったぜえ！」

萃香が俺の肩に手を回してくる。角が邪魔だ。
それにしても、どうしてこの鬼たちは俺を殺さないのだろう。俺はこいつらの仲間の鬼たちを殺してしまったのに。

「ぐすっ、おこってないのか？」

「怒る？　仲間を殺したことか？　そのけじめなら、さっきつけたばかりじゃんか。仲間が死んだのは、あいつらが弱かったってだけのことよ。まあ、弔いくらいはしてやるけどな」

「萃香が許したんなら、アタシが口を挟むことは何もないね」

鬼というのは、なんとも単純明快な考え方をする奴らのようだ。
そこまですっぱり割り切って考えられるのもうらやましい。

「さあ、闘いは終わったんだ。酒を飲むぞ～！」

「ちょっと、萃香。あんたまだ動けないんだから……」

「これが飲まずにいられますかっての！　勇儀、酒盛りの準備だ！」

勇儀はため息をつきつつも、もう慣れっこだと言わんばかりの苦笑いをする。鬼が酒好きだというのは本当らしい。

「そういえば、まだ名前聞いてなかったな。改めて自己紹介だ。あたしは伊吹萃香。で、こいつは星熊勇儀。見ての通り、鬼だ」

「なんとも簡単な説明だな」

「他に言うこともないだろ？　それで、お前の名前はなんて言うんだ？」

「……葉裏」

「よし、葉裏！　今日は飲むぞ！　飲み明かすぞ！」

「朝日が昇ったばっかりなんだけど……」

元気な奴らだ。俺もちょっとだけ、元気が出た。

＊　＊　＊

俺の甲羅は山頂に置きっ放しになっていたので、勇儀に取ってきてもらった。

「ぜえ、はあ、ちょっとこれ重すぎだろ……」

「だらしないな、勇儀は」

俺の甲羅は鬼にとっても重かったようで、一度坂道の途中で落っことしてしまい、木をなぎ倒しながら麓まで転がってしまったようだ。そこから勇儀が担ぎあげてもってきてくれたようだが、洞窟にもどって来たときはすっかり息があがっていた。

勇儀は、俺の短剣も見つけてもってきてくれた。鞘と剣が闘いの途中でどこかへ飛んで行ってしまっていたのだ。あのときの俺の奇行は今思い出してもぞっとする。自分の目玉に剣をブッ刺すとか狂いすぎだろ。アクセルの加減を間違えた。あのまま突っ走っていたら、もとにもどれなかたはずだ。そのうち、元の俺がどうだったの

かさえわからなくなる。あんな無茶はもうしないと心に決めた。
でも、永琳を前にしたら自分を抑えきれるか不安だが……

「ほら、葉裏も飲め！」

萃香のひょうたんからは、とめどなく酒が出てくる。そういう仕組みらしい。最初は自分で飲もうとしていた萃香だったが、やはりまだ体が動かないようでぼたぼたと酒を布団の上にこぼすばかりだった。しまいにはキレて暴れ出した。狭い洞窟の中で巨大化はやめてほしい。今は勇儀がおちょこを持って萃香に飲ませている。
俺も当然体が動かないのだ。勇儀に酒を飲ませてもらうしかない。なんでこんな介護されるような状況になっているのか、自分でも理解できない。勇儀も断れよ。
場の雰囲気に流されるまま、酒を飲む。飲んでから気づいたが、俺はこの永い妖怪人生のうち酒なんて口にしたことは一度もなかった。胃が焼けるように痛い。酒って痛い飲み物なのか。それとも、鬼の酒だからだろうか。全然おいしくないのだが、勧められるままに飲んだ。こうなったらやけ酒だ。

42話「鬼女子会」

「びえええええええん！　えええええりいいいいいいん！　うわあああああああ！　ええりいいいいいん！　ころしてえええええ！」

俺は泣き上戸だったらしい。酒が入ると感情的になるものだと聞いていたが、俺の場合、真っ先にあらわれた感情は悔しさだった。永琳を取り逃した悔しさが胸一杯にひろがり、切なくて涙が止まらなくなった。ただ悔しい。死にたいくらい悔しい。

萃香は泣きじゃくる俺の頭をやさしく撫でる。勇儀は、酒とつまみの干し肉を差し出してくれた。

「なあ、萃香。葉裏がなんかやばいくらい負の感情に染まってるのはわかるけど、アタシには嗚咽でなんて言ってるのか聞きとれなかったんだが」

「まったく勇儀はしかたないなあ。つまり、これは失恋だよ！」

「失恋？」

「そう、葉裏にはエイリーンっていう恋人がいた。けど、エイリーンは葉裏を捨てて逃げたんだ。だから、葉裏はエイリーンのことを憎んで悪鬼羅刹になったのさ」

「へー、そうだったのか」

「ちがゆううううう！　えいりんつえええええ！　えいりんつよくて、おれかなわねえええ！　おれはっ、おれうごおおおお！　えい

りいいいいいん！　うあああ、うあああ！」

「マジで！？　葉裏でも勝てないくらい強いのか！？　どんな妖怪だよそれ、うはー、あたしも闘いてー！　あ、勇儀、あたしにも酒ちょうだい」

「はいはい」

永琳はもう月へ行ってしまっただろう。今の俺では月に行くことなんてできない。次はいつになったら永琳に会えるんだ。あいつに会えない時間を考えるだけで胸が張り裂けそうだ。

「まったく、葉裏よお、お前はそんなに強いのに、何ウジウジしてんだ！　そんな浮気性の男なんか乗り込んでブン殴ってやりゃいいじゃねえか。強くて敵わないってんなら、あたしも一緒について行ってやってもいいぞ？」

「うぐおおお！　えーえりん、もういったあああああ！　とおくにいったあああああ！　もうあえないいいい！」

「会えないくらい遠くに行ったのか？」

「エイリーンなんて名前の妖怪聞いたことないしなあ。大陸系の妖怪か？」

「ああ、海の向こうの。海なんてどうやって渡ればいいのかわかんないな。確かにそれは困ったもんだ。勇儀、酒」

「はいはい」

それに俺には永琳を殺せない決定的な楔がある。永琳は自分を“マスター”として、俺のウサ耳インターフェースに情報を登録している。これはおそらく、命令権者のことだ。永琳はインターフェースを通して、俺に何でも言うことを聞かせることができるのだ。永琳が『殺すな』と命令すれば、俺は手出しができなくなる。それどころか、そもそもマスターに向けて攻撃行動を取ることすら封じられている。俺は永琳の人形なのだ。天から操り糸を垂らして俺を支配する永琳に、どうやって立ち向かえばいい。俺はどうすればいいんだ。

「うぐっ、ひぐうっ、お、おれはどうすればいい……どうすれば、えいりんにかてるんだ……」

「そんなもん、決まってんじゃん」

萃香はこともなさげに言う。なんだ、もしかして永琳に勝つ妙案でもあるのか。

「強くなれ」

「え……？」

「強い奴に勝つためには、そいつよりもっと強くなるしかない！あたしはあんたと闘ってわかった。あんたはこれからもっと強くなれる。だから、落ち込むな。胸を張って生きろ」

そう言って萃香はニカッと笑う。そんなこと言われなくたってわかってるさ。肝心なのは、どうやって強くなるかってことだろう。何の解決にもなってないじゃないか。

だが、俺は安心した。体は小さいが、この鬼の心はでかい。俺は

萃香の胸を借りて泣く。

「ふっ、今はたんと泣くがいいさ。その涙が、お前を強くするのさ……勇儀、酒」

「もう自分で飲め」

＊　＊　＊

それから俺は酔いつぶれ、泣き疲れて眠ってしまった。
目が覚めたときは夕方だった。結構な時間寝ていたようだ。

「起きたのか？」

萃香は布団から出て、まだ酒を飲んでいる。顔の腫れもほとんどなくなり、体を動かすのも支障ないようだ。俺はまだ動けない。勇儀もその隣で一緒に酒を飲んでいた。

「相当、無茶してたみたいだな。まあ、あんだけ暴れりゃ体にもガタが来るだろ。完治するまでここに居ていい。なんならここに住んでもいいぞ？」

「いや、もう出ていくよ。世話になった」

俺は無理やり体を起こし、布団から這い出る。だが、体が言うことを聞かない。すぐに倒れてしまう。

「無理すんなって。別に遠慮しなくていいんだ。あたしはあんたのこと、恨んでなんかないからな？」

「……そんなんでいいのかよ。お前、鬼の親分なんだろ？」

「それでいいのよ。傷心の乙女を放りだすほど、あたしは鬼じゃねえ、なんつって！」

「傷心って……永琳は俺の恋人じゃないんだが」

さっきは余裕がなかったので、訂正ができなかった。鬼たちは永琳が俺の恋人だと勘違いしているようだ。永琳は俺の因縁の宿敵だ。それが想い人と間違われるなど、なんの冗談だ。

そんなこと、あるわけない。

「いやいや、隠さなくていい。あたしだってこれでも女妖怪のはしくれ！　オトメゴコロというやつも、ちゃあんと心得てますってのの」

「乙女心ねえ、男っ気がからっきしのあんたにそんなもんが備わってんのか、甚だ疑問だけど」

「なんだと勇儀！　あたしにだって恋の一つや二つ」

「ないだろ」

「よーし、ここはあたしがオトメゴコロにビビッとくる恋愛講釈をしてやろうじゃないか！」

「ごまかしたな」

「男って奴はさあ、勝手な生き物だよなあ。どんなに女が一途に想い続けても、あっちへふらふらそっちへふらふら。まあ、雄なん

て自分の種を残すことしか考えてないんだろうね。苦労すんのはやっぱり雌なんだよ。でもね、あたしは言いたい。お前らは、一人の女を一途に愛する度胸もないのか！　ってな！」

「おおー、いいこと言った。でも、あんた恋したことないでしょ？」

「もう！　うるさいな勇儀！　じゃあ、あんたはキャピキャピのレンアイしてるわけ!?」

「い、いや、してないけど……」

はあ、こいつらといると、まじめに悩んでるのがバカバカしくなってくるな。

43話「強さの何の」

それから三日が経った。傷はもうほとんど完治している。唯一治っていないのは、右目くらいか。目は妖怪でもデリケートな部分のようで、完全につぶれた状態からの回復は時間がかかるようだ。

「葉裏、はい、あーん」

「いいって、もう一人で食べられるから」

なぜか萃香は俺の世話を焼きたがり、寝たきりの間、ごはんを食べさせてくれたりした。いたれりつくせりだが、恥ずかしいことこの上ない。

お礼といっては何だが、甲羅の中から酒のつまみになりそうなものを出して渡した。そう、『月人酒の友シリーズ』。

「うひょおお！　これって、スルメか！？　山暮らししてると、こういうもんがなかなか手に入らないんだよねー！」

気に入ってもらえたようだ。他にもチーズ鱈とか燻製タコとか、とりあえずあるだけ渡しておいた。

この三日で俺は色々と考えた。これからどうするかということだ。無論、永琳を追う。今すぐ月に行くことはできないが、どんなに時間がかかっても、俺はいつか必ず月へ行ってみせる。地上の人間の技術だって１０００年待てば宇宙開発まで行きつくはずだ。永遠に月へ行けないわけじゃない。

そして、俺はそれまでに強くならなければならない。永琳を倒すために。そのためなら、どんな手段だっていとわない。だから、考

えなければ。俺はどうやって強くなるのか。その方法を。

「強くなるための方法？」

萃香は俺の問いかけに首をかしげる。萃香は俺よりも強い。あの反則的な能力は圧巻だった。俺が今までに出会った、どの妖怪より強かった。彼女ならなにか、いい助言をくれるのではないだろうか。

「って言ってもなあ。そんな方法があったら、あたしだって知りたいし」

「萃香は十分、強いじゃないか」

「そりゃ、鬼だからな。鬼は単純に強い」

種族としての強さか。確かに鬼と言えば、どの伝承でも語り草になるほどの暴力の権化だ。そこらの三流妖怪とはわけが違う。

「それを言ったら、葉裏だってとんでもなく強いぞ。なにせ、その鬼を倒したんだから」

俺はちょっと長生きなだけだ。妖力にものを言わせて戦うしか能がない。その戦い方は、萃香に通用しなかった。俺はもっと技術的な戦い方というものを学ばなければならない。

「でも、俺はもっと強くなりたいんだ。萃香みたいに戦闘の技術を身につけたい」

「そうか。でも、あたしも人に自慢できるほどの武術を持ってるつもりはないよ。こんなものは見よう見まねさ」

武術についてはこれから練習していこう。だが、それだけではダメだ。永琳に勝つためには様々なアプローチから攻撃できる手段を考えなければならない。

この三日で、一つ思いついた方法がある。俺は永琳に直接攻撃することができない。ということは、間接的な攻撃なら加えることができるのではないか。例えば、罠などをしかけて、そこに誘導する方法がある。そういった手段を取るなら、道具が必要だ。俺自身から離れたところで作動でき、ダメージを与えられるような道具を作ればいい。

そこで考えたのが、陰陽術だ。

「陰陽術？　葉裏は変なことを考えるもんだ。なんでそんなものが必要なんだ？」

「俺は陰陽師たちの妖怪退治を見たことがある。奴らは霊力を札に込めて使う。物に力を宿せるんだ。その札には様々な呪文が組み込まれ、いろんな効果がある。そういった札を何枚もあらかじめ作っておくから、奴らの戦術は格段に広くなる。俺たちも、陰陽術が使えるようになれば、強くなれると思わないか？」

「うーん、言いたいことはわかるけど……無理だと思うよ？　妖怪は妖術、人間は陰陽術。それがそれぞれの領分じゃないか。妖術が使える人間って、変だろ？」

まあ、確かに。いい案だと思ったんだが。これは保留にしておこう。

「妖力や身体能力以外で、手っ取り早く強くなりたいってんなら、『程度の能力』を鍛えるって手もあるぞ？」

「ああ、そんなのもあったね。そういえば、萃香も能力を持ってるのか？」

「ああ、あたしの能力は『密と疎を操る程度の能力』だ」

密と疎。つまり、物事の集合と分離。ちぎれた体を修復したり、巨大化したり、分裂したりできたのは、この能力があったからだった。どうりで強いわけだ。

「無敵じゃねえか！　そんなん勝てるわけがねえ！」

「いや、あたしも結構追い詰められてたぞ？　能力で霧状になるまで分裂しても、葉裏の攻撃は爆発みたいな衝撃に近いから避けようがないし、呪いは地味に回避が難しいからなあ。ほんとは密度を極限まで高めて炎を作り出す技もあるんだけど、使う余裕なかったし」

「そんな便利な能力があるなんてうらやましいよ。俺なんか『注目を集める程度の能力』だぜ？」

「それは……ぷっ！」

「笑うな！」

萃香の能力は物事の集合を操る。だから、注目を集めることもできる。俺の能力の効力も兼ねているわけだ。なんというチート。むごい。

「こんな能力、あっちむいてホイくらいでしか勝負事での使い道

がねえよ」

「あっちむいてホイってなんだ？」

「知らないのか？　こうやって、指を出してだな……ホイ！」

萃香の顔の前に人差し指を突き出し、かけ声と同時に上に指を向ける。俺は能力を使って、指先に『注目を集めた』。萃香は指の動きにつられて上を向く。

「かけ声に合わせて、顔を動かすんだ。この指の向く方向に顔を向けたら負け。それ以外の方向を向いたら勝ちだ」

「はあ、そんな遊びがあったのか……ん！？　ということは、あたしはさっき負けたのか！？」

「そうなるな」

「納得がいかない！　もう一回勝負だ！」

それから十回くらい、あっちむいてホイをした。結果は俺の完勝。萃香は負けた悔しさに地団駄を踏んだ。鬼は勝負事にやたらこだわる奴らだな。

「ちくしょー！　また負けた！」

「たかが子どもの遊びだろ。俺は能力使ってズルしてるんだし」

「そうか、それだっ！」

萃香が何かひらめいたように手を打つ。何を思いついたんだ。

「その能力、自分以外の物にも使えるのか？」

「自分以外？」

俺は今まで、この能力は俺自身にしか使えないものだと思っていた。現に、前に使ったときは他の物に注目を集めて、敵の注意をそらすようなことはできなかった。

「能力は成長する。長いこと使い続ければ、その効果も拡大解釈できるようになる。あんたの能力がその文面どおりなら、その程度の拡大解釈は可能なはずだ」

少し、試してみるか。

「そんなこと言われても……あ、勇儀が来たみたいだぞ？」

そう言って、俺は萃香の後ろを『指差した』。

「ん？　ああ、勇儀ちょうどよかった。今、葉裏と話をしてて……」

萃香が後ろを振り向く。しかし、そこに勇儀はいない。最初からいないのだ。だが、萃香はそこに勇儀がいるものと“錯覚した”。

「今、能力を使ったのか？」

「ああ、どうだった」

「……驚いたな。本当に勇儀の気配がした。注目を作り出すということから、逆算的に私の意識の中にある『勇儀の気配』をくみ出し、捏造したことになる。私も『萃める』ことができる能力をもっているけど、『注目』という一点に関してはあんたに勝てないだろう」

俺の能力の意外な利用法が見つかった。これをもっと突き詰めれば、戦闘にも十分活用できるのではないだろうか。

43話「強さの何の」（後書き）

このときの萃香はまだ人間に討伐される前なので、そこまで嘘や騙されるのが嫌いというわけではない

という設定です！

気にしてたのですが、原作でもそこらへんはキッチリこだわってないみたいですね。

４４話「旅立ち」

「よし、決めた。俺、忍者になる！」

「ニンジャ？」

昔、俺がまだ平凡な人間だった頃、好きだったマンガの一つに、カメのミュータントが忍者になるというものがあった。のろまな甲羅を背負ったカメが、忍者として俊敏にかっこよく敵を倒す。そんなコメディだ。

別に俺は忍者のことなんか何も知らない。忍術も有名な奴を一つか二つくらいしか覚えていない。でも、この時代にはまだ忍者はいないはず。だったら、俺が先駆者を名乗って、好き放題に自分流の忍術を開発したっていいじゃないか。妖怪忍法だ。文句を言う奴もいまい。

「ニンジャってなに？」

「忍者は影から影へ、闇に潜み、必殺の一撃で敵を暗殺する最強の隠密部隊だ。諜報活動にも優れ、様々な道具を駆使した忍法で敵を撹乱できる。そして、語尾に“ニンニン”とつけてしゃべる！」

「おおー、なんかわからないけど、すごいニンニン」

忍者には流派があったよな。伊賀とか甲賀とか。俺は何と名乗ろうか。伊賀の『イ』からとって、『呂賀』なんてどうだ？　それとも甲賀の『甲』から、『乙賀』とかどうだろう。おお、『乙賀』がいいかもしれない。甲羅を背負った亀が、そこから一歩踏み出し外

に出た、だから甲の字の一つ先、乙賀だ。

「というわけで、俺はこれから『乙賀忍者』を名乗る。乙賀忍者、頭目、乙賀葉裏！　どう、かっこよくね？」

「ああ、まあ、うん、いいんじゃない」

「乙賀忍法、『目そらしの術』！　食らえ、チー鱈手裏剣！」

「なにっ！？」

投げつけた手裏剣に、萃香が反応する。猫のような素早さで手裏剣をぱしっとつかんだ。しかし、それはチー鱈ではなく、ただの葉っぱ。普通ならすぐに気づいて無視されるような嘘だが、俺は能力を使って『注目を集めた』。俺の作る注目はその場に適した“信憑性”を捏造する。最初から嘘だと気づいていれば効果がないが、嘘だと発覚するまで錯覚は続くのだ。萃香は葉っぱを確認するまで、それが本当にチー鱈に見えていたことになる。

これが俺が考えたインチキ忍法、『目そらしの術』だ。乙賀忍法の記念すべき最初の術である。

「まあ、ここまで元気になれば、もう心配はいらないな」

萃香は葉っぱを捨てながら言う。その隣にいるのは、勇儀。萃香と闘った日から一週間が経った。俺は今日、この山を旅立つ。しばらく、俺は旅に出ようと思っている。修行の旅だ。いつまでの安穏とこの地に居座っているわけにはいかない。俺は強くなる。どんな手段を使ってでも永琳を倒すと誓った。そのための乙賀忍法だ。これは月人に対抗するための術。永琳を倒すための術。ゆえに、最強の術となる。そうしなければならない。

「旅に出る前に、あたしとも一勝負してほしかったんだが」

「もう、鬼と闘うのはこりごりだ。こっちの身が持たねえよ」

勇儀にも別れの言葉を告げる。この山の鬼たちと再び会うのは当分先のことになるだろう。もう二度と会わないかもしれない。いいさ、妖怪なんてそんなものだ。勝手気ままにやらせてもらう。

俺は背中に甲羅を背負った。装着はしない。装着部はスライド収納し、緑の六角形のオブジェとなった甲羅。当分、こいつも封印することにした。俺は甲羅から出た亀。ぬくぬくと自分の家に引きこもっていては成長などしない。背中に背負っていれば、背後からの攻撃は防げるだろう。その程度の守りで十分だ。

ただ、この甲羅、非常に持ちにくい。とにかく重いので、しっかり持たないとすぐに落っこちる。最初は縄でしばって（これがほんとの亀甲縛り）持ち上げようとしたが、一瞬でブチ切れた。しかたがないので、鬼の鎖を少しもらった。鬼が手枷や足枷に使う鎖らしい。萃香や勇儀も鎖をつけているし、鬼の流行りなのかもしれない。鬼の力にも耐えられる特別製なので、切れることもない。これでぐるぐる巻きにして体にくくりつけた。

服装はいつもの通り、ゴワゴワのベストに短パン。ちゃんと洗濯した。勇儀が。

蔦のサンダルを履き、ウサ耳を中に入れて帽子をかぶる。腰には短剣、背中には甲羅。装備は万端だ。

「じゃ、行ってくるぜ！」

「おう、また闘おうな！」

「いつでも遊びに来いよ」

俺は鬼たちに見送られて山を降りて行った。

＊　＊　＊

と、旅に出る前に、もうひとり、挨拶しておかないといけない奴がいる。

俺は山を降りて都の反対側にある森へ来た。ここは俺が地上で目覚めた場所。幽香に会いに来たのだ。あいつのことだから、俺のことを心配していると思う。出かける前に声をかけていこう。

「ゆーかりーん！」

「ああっ！？　葉裏さーん！」

幽香は元気そうだった。幽香ももうすぐこの森を出て、新しい畑を作る場所を探すという。

「実は葉裏さんがこの森を出た後に、人間の妖怪退治人が森へやってきたんです。私、襲われそうになったんですけど、勇気をもってやっつけました！」

「そうか、ゆうかりんは偉いな」

「こう、えい！　って、軽く突き飛ばしたつもりだったんですけど、思ったより力んじゃって【検閲により削除】しちゃったんですけど、なんというか……意外と嫌いじゃない感覚というか、むしろ、ちょっとキモチイイかも、とか思っちゃって、きゃー！　す、すみません、私何言ってるかわからないですう！」

「え、あ、そう」

「葉裏さん！　私、葉裏さんの言葉で妖怪としての自信が持てました！　やっぱり、私たち妖怪と人間さんは相いれないものですよね。これからもどんどん、人間さんたちを【検閲により削除】していきたいです」

思ったよりも元気そうでなによりだ。少々、バイオレンスな風味が出てしまったようだが、それが彼女のもともとの気質だったのだろう。妖怪としては何も問題ないので、何も言わないことにする。

「そして、自分だけの素敵な花畑を作ってみせます！　だから、私の花畑が完成したら、葉裏さんにも見てほしいんです……」

「ああ、いつかお前の花畑を俺にも見せてくれ」

「ほんとですか！？　約束ですよ。葉裏さんにもらったお花の種も、ちゃんと育ててみせますから！」

こうして幽香との別れも済んだ。もう思い残すことはない。後はひたすら自己研鑽あるのみ。まっていろ、永琳。俺は必ず、お前に追いついて見せる！

45話「月日流れて」

あてどない旅だった。強さとは何か、それは武芸の境地だろう。俺にはそれが何かわからない。ただ、外道だろうとなんだろうと、力を得るためには努力を惜しまないつもりだ。

と言っても、むやみに殺生などする必要はない。一定レベルの妖怪の相手なら遊び半分にしてやった。鬼を倒した俺にとって、ほとんどの妖怪や人間の妖怪退治人の実力は物足りないと言わざるを得ない。妖力は十分以上に蓄えがあるので、人間をとっ捕まえて食う必要もなかった。日向ぼっこをすれば甲羅が光合成で妖力を生産してくれる。というか、俺はまだ自分の妖力全てを十全に扱えない状態なのだ。はっきり言って、そんなにいらない。

俺が最初に行った修行は人間の観察である。なぜかと言えば、『程度の能力』を使いこなすためだ。人間がどのように目を使うのか、つまりは眼球の動かし方、顔の向け方、瞬きのし方から始まり、視界と首・胴・脚そして腕と手の連動、そこから発生する構造上の錯覚の起こし方を学んだ。このすべてが『注目を集める程度の能力』に通ずる。それらを学ぶことで、より自然に効率よく注目を作り出すことができる。

さらに、心理的洞察も行った。どのような状況で人は動揺するか、疑問を持つか、関心を向けるか、喜怒哀楽の原因と発露、あげればきりがないが、感情に伴う様々な反応を事細かに調べ、まとめあげた。

そこから実際に能力の研鑽を行う。まずは、人間の集落に妖怪とバレずに紛れこむことを目標とした。俺は妖力を隠すことが苦手だ。持っている妖力がでかすぎて隠しにくい。甲羅に妖力を詰め込めば、外に漏れないようなので、結構な量をごまかせる。しかし、ありったけ詰め込んでも、中妖怪程度の妖力は肉体に残るのだ。少し陰陽

道に精通するものなら、簡単な結界で探知されてしまう。人間の集落には、こういった結界を張る妖怪退治人が一人はいるので、なかなか侵入しづらいのだ。ちなみに、昔は妖力を甲羅に移動させると甲羅の肥大化が起きたが、今は形状が固定化されたのか、大きさが変わることはない。

そこで、俺の能力の出番である。なるべく、俺に注目が集まらないようにするのだ。だが、俺の能力は『注目を集める程度の能力』である。注目をそらすことが本義ではない。必ず俺が指定するものに注目が集まり、その結果として俺が注目されないということだ。だから、最初のうちはうまくいかなかった。人々の注目が不自然にどこかに集まってしまう。その結果、俺という存在が浮き彫りになる。それは強烈な違和感として人間の感覚に残る。同じ集落に長くとどまることはできそうになかった。

その欠点をなくすため、改良に改良を重ねた。常に周囲の人物の動向の一つ一つに気を遣い、どんな細かなしぐさも見逃さない。視界に収まる範囲の環境を掌握し、そこに存在するすべての生命体の意識をムラなく、自然に、違和感なく俺以外のどこかに集中させることを目指した。それが可能になれば、俺は透明人間と化すことになる。

無論、それを完璧にこなすことは不可能だ。俺にも限界という物がある。だが、なるべく理想に近づけるべく、鍛錬を惜しまなかった。すべては強くなるため、永琳を倒すためだ。

そして今、俺は人間の村を渡り歩く行商人になりすましている。

「安いよ、安いよー！　珍品、名品大特集！　さあ、見ていってくれい！」

まるっきり気配を消して目立たなくしようとするのは、逆に注目を集める。適度に胡散臭い方が逆に妖力を隠しやすい。人々の目には、俺の姿は珍品を売りつける少々詐欺師まがいの見世物商人と映

っているだろう。
　他にも状況に合わせて数え切れないほどの工夫をしている。注目を集める対象を分散させるという荒業で、一秒の間に操作する視線の回数は百や二百じゃおさまらない。俺の頭が狂ってなければ、こんな狂気の技は誰も使えまい。ふっふっふ。どうも狂気という奴は、正常な思考を鈍らせる代わりに、何か突出した洞察力・観察力を俺にもたらしてくれる。皮肉なものだ。
　名づけて乙賀忍法『目そらしの術』あらため、『虚眼遁術』。どうだ、かっこいいだろう。
　この術を完成させるまでに１００年かかったことは内緒だ。

「やれやれ、今日も売れなかったなあ。店じまい店じまいっと」

　売れないのはいつものことだ。別に路銀を稼がなくても食うに困ることもなし、ただ、商人を装っているにすぎないので何も問題ない。やっぱ、人魚の肉とか鳳凰の爪とかあからさまに嘘とわかるようなものばっかりじゃダメだなあ。河童の手、くらいならなんとかなるか？

「ちょっと、そこの商人」

「はい？」

　これはまた珍しい、客だろうか。しかも、見たところ尼僧のようである。この夏のクソ熱い中、真っ黒い法衣と頭巾を頭からかぶっている。大きな頭巾のせいで顔は見えない。背丈と声からして随分小柄で若い尼さんのようだ。
　だが、なんか妙だ。俺の洞察力が、こいつは変だと訴えている。

「お客さん、今日はもう店じまいなんですよ、へっへっへ」

「少しでいい、見せてくれ」

ここには尼さんの興味を引きそうなものなんてないはずだが。ああ、そういえば一つだけあったか。思った通り、尼さんは風呂敷の上に置かれた商品の中から、ある一つを指差す。

「これは何だ？」

「ああ、これね。お客さん、さすが目が高い！　このなんか仏具っぽい奴は、縄文時代のかの名匠、八門太郎（ばちもんたろう）の遺作ですよ。某平等院鳳凰堂みたいなところから手に入れた、信用のおける逸品！　見てくださいこの美しい形、仏様のなんかこうオーラみたいなものを感じるでしょう？　霊験あらたかでありがたーい雰囲気ですよね。いやほんと」

この仏具、実は村の外の道端で拾ったものだ。まったくいい拾い物だった。なんと、神力がこもっているのだ。神力とは文字通り神の力。人間に信仰された神が得る力だ。一度、末神の神域に知らずに入ったときエライ目を受けたことがあるので存在だけは知っていた。霊験あらたかなのは事実である。持っているだけで肌がチクチクして妖怪にはちょっと辛い。正規の値段でも豪邸が買えるほどの値になるに違いない。ちょうど大きなモグラの穴に落ちていて、俺の超洞察力がなければしばらく誰も見つけられなかっただろう。

「……いくらだ？」

「でも、お高いんでしょ？　と思っているあなた！　ご安心ください。今回は特別大サービス！　なんとこの登竜門を登りきる直前まで進んだという鯉の魚拓をセットでつけまして、えーっと、この

くらいの値段でどうでしょう？」

「……」

ふっかけてみたが、尼さんの反応はない。やっぱり、見た目からして金もってそうにはないしな。この世界には妖怪のように神が実在するみたいで、信仰心に熱い者が多い。俺としては信仰よりも科学が発達してほしいので、ちょっとすっこんでてもらいたいところだが。でも、神様に恩を売っておくのも悪くない。どうせ元手はタダなんだし、金が欲しいわけでもないし、そんなにほしいのならこの尼さんにくれてやっても……

「このバチあたりが！　それはお前が持っていていいようなものではない！　それを手放さなければ、お前に仏罰が下ることだろう！」

「ええーっ！？」

46話「ネズミのお使い」

人々の視線がこちらに集まる。まずい。俺は必死に注目を散らそうとするが、ダメだ。俺の処理能力を超えている。脳内回路が焼き切れそうになる。

こういう予想だにしないハプニングにこの忍術は弱いのだ。まさか尼さんが、商品の値段が高すぎて買えないからといって逆ギレするとは思わなかった。

「ぐおおお！　む、無理ッス！」

目ん玉が左右でぐちゃぐちゃに回転しそうになる。無理だ。術が解ける。一度注目が集まると、なし崩し的に俺の存在全体が注目される。俺の能力は注目を集めることに特化しており、散らすことは苦手なのだ。ここは集落の中、つまり結界内だ。すぐに妖怪がいるとバレてしまう。

俺は甲羅ごと風呂敷をたたんで担ぎあげ、結界の外に向かって駆け出す。

「な、お前は妖怪なのか！？」

あーあ、バレちゃった。もう、しばらくはこの村には立ち寄れないな。

走り出した俺の後を、尼さんがついてきた。本気で走れば引き離せると思うが、ちょっとむかついたのでからかってやろう。俺の商売を邪魔したお返しだ。

適度な距離を保つようにスピードを合わせて、近くの林へ入り込む。この奥なら人目にもつくまい。俺はちょうどいいところでくる

りと体を反転させ、一回二回と地面を蹴って着地する。

「まて、この泥棒妖怪！　ご主人の宝塔を返せ！」

「泥棒とは人聞きが悪い。まったく商売あがったりだ。この埋め合わせはしてくれるんだろうな？」

「そもそも妖怪が人里で商いをすることが間違っているのだ。さあ、おとなしく宝塔を渡すのだ」

宝塔というのはあの仏具のことか。これが何なのか知っていて取り戻そうとしている。様子を見るに、相当大事な物のようだ。ますますタダで返すのが惜しくなってくる。人間相手にだれが親切にしてやるものか。

「ちっ、しかたない。力づくでも取り返させてもらうぞ！」

尼さんは闘う気満々のようだ。実はさっきから気になっていた。この尼さんの霊力はなんか変だ。一見しただけではわからないが、“百見”すればすぐにわかる。この霊力、どこか歪んでいる。おお、なんかこれかっこいい気がしてきた。

「よし、この技、乙賀忍法『百見心眼』と名づけよう」

「何言ってるんだ、君は」

まあ、ただの洞察力なんだけど。とにかく、霊力が変という話。何度か陰陽道に通じる妖怪退治人と闘ったことがあるが、それとは違う。何かを隠しているような気がする。

「相手が妖怪なら、姿を隠す必要もない。とうっ！」

尼さんが法衣を脱ぎ捨てた。お色気戦法か？

中から出てきたものを見て驚く。少女の形をした姿、そして頭に生えた耳、おしりの尻尾。なんと妖怪だ。妖力も感じる。黒いスカートとケープを身につけたネズミっ娘だった。

「なんだ、妖怪かよ」

「なんだとはなんだ！」

拍子抜けした。もっとえげつない何かが出てくると思ったよ。実はおっさんだったとか。

俺は風呂敷の中から宝塔を取り出す。

「そうだ、妖怪！　それを渡せ！」

「はい」

「あ、どうもありがとう……って、なんであっさり渡した！？」

いちいち反応が面白い奴だ。渡せと言われたから渡したのに。

「人間だったら悪戯してやろうと思ったけど、妖怪なら話は別だ。そもそも、村で叫ばなければ素直に渡してたのに」

「えー、私が悪いのか？」

ネズミ妖怪は恐る恐ると言った様子で宝塔を受け取る。罠でもしかけてあるのではないかと思っているのだろう。

「それより、なんでそんなもの探してたんだ？　あと、どうやって人間に化けてた？」

「これは私のご主人がなくした大切なものだ……はあ、まったくいつも気をつけろとあれほど言っているのに……人間に化けていたのは、法力のチカラだ」

「法力？」

陰陽道ではないのか。最近は仏教が広まってきたからその影響か。しかし、いずれにしろ妖怪とは無縁の術だろう。俺はこれまでに、何度も陰陽道を習得しようと挑戦してきた。しかし、結果は惨敗。妖力を陰陽術に利用することはできなかった。

それをこのちんまい子ネズミ妖怪はなしたというのか。解せん。

「興味が出た。俺の名前は乙賀葉裏。お前はなんて言うんだ？」

「ナズーリンだが、何をする気だ？　言っておくが、金はないぞ」

「おお、そうだった。それは俺の商品だった。ということは、お前は俺に代金を払わないといけないな」

「これはもともとご主人のものだったのだ！」

「拾ったのは俺だ。その時点からそれは俺の物。それをどう処分しようが、俺の勝手だろ」

「ちっ、なんて意地汚い妖怪だ。悪いが今払えるお金は私のお小遣いくらいしか……」

ナズーリン涙目。別に俺は金なんかほしくない。

「金はいらん。その代わり、お前が知ってるその『法力』って奴を教えろ」

「はあ？」

ナズーリンは盛大に首をかしげていた。

47話「チャレンジ命蓮寺」

ナズーリンの案内で連れてこられた場所は、寺だった。
切り立った崖に沿うようにして伸びる道を進むと、崖の上に建つ寺が一つ。この妖怪はどこに連れていく気なのだ。まさか、本当にこの寺に来たのか。この辺りには他にめぼしいところなどない。妖怪が住み着く廃寺かと思ったが、ちゃんと聖域の結界が敷かれている。

「おい、もうそろそろ聖域に入るぞ。やばいだろ」

「大丈夫だよ。いいから黙ってついてきて」

寺とか神社とか、妖怪にとっては鬼門なのだ。聖域に入るだけで退治されても文句は言えない。俺は逃げられる自信があるが、このちびっこネズミはひどいことになること請け合いだ。
寺についた。尼のようなそうでないような服装の少女が門前の掃除をしている。さっそく人間に見つかったって……

「あるぇー？　あの人、妖怪だあ？」

妖力を感じる。なんで妖怪が寺にいるんだよ。

「ナズーリン、急に出かけたそうだが、何かあったのか？」

「い、いや、何でもないよ。それより、お客を連れてきた」

「どもー」

「参拝に来られた方かな」

尼さん風妖怪は俺に会釈する。何がどうなってるんだ。なんで俺が神様仏様を拝まなきゃならない。

「いや、どうも本格的に仏門に入りたいらしくてな」

「はあ!?　どゆことそれ!?」

なんで勝手に仏教徒にされてんだ。そんなことを頼んだ覚えはない。

「だって、法力が使えるようになりたいって言ったじゃないか」

「え、それってなんか仏教的な修行しないとダメなの?」

「当然だ。まあ、修行しても妖怪だから法力なんて使えないと思うが」

「おいいい!?」

話が違うじゃん。やっぱり、妖怪に法力なんて使えないのか。あれ、でもナズーリンは法力で人間の姿に化けてたんだよな。なんで妖怪のナズーリンは法力が使えるんだ?

「あれはこの法衣に法力でまじないがかけてあったからだよ」

そんな仕掛けだったのね。がっかりだよ。

「まあいいや。それで、なんで妖怪のあんたらがこんなところにいるんだよ。この寺の住職はどうした？　あ、わかった！　乗っ取ったんだな！　寺を丸ごと乗っ取る妖怪一味なんて、大それたことするもんだ。なんてあくどい。でも、そんなお前たちが好き」

「なんだこの無礼極まりない妖怪は？」

「私たちのこと、何も知らないみたいだから許してあげて」

なんだ、さっきから会話がかみ合わないな。他にどう解釈すればいいって言うんだ。

「ここは命蓮寺。人と妖怪を平等に救う寺だ」

「は？　人と妖怪を平等に？　なんの冗談？」

「冗談ではない！　私たちがこうしてここにいるのが、何よりの証拠だ！」

ということは、こいつらは仏教徒なわけ？　いやいや、ありえないから。妖怪が仏様を信仰してどうするのよ。妖怪は妖力を食らう。妖力は負の感情に集まる。負の感情は主に人間が作り出すものだ。ゆえに、負の感情あるところに妖怪あり。これが妖怪が人の恐怖から生まれるという所以。そんな妖怪が仏にすがるとは何事か。

「頭パープリンなのか？」

「破ッ！」

尼さん風妖怪に竹箒で頭に一撃をくらった。痛い。

「どうにも胡散臭え。そんな話、にわかには信じられんな。そんなトンチンカンな考え方をする住職を見てみたいぜ」

「……いいだろう。姐さんにお会いすればお前の考えも変わるはずだ。ついてこい」

尼さん風妖怪に導かれて、本堂にお邪魔する。だが、その敷居をまたいで板の間に上がろうとしたときに事件は起こった。

ばきっ！

「あ、ご、ごめなさーい」

自分の体重を考えてなかった。甲羅は表におろしてこよう。うわ、尼さん風妖怪の顔すごいな。目からビームでそうなくらいこっち睨みつけてきてるよ。おー、こわ。

そんなちゃめっけたっぷりのハプニングもありつつ、案内された本堂の中にその人はいた。

紫の髪は毛先に向けて金色に染まったロングウェーブ。そして、ゴスロリ風のドレスを着た若い女性だった。もう時代を超越してるよ。いや、そのあたりのツッコミ今さらなんだけど。

しかし、こいつは変も変、超変だ。俺の『百見心眼』が告げている。まず、人間ではない。だが、妖怪かと言われるとそれも違うような気がする。なんだこの力は。ある意味、おぞましい。

「あらあら、そんなにこわい顔をなさって、どうされたのですか？」

その声は、感じ取れた力とは随分違い、ひどくやわらか。やさし

く心をつつみこむようなあたたかさがある。なんだろう、このギャップ。

「はじめまして、俺は乙賀葉裏。あんたは？」

「私は聖白蓮と申します。この寺をとりまとめておりますが、大した者ではございません。どうぞ、おくつろぎになってください」

「そんじゃま、遠慮なく」

俺は白蓮の前にあぐらをかいて座る。側にいる尼さん風妖怪が噛みついてきそうな勢いだが、気にしないでおこう。

「しかし、本当にこの寺は滅茶苦茶だな。人間と妖怪を平等に救うなんて、本気で言ってるのか？」

「はい。人も妖怪も神も仏もすべて同じです」

「はあ、そりゃあ大それたことを言うもんだ。その精神はスンバラシイと思うけど。実際問題、無理なんじゃないの？　だいたい、信心ある妖怪なんているのか？」

「ええ、この寺には人間に迫害され、肩身の狭い思いをしてる妖怪の方たちがたくさん来てくださいます。皆さん、とても信心深い方ばかりです」

「俺はその弱っちい妖怪たちの方に驚きだよ。人間にやられたからって、仏様に泣きつくなんて、妖怪としての矜持はないのかと言いたいね」

「それは強者の理論です。人も妖怪も等しく弱き者です。あなたの強さも相対的なものでしかありません。死や苦しみを恐れる心をどうして否定できましょうか」

「まあ、そうかもしれないけどさ……俺たちは妖怪だぜ？　仏様や神様が救ってくれると思うのか？」

「仏道は、仏の信心のみによってなるものではありません。煩悩を捨て心を清めることがあらゆる苦しみからの解放へ通じます。実践的な精神の調和を実現する一つの答えです」

そんなことを言われてもよくわからん。というか、俺はこんな問答をしに来たんじゃない。

48話「聖☆おねえさんマジ聖」

「なるほど、つまり法力を学びにこの寺へ来たのですね」

「そういうことだ。妖怪でも法力は使えるのか？」

「不可能ではありませんが、とても難しいですよ？」

そもそも法力とはなんぞや。陰陽道と何か違いがあるのか。そこんところからして俺にはよくわかっていない。

「法力とは、霊力を持つ人間が厳しい修行の末にたどりつく、功徳の力です。悪しき者を祓い、病を癒すことができます」

「……それって、全然妖怪向きじゃない気がするけど」

「はい、法力は霊力によってなすもの。妖力しか持たない妖怪には使えません。法力は霊力の使い方の一つです。その点で言えば、陰陽道も同じですね」

「じゃあ、妖怪が霊力を持てるようになる方法でもあるのか？」

「それもできません。妖力と霊力は相反するものです。この二つを同時に持つ術は、残念ながら私も知りません。結論から言ってしまえば、神力を用いて霊力の代替とするのです」

「神力ぅ？　それこそ妖怪にはふさわしくない力だろう。まだ妖力を霊力の代わりにしたって言うほうが信じられるぜ」

「いいえ、神力とは信仰の力。人々から信仰を集めれば、どなたでも神力を得ます。私も恐縮ながら神力をいただいていますし、この寺にはあと一人、神力を持つ妖怪がいますよ」

「おいおい、妖怪ってのは人間をおどかして襲うものだろ？　それがなんで人に崇められるんだ？」

白蓮の話によれば、妖怪でも神になれるということになる。神力というものは他の力の種類と比べて質が高いらしく、色々な応用ができるそうだ。使い勝手のいい力で、手早く強くなれる。人間と仲良くなってでも力を得たいと考える妖怪なら、神力を集めて神格を得ることもまた一つの手だ。お稲荷様とかもともと化け狐だし、妖怪が人間に祀られるようになるって話も、そう考えるとおかしくはない。

だが、俺は気にくわない。俺は永琳を倒すためにどんな汚い手段を使ってでも力を手に入れると誓ったが、それでも神力は欲しいと思わない。俺の目的は永琳の打倒。そのために人間に仁徳を説いて信仰力を集めるのか？　恨み殺しという最低の私利私欲の実現のために人間を守り、神と崇められることで得た力を使うのか？　俺は狂ったが、そこまで妖怪やめてない。

「俺は妖怪だ。人を殺したことだってある。今さら中途半端に改心するつもりなんかない。俺はわかりやすい悪役でありたいぜ。人間の善意を利用して力を得ようなんてクソみたいな真似できるか。そこを曲げたら俺は俺じゃなくなる。あ、それが俺の妖・怪・道！」

ててん！

俺は歌舞伎役者のように大見栄を切る。白蓮はそんな俺を見て、ほがらかに笑った。

「あらまあ、あなたはとても妖怪らしい妖怪のようですね。しかし、それでは法力を習得することはできそうにありませんねえ……」

俺はいそいそと座りなおす。そうなんだよ。そこが困ったところなんだよ。

「そもそも、どうして法力を学びたいと思ったのですか？　あなたのおっしゃる通り、妖怪とは縁のない力だと思うのですが」

「そりゃあ、強くなりたいからさ」

「それでしたら、法力でなくても他に方法はあるように思いますよ」

「まあな。ちょっと俺の忍術に使えないかと思ったんだ」

「ニンジュツ？　とは、一体なんですか？」

忍術は様々な道具と溢れる知恵を駆使してどんな状況にも対応できる忍びの技。さらに、俺の場合は妖怪忍者。怪しげな妖術で作りあげたビックリアイテムで敵をあっと驚かせたいところだ。

「それでしたら、普通に妖術を習得すればいいのではないですか？」

「妖術って習うようなものか？　ほとんど生まれつきその妖怪が持ってる術になるだろ？　だから俺は陰陽術や法力を学びたいんだ。人間はそういう体系をもった力の使い方を確立している。霊力という力そのものと、それの使い方をばらして考えられるところは評価

できる。俺が知りたいのはそういう術だ」

「なるほど、そういうことでしたら力になれるかもしれません」

「ほんとか！？」

「法力や陰陽術はあなたに合わないようですね。ですが、私の知る妖術ならあなたにも使えるかもしれません」

ようし、これは予想外の収穫だ。習って覚えられる妖術。これが使えるようになれば、俺の忍法のレパートリーもぐっと広がるだろう。

「姐さん、こんな得体のしれない妖怪に協力していいんですか？」

尼さん風妖怪が愚痴るように白蓮に言う。余計なことを。

「救いを求める者であれば、命蓮寺は拒むことなく受け入れます」

「そうこなくっちゃ！　それじゃ、しばらくこの寺の厄介になるぜ」

「図々しい奴だな。まさか、住みつく気か？」

「まあまあ、いいじゃありませんか。人手不足で困っていたところですし、葉裏には妖術を教える授業料の代わりとして、この寺のお手伝いをしてもらいましょう」

白蓮、いい人そうな顔して実はちゃっかりしているのかも。でも、それくらいならお安い御用だ。今までずっと似非行商人の旅暮らし

をしてきたから、一つの所に住みつくのは久しぶりだ。頑張って妖術を身につけるとするか。

49話「命蓮寺のなかまたち」

命蓮寺に居つくことになった俺は、まずこの寺に住む坊主たちと顔合わせをすることになった。と思ったら、この寺、妖怪しか住んでいないらしい。考えてみれば、人間と妖怪をともに受け入れるなんて思想に同調する人間なんていると思えない。なら、必然的に寺の運営は妖怪側がしていかなければならず、人間の坊主なんているはずがないというわけだ。

「みなさん、集まりましたね。今日はこの寺に来た新しいお友達を紹介します。では、葉裏さん、入ってください」

部屋の外で待たされていた俺は障子を開けて中に入る。俺は転校生か。まあ、いいや。そういうノリも嫌いじゃないぜ。

寺の一室に集まったのは、俺を除いて四人だ。結構規模の大きい寺なのに、これだけしか住み込みで働くものがいないとは。しかも、全員女の妖怪である。尼さんとはまた違うみたいだし、つくづくヘンテコな寺だ。

「では、葉裏さん、自己紹介を」

「俺の名は、乙賀忍者、頭目、乙賀葉裏！　最強の忍者目指して修行の旅をしている！　好きな食べ物はポテトサラダ！　趣味はフラダンス！　よろしくな！」

ダブルピース！

俺の素敵すぐる自己紹介に、一同唖然。一人だけ、なんか頭に花が咲いた奴がぱちぱちと拍手してくれた。照れるぜ。

「そ、それじゃあ、みなさんも一人ずつ自己紹介していきましょう！　では、まず私から。前にも名乗りましたが、聖白蓮です。葉裏さんが妖術をちゃんと覚えられるまで面倒を見ます。よろしくお願いしますね」

「はい、先生！　よろしく！」

俺は白蓮と握手して、手をぶんぶん振る。

「あ、あの私は寅丸星です！　聖の推薦で毘沙門天様の代理を仰せつかっている虎の妖怪です」

次に名前を教えてくれたのは、さっき拍手してくれた奴だった。虎の妖怪らしく、ショートカットの髪は黒と黄色の阪神カラーだった。頭の上に花が咲いている。気になる。

その右手には大事そうに宝塔を持っていた。

「あ、その宝塔、確かナズーリンが失くしたって言ってた……」

「あーあーあー！　それは言っちゃダメです！」

「……またですか、星。あとでお説教です」

「ひいい！」

ドジっ娘のようだ。すごむ白蓮を見て、寅丸はすごくガクブルしている。

「私も前に名乗ったが……ナズーリンだ。まあ、この寺の先輩妖

怪として色々と指導してあげよう、新入り君」

子ネズミ妖怪が生意気に上から目線で告げる。あー、あのミ●キーみたいなネズ耳をくにくにしてやりたい。

「雲居一輪だ。言っておくが、この寺に住まい以上、規則は守ってもらう。自分勝手な行動は許さないぞ」

はいはい、いいんちょさん。寺の前を掃除していた尼さん風妖怪である。もうここ、寺じゃなくて寺子屋にした方がいいんじゃない？　十分キャラがそろってるよ。

「そして、あともう一人……来い！　雲山！」

一輪が手に持つ金色の輪を掲げた。すると、その輪が光り、部屋に突風が吹き荒れた。ズバンっと障子の戸が開き、外に集まる白い塊。雲だ。雲が庭先に集まっている。その雲はもくもくと大きくなり、人の顔の形になる。いかめしい面をしたオヤジ顔が現れた。

「……」

「……」

なんかしゃべれよ。

「入道の雲山だ」

代わりに一輪が説明する。雲の入道ね。入道雲ね。

これで命蓮寺の住人は全部らしい。こんな個性的な奴ばかりだと、俺のキャラが薄れそうだぜ。ヒャッハー！

「それでは、葉裏さんに質問したいことがある人はいますか？」

「はい、ニンジャって何のことですか？」

寅丸は忍者がどういうものなのか知らない様子。他の面々もあまりよくわかっていないようだ。よかろう、この自称最強の忍者、乙賀葉裏が解説してやろう。

「説明しよう！　忍者とは！　文字通り、己を殺し、忍ぶ者。すなわち、枯れ葉に紛れる蝶のように、花に扮する蟷螂のように、夜の闇にとどまらず、市井の中に、城の天井裏に、火の中草の中森の中あの子のスカ【ＪＡＳＲＡＣ！】、とにかくありとあらゆるところに身を隠す最強の紳士！　そして、語尾に“ニンニン”とつける。それが忍者！」

「変態か」

一輪が一言でまとめてくれた。そうとも言う。

「たぶん、人間たちの間で草とか乱破とか言われている者たちのことだと思うよ。普段は農耕に従事し、有事の際は諜報活動などを主体とする集団みたいだけど」

ナズーリンが補足する。そうだったのか。俺、忍者なのに知らなかったよ。

「まあ、俺のスーパー忍術が役に立つ機会があれば、いつでも言ってくれ。修行がてら、大抵のことは協力してやるぜ」

「それは頼もしいですね。みなさん、葉裏さんと仲良くしてくださいね」

「まてい！　聖、ワシは納得がいかんぞ！」

だが、そこに和を乱す一声がかかる。それは庭先に召喚された雲山のものだった。

「聖よ！　このような身元もはっきりせぬ得体のしれない妖怪をこの寺にホイホイ迎え入れてよいのか！」

「ここは人も妖怪も平等なんだろ」

「はあああああっ！」

聞けよ。

雲山は気合いの声とともに、妖力を発する。その体がみるみる小さくなり、人型の形をとった。筋肉ムッキムキのボディビルダーのような大男の姿だった。髭もじゃだが、ハゲ散らかした頭は無駄に照り輝き、阿修羅のように厳しい顔つきで、肌の色は異様に白い。未着色のフィギュアみたいに。たぶん、雲だからだろう。

そして、全裸だった。チ〇コみせんな。まるで見せつけるような仁王立ち。俺と一輪以外の女性陣はさっと目をそらす。

「ほざけ、小娘。貴様、自分のことを忍者と言ったな」

「ああ、そうだが」

「ふ、片腹痛いわ。そのような出で立ちで忍者だと？」

「なに……？」

聞き捨てならんな。俺は正真正銘の忍者。その本物の忍者を前にして、忍者であることを笑うとは。出で立ちと言ったな。俺の格好のどこが問題なんだ。

「女の忍者、すなわちクノイチであれば、それ相応の服装というものがあるだろう！　例えば、このようにな！」

バッと雲山がどこからか、衣装を出す。それは、コスプレショップで売っていそうな露出度の高い服だった。ピンク色の上着は胸元が大きく開き、鎖帷子を思わせるアミアミがかかっている。スカートはパンツがモロ見えになりそうなくらい短い。肘上まで覆う手袋と、ニーソ並みの長さの靴下も、網タイツっぽいデザインになっている。

「雲山、もう帰って良いぞ」

一輪はそれだけ告げると、ぴしゃりと障子を閉めた。こうして、俺の顔合わせはつつがなく終了した。

50話「基礎から始める妖術テクニック入門編」

さっそく、俺は白蓮に妖術を教えてもらうことになった。白蓮の書斎のような部屋に連れて行かれる。巻物がたくさんある。

「妖術とは妖力を使ってなすあやかしの技です。キツネやタヌキの“化かし”などの幻術や、鬼火、怪力なども妖術のくくりに入ります」

「俺は怪力と妖力弾くらいしか使えないな」

「妖力弾は最も原始的な妖術ですね。これはある一定の妖力を持つ妖怪や妖精ならば、だれでも使うことができます。単純ながら奥が深い術です。これを極めるだけでもなかなかの戦力になると思いますよ？」

「まあ、それは平行してやっていくさ。俺が知りたいのは、俺に使えない妖術だ」

キツネが葉っぱを使って人を化かす術は見たことがあるが、同じ妖怪で妖力を持っている俺には使えない。キツネをとっちめて無理やり聞きだしても使えるとは思えない。結局、妖術ってものは、その妖怪の種族が生まれつき使えるものに使用が限定されるのではないか。

「その考え方はおおむね正しいです。その種族にしか使えない術というものがほとんどですから。私も妖術を身につけようと思ったときは、苦労しました」

「ん？　あんたも俺みたいに自分には使えない妖術を求めたのか？」

「はい。実は私も葉裏さんのように、始めは法力や陰陽術を妖力で転用して使えないかと考えていました。結果的には無理でしたが、成果はありましたよ。それが『妖術符』です」

白蓮によれば、陰陽道の式をヒントに作り出した符だという。この方法なら、符にこめた術式に合わせて妖術の効果を発動することができる。つまり、符の術式をいじれば自由に妖術の効果を変更できるのだ。

「でも、陰陽術って神道だろ。仏僧のお前がなんでそんなこと知ってんだよ」

「神も仏もみな平等です。関係ありませんよ」

そういえば、こいつはそういう奴だった。気にしないでおこう。俺は強くなれればそれでいい。

「ですが、妖術というものは、物体に宿すという性質に欠けるのです。妖力を符に込める工程が一番大変でした。複雑な術式を理解し、大量の妖力が必要になります。そう簡単に覚えられるような生易しいものではありませんよ」

「ううう……頑張ります！」

俺は自分が頭のいい奴だと思ったことはない。はっきり言ってバカだ。一度、俺を退治しようとした陰陽師からお札をぶんどって解

析しようとしたことがある。陰陽術の術式ですら、俺には理解不能だった。妖術符はそれよりもさらに難しいというのだ。不安はある。だが、これも永琳のため！　俺は自分の限界を超えてやる！

「よろしい。では、授業を始めましょう」

＊　＊　＊

「お、お……おおぉぉ……」

「ご主人、見てみろ。葉裏の頭から湯気が出ているぞ」

「よ、葉裏さん大丈夫ですか！？」

俺の頭は知恵熱で沸騰しそうだった。もう、勉強はしたくない。これでも俺は真剣に取り組んだのだ。居眠りなんてもってのほか。白蓮の言う複雑難解な術式に関することを一字一句聞きもらすまいと必死だった。だが、集中してその言葉を聞けば聞こうとするほど、その文字列を狂気がかき乱すのだ。いや、いいわけとかではなく。本当に発狂しそうになる。

思うに、俺は右脳型の考えに特化するようになってしまったのではないだろうか。ヴィジュアルで物事を直感的に理解することには恐ろしい適正がある。それが忍法『百見心眼』だ。だが、その代償として理論的な思考能力を失った。昔の俺はどちらかと言えば、左脳型だったはずだ。狂気の影響か、考え方が反転して性能がぶっ飛んでいる。

口からエクトプラズムを出そうとしている俺の両隣りには、ナズーリンと寅丸がいた。寅丸は蒸気をあげる俺の頭をぱたぱたあおいでくれている。今は夕飯の時間のようで、命蓮寺の皆が集まり、一つのちゃぶ台を囲っているのだ。

雲山もいる。安心しろ、服は着ていた。作務衣のようなものを着ている。図体がでかいので、無駄に場所をとる。圧倒的な存在感だ。てか、こいつも飯を食うのかよ。霞でも食ってろ。

白蓮がごはんをよそう。最初についだのは、雲山の茶碗だ。

「白蓮って、一番偉いんだろ？　なんで奥さんポジションなの？　あと雲山が無駄に偉そうなんだけど」

「ふんっ！」

「あがーっ！」

雲山の手がゴムのように伸びて、俺の顔面にめり込むほどのパンチを食らわせる。なんで突然殴ったんだ、こいつ。

「家長に一番に飯をつぐ！　それが伝統的な日本の食卓だあ！」

「だからオメーより白蓮の方が偉いだろうが！」

「まあまあ、ふたりとも喧嘩はやめましょう。はい、ごはんの準備もできましたよ。それじゃあ、手を合わせてください」

「「「いただきます」」」

今夜の夕飯のメニューは、雑穀粥、おすいもの、山菜のおひたし、きゅうりの酢の物、以上。質素だなあ。すいものなんて、ごみくずみたいな具しか入ってなくて白湯のごとき薄味だ。なんか御馳走になるのが申し訳ない。俺は光合成ができるので、食べ物は食べなくてもお腹が空かないのだ。

「いくら寺だからって、もう少しマシなもの食えないのか？」

「うちの寺には借金に苦しむ信者が多くてな。姐さんは考えなしにそういう奴らの肩代わりをするんだ。寅丸の能力でどうにかやっているが、それでも家計は火の車。文句があるなら食わなくていいぞ」

一輪がぴしゃりと言い放つ。借金の肩代わりまでするなんていい人すぎるというか、ただのバカだろ。絶対、利用されてるだけだって。

くぅ～……

「うぐっ！」

隣からかわいいお腹の鳴る音が聞こえた。ナズーリンの方だ。

「もー、ナズーリンはかわいいなあ。なでなで」

「ひとのおなかを気安く撫でまわさないでくれるかな。同情するなら食糧をくれたまえ」

「しょうがない。はい、ナズーリン、あーん」

「そういうのいらない。普通にちょうだい」

がお～……

い、いま、すげえ音が聞こえたぞ。音のした方向には寅丸がいた。顔を赤くしてうつむいている。まさか腹の音なのか。

そりゃあ、こんな少ない飯で育ち盛りの妖怪たちの腹が満たせるわけがないよな。人間を丸飲みしたいお年頃だろうに。

「白蓮のごはんだけ量が少なくないか？」

「ええ、私は物を食べなくても問題ありません。本当はみなさんに私の分も食べてほしいのですが、遠慮されてしまうので」

なんて心温まる貧乏一家。涙が出そう。そこで、雲山が自分の茶碗を白蓮に差しだす。まさか、自分の分を白蓮に、

「聖、おかわり」

「てめえはもっと遠慮しろ！」

俺は箸を雲山に投げつけた。一本ずつ右目と左目に突き刺さる。

「あんぎゃあああ！！」

「こらこら、葉裏さん、行儀が悪いですよ」

目に箸が刺さったことは注意しないのか。まあ、雲だし、大丈夫だろ。

のたうちまわる雲山を放置し、質素だが心温まる夕飯を楽しんだ。

５０話「基礎から始める妖術テクニック入門編」（後書き）

ストックが尽きましたので、これにて連投祭りは終了です（泣

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5878z/

東方――亀兎忍――

2011年12月24日05時51分発行